

授業科目名	基礎演習		
配当年次	1年次	配当学期	第1～第2クォーター（通）
クラス数	4クラス	単位数	2単位
必修・選択等の別	必修	授業の方法	演習
担当教員	吉田 雄介 / 田保 顕 / 松尾 有起 / 有國 明弘		
科目区分	基礎科目群(自学自修)		
授業概要	この演習では、本学での学びに必要な基礎的技能を養うとともに、社会人の一般常識の必要性を理解し、「自学自修の態度」も身につける。まず、本学で効果的な学修ができるように、アカデミック・スキルズとして、ノートテイキング、リーディングスキル、ライティングスキルなどの学び方を修得する。次に、生涯に渡るキャリア形成の一助となり、本学が推薦する「キャリア形成必読書」のうち、教員が指定する一般常識関連の書籍1冊の読み方を修得する。演習全体を通し、本学の学生に求められる資質である「人間力」(human resourcefulness)の涵養について、目安の1つとなる「パーソナリティの成長次元」という基礎概念を理解したうえで、自らのキャリア形成を有意義なものにする学び方を考える。なお本演習では、グループワークを適宜取り入れて学修を行う。		
関連するディプロマポリシー	DP1 自学自修の態度形成		
キーワード	アカデミック・スキル、自学自修、協働性、主体性、キャリアデザイン、キャリア形成必読書		
到達目標	【到達目標1】本学での学修に必要なスタディ・スキルズが何かを説明できる。 【到達目標2】ノートを効率的かつ効果的にとることができる。 【到達目標3】要点を把握しながら文献を読むことができる。 【到達目標4】適切な形式でレポート等を作成することができる。 【到達目標5】「パーソナリティの成長次元」と「キャリア形成」の関係を説明できる。 【到達目標6】指定された「キャリア形成必読書」の読み方を説明できる。		
授業計画	第1回：オリエンテーション：履修登録・時間割・受講態度について 第2回：スタディ・スキルズとは(テキスト第1章) 第3回：ノート・テイキング(テキスト第2章) 第4回：リーディングの基本(テキスト第3章) 第5回：要約・感想・意見を書く(テキスト第4章) 第6回：情報収集の方法(テキスト第5・6章) 第7回：レポート作成の基本(テキスト第8章) 第8回：分かりやすい表現方法(テキスト第9章) 第9回：プレゼンテーションの基本スキル(テキスト第11章) 第10回：分かりやすいプレゼンテーション(テキスト第12章) 第11回：「キャリア形成必読書」の読み方① 本の指定と読み方 第12回：「キャリア形成必読書」の読み方② 内容の解説 第13回：「キャリア形成必読書」の読み方③ 感想の報告 第14回：パーソナリティの成長とは？(解説とグループワーク) 第15回：キャリア形成とは？(解説とグループワーク)		
成績評価	評価の種類	評価割合(%)	評価基準
	ミニッツペーパー	40	【到達目標3～6】の達成度を確認するため、毎回の授業でミニッツペーパーの提出を求める。学修した課題を十分に理解し、適正な日本語表現等によって自らの考えを正確に他者に伝えられているかについて評価する。ミニッツペーパーの書き方や詳しい評価基準は、授業で説明する。
	小レポート	60	【到達目標1～4】の達成度を確認するため、毎回の授業で小レポートの提出を求める。授業内容を正しく理解できているかについて評価する。詳しい評価基準は、授業で説明する。
テキスト	学習技術研究会 著『知へのステップ 第5版—大学生からのスタディ・スキルズ』くろしお出版(2019年) 1,800円+税		
参考書	授業で適宜紹介する。		
授業時間外学修(事前・事後学修等)	1. 事前学修として、次の授業テーマに該当するテキストの章を熟読し、その内容を要約しておくこと(90分)。 2. 事後学修として、指示された課題について、指定の要領で小レポートを作成し、次回までに提出すること(90分)。		
課題に対するフィードバックの方法	1. ミニッツペーパーについては、授業で適宜フィードバックされる。 2. 小レポートについては、提出後の次回授業においてフィードバックされる。		
受講ルール等	1. 私語は授業の円滑な運営を妨げ、他の学生の迷惑となるので、厳禁とする。 2. グループワークや複数回の継続的なテーマがあるため、無断での遅刻や欠席は認めない。 3. 授業の到達目標を確実に達成するため、課題に真剣に取り組み、授業の事前・事後学修を欠かさず行うこと。 4. 授業の進め方やその他の受講ルールは、初回の授業で説明される。		
連絡先(質問等)	質問や連絡などについては、オフィスアワーに研究室で受け付ける。また、e-mailによる質問や連絡も、常時受け付ける。研究室の場所、オフィスアワーの時間帯およびメールアドレスは、初回の授業で提示する。		

授業科目名	地理学		
配当年次	1年次	配当学期	第1クォーター
クラス数	1クラス	単位数	2単位
必修・選択等の別	必修	授業の方法	講義
担当教員	吉田 雄介		
科目区分	基礎科目群(思考法)		
授業概要	この授業では、人文地理学の基本的な事項・知識として修得すべき内容について、具体的な事例を紹介しながら講じる。まずは、基本的な地理学の考え方を学修したのち、日本における人口問題や農村・都市における諸問題、農業をはじめとした産業にかかわる地理学研究の基本的な概念や成果を理解する。さらに、現在の景観を形成してきた過去の景観や人々の営みやまなざしについても学び、各地で注目されているさまざまな観光現象について、地理学的な視点から得られた知見を把握する。また、近年盛んとなっている地理情報システム(Geographic Information System:GIS)や、防災・減災の地理学についての取り組みが紹介される。なお、授業は講義形式で展開される。		
関連するディプロマポリシー	DP2 思考法の修得		
キーワード	地形図、人口問題、村落地理学、農業地理学、グリーンツーリズム、都市地理学、経済地理学、城下町、歴史地理学、景観、文化地理学、文化的景観、場所イメージ、GIS、防災・減災		
到達目標	【到達目標1】人文地理学の基本的な概念・思考法を理解し、説明することができる。 【到達目標2】日本の各地の地理的特徴・地域の構造を理解し、説明することができる。 【到達目標3】授業で身につけた地理学の見方を、さまざまな研究課題に応用できる。		
授業計画	第1回：はじめに： 人文地理学の視点 第2回：人口の地理 第3回：農業の地理① 農業と食の現状 第4回：農業の地理② 農山漁村の抱える問題 第5回：工業の地理 第6回：都市の地理① 都市の空間構造 第7回：都市の地理② 郊外と大都市圏 第8回：小売業・サービス業の地理 第9回：歴史都市の空間構造 第10回：観光の地理① 観光の現状と観光資源 第11回：観光の地理② 観光地の景観形成とイメージ 第12回：人文地理学と地図 第13回：地理学の発展① GISとデジタルマップ 第14回：地理学の発展② 防災と減災 第15回：学修到達度の確認および講義内容の総括		
成績評価	評価の種類	評価割合(%)	評価基準
	論述試験	60	【到達目標3】の達成度を確認するため、論述試験を行う。授業の理解度について評価する。詳しい評価基準は、授業で説明する。
	小レポート	40	【到達目標1・2】の達成度を確認するため、毎回の授業で小レポートの提出を求める。詳しい評価基準、課題の要点については、授業で説明する。
テキスト	使用しない。		
参考書	稲垣綾 著『現代社会の人文地理学』古今書院(2014年) 2,000円+税 その他、授業で適宜紹介する。		
授業時間外学修(事前・事後学修等)	1. 事前学修として、次の授業のテーマに関する情報収集を行い、関連文献に目を通しておくこと(90分)。 2. 事後学修として、授業で指示された課題について、指定の要領で小レポートを作成し、次回までに提出すること(90分)。		
課題に対するフィードバックの方法	1. 論述試験については、試験前に採点基準が提示され、試験後に模範解答が公表される。 2. 小レポートについては、担当教員が確認したのち、担当教員のコメントを付して返却される。		
受講ルール等	1. 私語は授業の円滑な運営を妨げ、他の学生の迷惑となるので、厳禁とする。 2. 授業の到達目標を確実に達成するため、課題に真剣に取り組み、授業の事前・事後学修を欠かさず行うこと。 3. 授業の進め方や成績評価、詳しい受講ルールについては、初回の授業で説明される。		
連絡先(質問等)	質問や連絡などについては、オフィスアワーに研究室で受け付ける。また、e-mailによる質問や連絡も、常時受け付ける。研究室の場所、オフィスアワーの時間帯およびメールアドレスは、初回の授業で提示する。		

授業科目名	文化論		
配当年次	1年次	配当学期	第2クォーター
クラス数	1クラス	単位数	2単位
必修・選択等の別	必修	授業の方法	講義
担当教員	高橋 紀穂		
科目区分	基礎科目群(思考法)		
授業概要	文化とは何か？学問において文化はどう捉えられ、理解することができるのか？この授業では、日常的によく用いられるものの、捉えにくい「文化」について理解することを目指す。授業は、社会学・文化人類学の視点を軸に据えて展開する。文化研究の対象となり得るモノゴトは何であって、その対象をどう捉えるとどういった分析・考察ができるのか、という思考のプロセスを、具体的事例を織り交ぜながら示していく。授業は原則、講義形式で展開されるが、グループワークによるディスカッションで、学生が各テーマについて思考し、それをアウトプットする機会も設ける。授業の後半の回では、授業進度もみながら、各回のテーマ(テキスト)について要約・発表してもらうこともある。		
関連するディプロマポリシー	DP2 思考法の修得		
キーワード	文化、日常、大衆文化(マス・カルチャー)、真正性(オーセンティシティ)、商品化、思考法		
到達目標	【到達目標1】 文化とは何かを説明できる。 【到達目標2】 身近な事象について文化論的視点から説明できる。 【到達目標3】 文化論の思考法を日常生活や他の研究等で応用できる。		
授業計画	第1回: はじめに: 文化とは何か? — ポップカルチャーと文化 第2回: 文化とは何か? — 近代西欧における文化概念、文化概念の拡散と20世紀的変容 第3回: 遊びから文化へ — 文化は遊ぶ、遊びの諸類型と近代 第4回: 遊びから文化へ — 日本における遊び文化、ディスカッション 第5回: 文明開化から文化主義へ — 「文明」のなかの「文化」、大正文化主義の勃興 第6回: 文明開化から文化主義へ — 労働者階級と大衆文化創造の主体、ディスカッション 第7回: 文化国家の挫折とマス・カルチャー — 敗戦・占領と「文化国家」の理念、大衆天皇制とマスカルチャーの時代 第8回: 文化国家の挫折とマス・カルチャー — 見田社会学と大衆社会の文化的基底、ディスカッション 第9回: 資本としての文化 第10回: 差異としての文化 第11回: ジェンダーの政治文化 第12回: ネットワーキングする文化 第13回: パフォーマンスする文化 第14回: アーカイビングする文化 第15回: おわりに: 学修到達度の確認および講義内容の総括		
成績評価	評価の種類	評価割合(%)	評価基準
	論述試験	60	【到達目標2・3】の達成度を確認するため、授業全体を試験範囲として論述試験を行う。授業の理解度について評価する。詳しい評価基準は、授業で説明する。
	小レポート	40	【到達目標1】の達成度を確認するため、毎回の授業で小レポートの提出を求める。詳しい評価基準、課題の要点については、授業で説明する。
テキスト	授業で適宜教材を配布する。		
参考書	授業で適宜紹介する。		
授業時間外学修(事前・事後学修等)	1. 事前学修として、次回の授業内容に該当するテキストの範囲を熟読し、内容を要約しておくこと(90分)。 2. 事後学修として、授業で指示された課題について、指定の要領で小レポートを作成し、次回までに提出すること(90分)。		
課題に対するフィードバックの方法	1. 論述試験については、試験前に採点基準が提示され、試験後に模範解答が公表される。 2. 小レポートについては、担当教員が確認したのち、担当教員のコメントを付して返却される。		
受講ルール等	1. 私語は授業の円滑な運営を妨げ、他の学生の迷惑となるので、厳禁とする。 2. 授業の到達目標を確実に達成するため、課題に真剣に取り組み、授業の事前・事後学修を欠かさず行うこと。 3. 授業の進め方や成績評価、詳しい受講ルールについては、初回の授業で説明される。		
連絡先(質問等)	質問や連絡などについては、オフィスアワーに研究室で受け付ける。また、e-mailによる質問や連絡も、常時受け付ける。研究室の場所、オフィスアワーの時間帯およびメールアドレスは、初回の授業で提示する。		

授業科目名	ビジネスコミュニケーション		
配当年次	1年次	配当学期	第2クォーター
クラス数	1クラス	単位数	2単位
必修・選択等の別	選択必修	授業の方法	講義
担当教員	濱島 朋子 (実務経験を有する教員)		
科目区分	基礎科目群(思考法)		
授業概要	本講義では、組織内コミュニケーションを中心に、ビジネスシーンや臨地実務実習で求められるスキルを体系的に学ぶことを目指す。現代のビジネス環境では、円滑なコミュニケーションが組織の成果やキャリアの成否を左右する重要な要素となっている。プレゼンテーションと発表の違い、第一印象の重要性、ソーシャルスキルの基本を理解し、ビジネスマナーや電話応対、ビジネス文書作成の基礎を習得する。また、ミスコミュニケーションの原因をケーススタディで分析し、グループワークや1分間スピーチを通じて、関係構築を円滑にするコミュニケーション能力を磨く。さらに、組織内での報告・連絡・相談の適切な方法を学び、自己PRや面接対策を通じて、社会で活躍するための基礎を築くことを目指す。		
関連するディプロマポリシー	DP2 思考法の修得		
キーワード	第一印象、ソーシャルスキル、ミスコミュニケーション、ビジネス日本語、PDCAサイクル、自己PR		
到達目標	【到達目標1】基本的なビジネスマナーやソーシャルスキルを習得し、実際のビジネスシーンで効果的に実践できるようになる。 【到達目標2】コミュニケーションスキルを強化し、さまざまなビジネスシーンで適切な対応や問題解決ができる能力を身につける。 【到達目標3】面接対応を含むビジネスコミュニケーションの知識と技量を体系的に学び、実際の職場で応用できるようにする。		
授業計画	第1回：オリエンテーションとビジネスコミュニケーションの重要性 第2回：初対面で好印象を残す自己紹介とコミュニケーションの基本 第3回：第一印象の形成とソーシャルスキルの基本 第4回：ビジネスコミュニケーションの基本マナーと立ち居振舞い 第5回：ケーススタディ①(ミスコミュニケーションの原因と対策) 第6回：ビジネス日本語リテラシーと効果的なコミュニケーション 第7回：電話応対とビジネス文書の基本(レター・メール) 第8回：伝わる話し方と内容の構築①(1分間スピーチ) 第9回：伝わる話し方と内容の構築②(1分間スピーチとフィードバック) 第10回：ビジネスコミュニケーションの実践(報告・連絡・相談とPDCAサイクル) 第11回：ケーススタディ②(グループワークでの意思伝達力と論理的表現力) 第12回：自己分析と質問シートを活用した面接対策① 第13回：自己分析と質問シートを活用した面接対策② 第14回：自己PRを中心としたプレゼンテーションとフィードバック 第15回：学習到達度の確認および総括		
成績評価	評価の種類	評価割合(%)	評価基準
	小レポート	40	【到達目標1・2】の達成度を確認するため、毎回の授業で小レポートの提出を求める。詳しい評価基準は、授業で説明する。
	論述試験	60	【到達目標1～3】の達成度を確認するため、論述試験を行う。授業の理解度について評価する。詳しい評価基準は、授業で説明する。
テキスト	使用しない。授業で適宜プリントを配布する。		
参考書	授業で適宜紹介する。		
授業時間外学修(事前・事後学修等)	1. 事前学修として、授業で示された課題や参考書に関する情報を収集し、自分なりの考えをまとめておくこと(90分)。 2. 事後学修として、小レポートの提出内容に関し、各自で振り返り、PDCAをしてノートにまとめること(90分)。		
課題に対するフィードバックの方法	1. 小レポートについては、提出した次の授業においてフィードバックされる。 2. 論述試験については、試験前に採点基準が提示され、試験後に模範解答が公表される。		
受講ルール等	1. 私語は授業の円滑な運営を妨げ、他の学生の迷惑となるので、厳禁とする。 2. 授業の到達目標を確実に達成するため、課題に真剣に取り組む、授業の事前・事後学修を欠かさず行うこと。 3. 授業の進め方や成績評価、詳しい受講ルールについては、初回の授業で説明される。		
連絡先(質問等)	質問や連絡などについては、オフィスアワーに研究室で受け付ける。また、e-mailによる質問や連絡も、常時受け付ける。オフィスアワーの時間帯およびメールアドレスは、初回授業に提示する。		

授業科目名	企業の社会的責任		
配当年次	1年次	配当学期	第4クォーター
クラス数	1クラス	単位数	2単位
必修・選択等の別	選択必修	授業の方法	講義
担当教員	多田 やす子 (実務経験を有する教員)		
科目区分	基礎科目群(思考法)		
授業概要	企業が事業活動が続けていくうえでは、従業員だけでなく、顧客、取引先、消費者、株主、地域社会、自治体や行政など多様な利害関係者と関わっている。こうした利害関係者と良好な関係を保ちながら事業活動を継続していくことが企業の社会的責任である。本講義では、利益の追求にとどまらず、納税や法令順守、安心・安全な商品やサービスの提供、環境への取り組みなど多様な社会的責任の果たし方を学ぶことで、企業の社会的責任とは何か、組織とは何かを考察する。		
関連するディプロマポリシー	DP2 思考法の修得		
キーワード	企業の社会的責任(CSR活動)・ゴーイングコンサーン・コーポレートガバナンス・ステークホルダー・経営戦略・企業価値		
到達目標	【到達目標1】 企業の社会的責任について学んだ知識を説明できる。 【到達目標2】 企業活動における組織の在り方・戦略的取組の方法が説明できる。 【到達目標3】 CSR活動による期待できる成果が説明できる。		
授業計画	第1回: 企業の社会的責任(基礎編) 第2回: 企業概論(経済) 第3回: 企業概論(環境) 第4回: 企業概論(社会) 第5回: 企業活動(ゴーイングコンサーン) 第6回: 企業活動(コーポレートガバナンスとステークホルダー) 第7回: 法令順守の重要性 第8回: 企業の社会的責任(実践編) 第9回: 企業活動(組織論) 第10回: 企業活動(社会的パフォーマンス) 第11回: 企業活動(経済的パフォーマンス) 第12回: CSR活動と経営戦略 第13回: CSR活動による社会貢献 第14回: CSR活動による企業価値の向上 第15回: 企業の社会的責任(総論)		
成績評価	評価の種類	評価割合(%)	評価基準
	小レポート	40	【到達1～3】の達成度を確認するために、2回目以降の講義前に前回の授業で学んだ小レポートの提出を求める。課題に対して適切な内容・記述であるか評価する。詳しい評価基準は授業で説明する。
	記述試験	60	【到達1～3】の達成度を確認するために、記述試験を行う。授業で説明された企業の社会的責任について用語や考え方の理解度について評価する。詳しい評価基準は授業で説明する。
テキスト	パワーポイントにて作成した資料の配布。		
参考書	授業で適宜紹介する。		
授業時間外学修(事前・事後学修等)	1. 事前学修として、授業で指示された課題について、指定の要領で小レポートを作成し、次回授業前に提出すること(90分)。 2. 事後学修として、授業で指示された課題に従って講義ノートを整理すること(90分)。		
課題に対するフィードバックの方法	1. 小レポートについては、提出後の次回授業においてフィードバックされる。 2. 記述試験については、試験前に採点基準が提示され、試験後に模範解答が公表される。		
受講ルール等	1. 私語は授業の円滑な運営を妨げ、他の学生の迷惑となるので、厳禁とする。 2. 授業の到達目標を確実に達成するため、課題に真剣に取り組み、授業の事前・事後学修を欠かさず行うこと。 3. 授業の進め方や成績評価、詳しい受講ルールについては、初回の授業で説明される。		
連絡先(質問等)	質問は、適宜、授業中に教室で受け付ける。		

授業科目名	法と社会		
配当年次	1年次	配当学期	第4クォーター
クラス数	1クラス	単位数	2単位
必修・選択等の別	選択必修	授業の方法	講義
担当教員	吉川 友規		
科目区分	基礎科目群(思考法)		
授業概要	本講義では、現代社会における法律による規制の役割と機能を概説し、社会で働く上で必要となる法律の基礎的な知識を身につけ、運用することを目標とする。講義では、社会生活を営む上で、教養として知っておくべきである法律(憲法、民法、会社法、刑法、行政法など)に関するテーマについて扱う。なお、この授業は基本的には講義形式で進行するが、具体的な事例(過去の事例、時事問題)を提示し、その事例の法的問題、解決方法についてグループワークを行う時間を適宜設ける。		
関連するディプロマポリシー	DP2 思考法の修得		
キーワード	法学		
到達目標	【到達目標1】観光に関係する仕事をする上で、把握しておくべき法律の概念・専門用語を他の人に説明できる。 【到達目標2】新聞などで問題となっている事件の法律上の問題がどこにあるのか指摘することができる。 【到達目標3】仕事、プライベートで自分の行う行為の法的性質を他の人に簡潔に説明することができる。		
授業計画	第1回: 社会と法律の関わり 第2回: 法律の意義と役割～なぜ人は法律に従う・従わなければならないのか～ 第3回: 憲法① 「人権」とは何か～憲法の原理, 基本的人権～ 第4回: 憲法② 法律による権利の制限～権利の限界～ 第5回: 民法① 日常生活と法律～契約, 損害賠償～ 第6回: 民法② 家族と法律～結婚, 家族関係～ 第7回: 会社法 会社と法律～株式会社の仕組み～ 第8回: 労働法 働くことと法律～労働契約, 不当解雇, 給与の不払い～ 第9回: 行政法 行政活動と法律～行政による規制～ 第10回: 環境法 環境保護と法律 第11回: 刑事法① 犯罪と刑罰～犯罪とは何か, なぜ処罰されるのか～ 第12回: 刑事法② 刑事手続と法律～捜査, 裁判～ 第13回: 国際法 国際社会と法律 第14回: 旅行と法律 第15回: 学習到達度の確認及び授業内容の総括		
成績評価	評価の種類	評価割合(%)	評価基準
	小レポート	30	【到達目標1・2】の達成度を確認するために、各回の授業内容に関係する事例について小レポートの提出を求める。事例の問題点を正しく指摘し、論理的な解決が図られているかを基準とする。
	期末レポート	70	【到達目標1～3】の達成度を確認するためにレポートの提出を求める。基礎的な知識を理解しているか、問題を正確に指摘し、それを論理的・明快に説明することができているかを評価する。詳しい評価基準と評価ルーブリックについては授業中に説明する。
テキスト	なし。ただし、法律の条文を確認する方法を用意しておくこと(初回に詳しく説明する)。		
参考書	授業で適宜紹介する。		
授業時間外学修(事前・事後学修等)	1. 事前学修として、次の授業で扱う事例について、自分の考えをまとめておくこと(90分) 2. 事後学修として、授業中に配布した資料などを参考に、授業の内容を復習すること(90分)		
課題に対するフィードバックの方法	1. 小レポートについては、次の授業においてその内容をフィードバックする。 2. 期末レポートについては、全体向けの講評を公開するほか、添削したものを返却する。		
受講ルール等	1. 私語は授業の円滑な運営を妨げ、他の学生の迷惑となるので、厳禁とする。 2. 授業の到達目標を確実に達成するため、課題に真剣に取り組み、授業の事前・事後学修を欠かさず行うこと。 3. 授業の進め方や成績評価、詳しい受講ルールについては、初回の授業で説明される。		
連絡先(質問等)	質問は、授業終了後に教室で受け付ける。		

授業科目名	災害と防災の科学		
配当年次	1年次	配当学期	第4クォーター
クラス数	1クラス	単位数	2単位
必修・選択等の別	選択必修	授業の方法	講義
担当教員	長谷川 修一		
科目区分	基礎科目群(思考法)		
授業概要	日本はプレート境界の地震火山列島である。また、夏には台風や梅雨前線による豪雨災害列島となり、冬季の日本海側は豪雪列島となる。このような災害列島における安全な生活のためには、地域の災害特性を知り、防災情報や防災施設を活用して、身の安全を確保する必要がある。本講義では、日本における主要な災害の発生メカニズムと被害の特徴、施設による防災・減災対策、ハザードマップや防災気象情報の入手と活用方法、災害時の避難方法、災害後の対処方法(縮災)、災害遺構等を学び、災害時の危機管理能力を育成する。		
関連するディプロマポリシー	DP2 思考法の修得		
キーワード	観光地 災害特性 ハザードマップ 気象情報 災害情報 避難 災害遺構 ジオパーク		
到達目標	【到達目標1】日本における自然災害の特徴と対策を説明することができる。 【到達目標2】気象情報、災害情報の入手し、適切な避難行動をとることができる。 【到達目標3】災害と観光を結び付けて考えることができる。		
授業計画	第1回: 日本の災害特性:日本の絶景は自然災害によって造られた 第2回: 自然災害を知る①:地震・津波災害の特徴と対策 第3回: 自然災害を知る②:火山災害の特徴と対策 第4回: 自然災害を知る③:風水害の特徴と対策 第5回: 自然災害を知る④:土砂災害の特徴と対策 第6回: 自然災害を知る⑤:雪害の特徴と対策 第7回: 災害時の危機管理①:ハザードマップの入手と活用方法 第8回: 災害時の危機管理②:防災気象情報の入手と活用方法 第9回: 災害時の危機管理③:災害発生後の被害情報の入手方法 第10回: 災害時の危機管理④:災害時の危機管理と避難方法(クロスロードによるグループワーク) 第11回: 災害と観光①:ジオパークとジオツーリズム 第12回: 災害と観光②:災害遺構と教育観光 第13回: 災害と観光③:地域の名産物と災害 第14回: 災害と観光④:防災と観光をセットにしたプラハセ 第15回: 講義内容の総括		
成績評価	評価の種類	評価割合(%)	評価基準
	論述試験	70	【到達目標1～3】の達成度を確認するため、論述試験を行う。授業で説明された災害に対する考え方や行動に関する理解度について評価する。詳しい評価基準は、授業で説明する。
	小レポート	30	【到達目標1～3】の達成度を確認するため、毎回の授業で小レポートの提出を求める。課題に対して適切な内容・記述であるかを評価する。詳しい評価基準は、授業で説明する。
テキスト	使用しない。		
参考書	授業で適宜紹介する。		
授業時間外学修(事前・事後学修等)	1. 事前学修として、授業で指示された課題について、指定の要領で小レポートを作成し、次回までに提出すること(90分)。 2. 事後学修として、授業で指示された課題に従って講義ノートを整理事務すること(90分)。		
課題に対するフィードバックの方法	1. 論述試験については、試験前に採点基準が提示され、試験後に模範解答が公表される。 2. 小レポートについては、提出後の次回授業においてフィードバックされる。		
受講ルール等	1. 私語は授業の円滑な運営を妨げ、他の学生の迷惑となるので、厳禁とする。 2. 授業の到達目標を確実に達成するため、課題に真剣に取り組む、授業の事前・事後学修を欠かさず行うこと。 3. 授業の進め方や成績評価、詳しい受講ルールについては、初回の授業で説明される。		
連絡先(質問等)	質問は、授業終了後に教室で受け付ける。		

授業科目名	介助実務実習		
配当年次	1年次	配当学期	第4クォーター
クラス数	1クラス	単位数	1単位
必修・選択等の別	必修	授業の方法	実習
担当教員	堀内 有美 (実務経験を有する教員)		
科目区分	基礎科目群(思考法)		
授業概要	この授業では、ボディメカニクス(身体力学)にもとづき、介助を必要とする人と介助をする人との両者にとって安全かつ安楽な介助技術を修得する。そのさい、外出時における適切な介助の知識と技術を中心に学ぶ。また、技術だけでなく、高齢者や障害者福祉のサービス、高齢者や疾病を持つ人(視覚障害、知的障害、全身性障害)の心理状態、身体機能や生活障害と環境との関係などについての基礎知識も学修する。それらの学修を通して、介助を必要とする人との基本的なコミュニケーション技術やリスクマネジメントについての理解を深める。なお、この授業は、学生が実際に介助の動作を行うなど、実技を中心とした実習形式で展開する。		
関連するディプロマポリシー	DP2 思考法の修得		
キーワード	介護、福祉、環境、安全、安楽、リスクマネジメント、ボディメカニクス、自立支援		
到達目標	【到達目標1】高齢者および障害者に関する基礎的事項の説明ができる。 【到達目標2】介助が必要な人のリスクマネジメントについて説明できる。 【到達目標3】介助が必要な人と基本的なコミュニケーションをとることができる。 【到達目標4】ボディメカニクスを意識しながら、外出時の基本的な介助ができる。 【到達目標5】授業で学修する福祉用具を、正しく利用することができる。		
授業計画	第1回：高齢者のくらしの理解 第2回：障害のある人のくらしの理解 第3回：移動の介護① 部屋の中での介護 第4回：移動の介護② 外出時の介護 第5回：食事の介護 第6回：身支度の介護 第7回：排泄の介護 第8回：福祉用具の理解 第9回：障害者の介護① 視覚障害者 第10回：障害者の介護② 知的障害者 第11回：障害者の介護③ 全身性障害者(身体障害者) 第12回：障害者の介護④ 心身障害のケースを想定した疑似体験 第13回：高齢者疑似体験 第14回：介護におけるリスクマネジメント 第15回：学修到達度の確認および講義内容の総括		
	評価の種類	評価割合(%)	評価基準
	論述試験	40	【到達目標1・2】の達成度を確認するため、論述試験を行う。授業で説明した介護に関する知識(介護を必要とする人の心理状態、身体機能および生活障害などの環境に関する基礎知識)の理解度について評価する。詳しい評価基準は、授業で説明する。
	実技試験	60	【到達目標3～5】の達成度を確認するため、実技試験を行う。授業で学修した実技が正しく行えるかを評価する。詳しい評価基準は、授業で説明する。
テキスト	必要に応じて授業で指示する。		
参考書	授業で適宜紹介する。		
授業時間外学修(事前・事後学修等)	1. 事前学修として、次の授業で扱うテーマに関心を持ち、関連する記事や文献等に目を通しておくこと。 2. 事後学修として、前回の授業で学修した実技が確実に正しく行えるよう練習すること。		
課題に対するフィードバックの方法	1. 論述試験については、試験前に採点基準が提示され、試験後に模範解答が公表される。 2. 実技試験については、試験後に、授業で模範解答と要点が解説される。		
受講ルール等	1. 私語は授業の円滑な運営を妨げ、他の学生の迷惑となるので、厳禁とする。 2. この授業では、学生がペアやグループを組み実技を行うことがある。円滑な授業運営のため、積極的な態度で行うこと。 3. 授業の到達目標を確実に達成するため、課題に真剣に取り組み、授業の事前・事後学修を欠かさず行うこと。 4. 授業の進め方や成績評価、詳しい受講ルールについては、初回の授業で説明される。		
連絡先(質問等)	質問は、授業終了後に教室で受け付ける。		

授業科目名	観光学概論		
配当年次	1年次	配当学期	第1クォーター
クラス数	1クラス	単位数	2単位
必修・選択等の別	必修	授業の方法	講義
担当教員	安村 克己		
科目区分	職業専門科目群(学術) 観光学入門科目		
授業概要	この授業では、現代観光の関連領域に生じる現実の中から、観光振興専門職の基礎知識として身につけるべき主要な観光事象と、それらの事象を捉える理論や方法を講義形式で学ぶ。現代観光の関連領域を学修するにあたり、まず、「観光とは何か」(観光の定義と歴史)を理解する。次に、現代観光の領域全体を、「観光事象と社会が影響を及ぼし合う領域」(観光と社会・経済・文化・環境等の関連領域)と、「観光事象を支える仕組みの領域」(観光と国際機関・観光行政・観光事業等の関連領域)との2つに分け、それぞれの領域にアプローチした観光学の研究成果を修得する。		
関連するディプロマポリシー	DP3 観光の理論と知識の理解		
キーワード	マス・ツーリズム、トーマス・クックと旅行業、グランドツアー、伊勢参宮、見えざる輸出、エコツーリズム、地域主導型観光、内発的観光地づくり、観光欲求・観光動機、観光資源、文化変容、アクセシブル・ツーリズム、ホスピタリティ、世界観光倫理憲章、持続可能な観光と社会、観光労働と持続可能性		
到達目標	【到達目標1】 授業で理解した観光学の考え方を説明できる。 【到達目標2】 授業で学んだ観光に関する知識を説明できる。 【到達目標3】 授業で身につけた観光学の考え方を、いろいろな研究課題に応用できる。		
授業計画	I. 観光とは何か 第1回: 観光の概念と構造(テキスト第1章) 第2回: 観光行動の特性(テキスト第12章) 第3回: 観光の歴史(テキスト第2章・第3章) II. 観光と社会・経済・文化・環境等 第4回: 観光と地域社会(テキスト第9章) 第5回: 観光と経済(テキスト第6章) 第6回: 観光と文化(テキスト第14章) 第7回: 観光と自然環境(テキスト第8・13章) III. 観光事業を支える仕組み 第8回: 観光の政策と機関(テキスト第4章) 第9回: 観光と教育・福祉(テキスト第15章) 第10回: 観光と交通(テキスト第16章) 第11回: 観光と宿泊(テキスト第17章) 第12回: 観光と旅行業(テキスト第19章) 第13回: 観光の持続可能性(テキスト第10章) 第14回: 観光振興専門職の労働と人材(テキスト第20章) 第15回: 学修到達度の確認および講義内容の総括		
成績評価	評価の種類	評価割合(%)	評価基準
	論述試験	70	【到達目標1～3】の達成度を確認するため、論述試験を行う。授業で説明された観光学の考え方や知識の理解について評価する。詳しい評価基準は、授業で説明する。
	要約課題	30	【到達目標1・2】の達成度を確認するため、毎回の授業で要約課題の提出を求める。指示する「章」の要約内容が適切であるかを評価する。詳しい評価基準は、授業で説明する。
テキスト	前田勇 編著 『新 現代観光総論 第3版』学文社(2015年) 2,400円+税		
参考書	授業で適宜紹介する。		
授業時間外学修(事前・事後学修等)	1. 事前学修として、指示された要領に従い、テキストの「章」の要約課題を作成し、次回までに提出すること(90分)。 2. 事後学修として、授業で指示された課題に従って、講義ノートを整理事務すること(90分)。		
課題に対するフィードバックの方法	1. 論述試験については、試験前に採点基準が提示され、試験後に模範解答が公表される。 2. 要約課題の結果は、各回の授業でフィードバックされる。		
受講ルール等	1. 私語は授業の円滑な運営を妨げ、他の学生の迷惑となるので、厳禁とする。 2. 授業の到達目標を確実に達成するため、課題に真剣に取り組み、授業の事前・事後学修を欠かさず行うこと。 3. 授業の進め方や成績評価、詳しい受講ルールについては、初回の授業で説明される。		
連絡先(質問等)	質問や連絡などについては、オフィスアワーに研究室で受け付ける。また、e-mailによる質問や連絡も、常時受け付ける。研究室の場所、オフィスアワーの時間帯およびメールアドレスは、初回の授業で提示する。		

授業科目名	ホスピタリティマネジメント論		
配当年次	1年次	配当学期	第1クォーター
クラス数	1クラス	単位数	2単位
必修・選択等の別	必修	授業の方法	講義
担当教員	阿部 有香 (実務経験を有する教員)		
科目区分	職業専門科目群(実務) 観光実務理論科目群		
授業概要	「ホスピタリティ」は、とくに事業経営において、1990年代から「サービス」に代わって使われる用語となり、また経営活動に不可欠な職業的行為やその仕組みとなった。このようなホスピタリティを管理・運営する「ホスピタリティマネジメント」は、観光事業において重要な経営施策であり、また観光専門職にとっても不可欠な能力・技能である。そこで、この授業では、「ホスピタリティ」の意味を理解したうえで、品質の高いホスピタリティを管理し提供するための「ホスピタリティマネジメント」を学修する。なお、授業は講義形式で展開する。		
関連するディプロマポリシー	DP4 観光実務の知識と技能の修得		
キーワード	ホスピタリティマネジメント、ホスピタリティ、サービス、観光労働、観光事業、マーケティング、接客教育、人材育成		
到達目標	【到達目標1】「ホスピタリティ」とは何かを理解し、自分の言葉で表現できる。 【到達目標2】「ホスピタリティマネジメント」のさまざまな特徴を説明できる。 【到達目標3】観光の各現場において、ホスピタリティを最大限発揮するための基礎知識を説明できる。		
授業計画	第1回：ホスピタリティマネジメントとは何か 第2回：ホスピタリティとサービスの概念 第3回：観光労働とホスピタリティマネジメント(テキスト第4章) 第4回：ホスピタリティ社会とその問題(テキスト第9章) 第5回：消費生活とホスピタリティ 第6回：マーケティングとホスピタリティマネジメント 第7回：ホスピタリティとコミュニケーション(テキスト第16章) 第8回：ホスピタリティマネジメントのための人材育成とリーダーシップ(テキスト第18章) 第9回：接客教育とホスピタリティマネジメント(テキスト第15章) 第10回：ウェディング産業とホスピタリティ(テキスト第14章) 第11回：旅行会社のホスピタリティ(テキスト第19章) 第12回：客室乗務員のホスピタリティ(テキスト第20章) 第13回：ホテルのホスピタリティ(テキスト第21章) 第14回：レストランのホスピタリティ(テキスト第22章) 第15回：学修到達度の確認および講義内容の総括		
専門演習	評価の種類	評価割合(%)	評価基準
	論述試験	60	【到達目標1～3】の達成度を確認するため、論述試験を行う。詳しい評価基準は、授業で説明する。
	小レポート	40	【到達目標1・2】の達成度を確認するため、毎回の授業で小レポートの提出を求める。授業の理解度について評価する。詳しい評価基準は、授業で説明する。
テキスト	青木義英、神田孝治、吉田道代 編著 『ホスピタリティ入門』新曜社(2013年) 1,900円+税		
参考書	授業で適宜紹介する。		
授業時間外学修(事前・事後学修等)	1. 事前学修として、指示された課題について、指定の要領で小レポートを作成し、次回までに提出すること(90分)。 2. 事後学修として、授業中で指示された課題に従って、講義ノートを整理事務すること(90分)。		
課題に対するフィードバックの方法	1. 論述試験については、試験前に採点基準が提示され、試験後に模範解答が公表される。 2. 小レポートについては、提出後の次回授業においてフィードバックされる。		
受講ルール等	1. 私語は授業の円滑な運営を妨げ、他の学生の迷惑となるので、厳禁とする。 2. 授業の到達目標を確実に達成するため、課題に真剣に取り組む、授業の事前・事後学修を欠かさず行うこと。 3. 授業の進め方や成績評価、詳しい受講ルールについては、初回の授業で説明される。 4. 授業で教員が説明で使用するパワーポイントのハードコピーは配布されない。		
連絡先(質問等)	質問は、授業終了後に教室で受け付ける。		

授業科目名	観光リスクマネジメント		
配当年次	1年次	配当学期	第1クォーター
クラス数	1クラス	単位数	2単位
必修・選択等の別	必修	授業の方法	講義
担当教員	安本 幸博 (実務経験を有する教員)		
科目区分	職業専門科目群(実務) 観光実務理論科目群		
授業概要	観光の3要素は安全性・経済性・快適性とされている。中でも、最重要課題は「安全性」である。楽しみと危険は表裏の関係にあるが、例えば観光地で素晴らしい景色や美味しい料理を満喫しても、帰路で交通事故に遭ったらどうだろうか。その旅全体が暗いものになってしまうことであろう。観光分野では、常に安全を最優先にした対応が求められる。つまり、観光業に携わる人材は、想定される危険(リスク)を極小化する努力を、常に行わなければならない。この授業では、安全とは何か、安全になるとはどういうことなのか、観光客を歓待するホストとして守るべきものは何かを学び、観光業に必要なリスクマネジメント能力を修得する。なお、授業は講義形式で展開する。		
関連するディプロマポリシー	DP4 観光実務の知識と技能の修得		
キーワード	観光リスクマネジメント、危機管理戦略、情報、事前準備と事後処理、職業倫理、持続可能性		
到達目標	【到達目標1】「将来起こりうる危機・危険を極小化すべく努力する」というリスクマネジメントの考えを説明できる。 【到達目標2】想定される危険(リスク)の極小化に向けた努力の必要性を説明できる。 【到達目標3】観光業に必要なリスクマネジメント能力を実践できる。		
授業計画	第1回: ガイダンス、リスクの概念と種類 第2回: 命の大切さを理解する — 自分の命は自分で守る 第3回: 「国家」「企業」「個人」の危機管理 第4回: 危険の察知は出来るのか — クレームは宝の山 第5回: 企業戦略と危機管理 第6回: 企業の危機管理はビジネスの基本 — 危機管理意識のない企業はそれが危機になる 第7回: 企業危機管理で管理される「危機」 第8回: 危機管理と職業倫理としての持続可能性の追求 第9回: 危機を如何に管理するか — 小さい失敗を経験して大事を防ぐ 第10回: 必要な情報とは 第11回: 間違いやすい「情報に対する考え方」 第12回: 情報に基づき危険度合いを正しく判断する 第13回: 危機に対して予防対策を取る — 予知能力とは 第14回: 発生時対応(事前準備)・発生時の適切な対応(発生時対応)と事後処理 第15回: 学修到達度の確認および講義内容の総括		
成績評価	評価の種類	評価割合(%)	評価基準
	論述試験	60	【到達目標1～3】の達成度を確認するため、論述試験を行う。詳しい評価基準は、授業で説明する。
	小レポート	40	【到達目標1・2】の達成度を確認するため、毎回の授業で小レポートの提出を求める。授業の理解度について評価する。詳しい評価基準は、授業で説明する。
テキスト	使用しない。		
参考書	授業で適宜紹介する。		
授業時間外学修(事前・事後学修等)	1. 事前学修として、授業で指示された課題について、指定の要領で小レポートを作成し、次回までに提出すること(90分)。 2. 事後学修として、授業中に指示された課題に従って、講義ノートを整理事務すること(90分)。		
課題に対するフィードバックの方法	1. 論述試験については、試験前に採点基準が提示され、試験後に模範解答が公表される。 2. 小レポートについては、提出後の次回授業においてフィードバックされる。		
受講ルール等	1. 私語は授業の円滑な運営を妨げ、他の学生の迷惑となるので、厳禁とする。 2. 授業の到達目標を確実に達成するため、課題に真剣に取り組む、授業の事前・事後学修を欠かさず行うこと。 3. 授業の進め方や成績評価、詳しい受講ルールについては、初回の授業で説明される。 4. 授業で教員が説明で使用するパワーポイントのハードコピーは配布されない。		
連絡先(質問等)	質問は、授業終了後に教室で受け付ける。		

授業科目名	ホスピタリティ実務実習		
配当年次	1年次	配当学期	第1クォーター
クラス数	1クラス	単位数	1単位
必修・選択等の別	必修	授業の方法	実習
担当教員	島田 裕之 (実務経験を有する教員)		
科目区分	職業専門科目群(実務) 臨地実務実習事前学修科目群		
授業概要	ホスピタリティ(歓待)の概念は、古来より互酬性、共生関係の中で存在していたが、産業化社会以降のビジネス経済の世界では、サービスの実施としてその捉え方にも変化が見られた。生活環境がグローバル化と多様化の時を迎えた中で、観光実務においても、ホスピタリティや日本的なもてなしの価値観をどのように実践・発揮するかが問われている。この授業は、コミュニケーション、基本的なソーシャルスキルといった人とかかわり方が重要となる観光振興専門職におけるの参加型実務実習である。実習では、場面とスキル項目が設定され、段階的にわかりやすく学修でき、個人・グループ・チームで実習を繰り返すことで相互のフィードバックも得られる。ホスピタリティの知識や周辺概念の講義と共に、観光地での日常における来訪者(ゲスト)のもてなしや、接客、接客スキルを発揮するための実践内容でもある。		
関連するディプロマポリシー	DP4 観光実務の知識と技能の修得		
キーワード	ホスピタリティ、接客・接客スキル、ソーシャルスキル、もてなし、立ち居振舞い、態度形成、身嗜み、プレゼンテーション、言葉遣い		
到達目標	【到達目標1】 人とかかわるための、挨拶・表情・立ち居振舞い(さまざまな接客対応等)・言葉遣いを修得し、実践できる。 【到達目標2】 さまざまな接客スキルのアクティブラーニングにより、観光実務への自信と自己効力感を体得し、実践できる。 【到達目標3】 プレゼンテーションのための基本的な技量を身につけ、観光実務における発信をスムーズに実践できる。		
授業計画	第1回: オリエンテーション(受講ガイダンス、授業計画、成績評価基準、テキストおよび参考図書の指示、キーワード説明) 第2回: ホスピタリティとはなにか 観光実務におけるその実践とは、ホスピタリティと周辺概念の説明(テキスト第Ⅰ部) 第3回: 観光実務としての接客と身嗜みの考え方(グループワーク)外面からの身だしなみチェックリスト使用 第4回: 観光実務としての基本動作① 挨拶・表情・姿勢・立ち方・歩き方(テキスト第Ⅰ部) 第5回: 観光実務としての基本動作② 立ち居振舞いの基本 接客・接客の出迎え・案内の仕方・見送り(テキスト第Ⅰ部) 第6回: 観光実務としての言葉遣い① 接客態度としての言葉遣いの基本(テキスト第Ⅱ部) 第7回: 観光実務としての言葉遣い② 接客態度としての言葉遣いと語彙力(テキスト第Ⅱ部) 第8回: 理解度チェック①基本動作(案内から始まる一連動作)の実技チェックと言葉遣いのチェック 第9回: ホスピタリティ実務実習での課題解決(ワールドカフェ方式で課題を解決する)(テキスト第Ⅰ部・第Ⅱ部) 第10回: ホスピタリティ発揮のための基本ソーシャルスキル① コミュニケーションの基本姿勢・話し方・聴き方・思いを伝える 第11回: ホスピタリティ発揮のための基本ソーシャルスキル② コミュニケーションの基本姿勢・言葉以外のコミュニケーション 第12回: ホスピタリティ発揮のための実践事例研究(ガイダンス)、理解度チェック②レポート作成と発表の説明 第13回: ホスピタリティ発揮のための実践事例研究① プレゼンテーションとディスカッション(テキスト第Ⅲ部) 第14回: ホスピタリティ発揮のための実践事例研究② 理解度チェック②レポート提出(テキスト第Ⅲ部) 第15回: 授業全体の振り返りと理解度チェック②レポートのフィードバック、実践事例研究の総括		
成績評価	評価の種類	評価割合(%)	評価基準
	理解度チェック① 実技試験	40	【到達目標1】 の達成度を確認するため、実技試験を行う。チェックリスト項目による一連動作および言葉遣い(敬語・謙譲語・丁寧語・表現方法等)について評価を行う。詳しい評価基準は、授業で説明する。
	理解度チェック② 実践事例研究のレポート (発表含む)	40	【到達目標1～3】 の達成度を確認するため、実践事例研究としてのレポートの提出を求め、その内容(発表を含む)について評価を行う。詳しい評価基準は、授業で説明する。
	小レポート	20	【到達目標2～3】 の達成度を確認するため、毎回の授業で小レポートの提出を求め、その記述内容を積極的な授業参加態度および授業内容理解度として評価する。詳しい評価基準は、授業で説明する。
テキスト	授業で適宜プリントを配布する。		
参考書	1. 服部勝人 著 『ホスピタリティ学のすすめ』丸善出版(2008年) 3,800円+税 2. 古閑博美 著 『ホスピタリティ概論』学文社(2003年) 2,000円+税 3. 小林潔司ほか 編 『日本型クリエイティブ・サービスの時代「おもてなし」への科学的接近』日本評論社(2014年) 3,200円+税 上記の他にも、授業で適宜紹介する。		
授業時間外学修(事前・事後学修等)	1. 事前学修として、指示された内容に関して参考図書を読む、またはシラバス内の実習を実践すること。 2. 事後学修として、小レポートの内容を各自で振り返り、PDCAをしてノートにまとめること。		
課題に対するフィードバックの方法	1. 理解度チェック①実技試験については、指定チェックリストに従い実践の評価を行った後、チェックリストが個別に返却される。 2. 理解度チェック②実践事例研究のレポートと発表については、レポートに関する評価基準(ルーブリック評価表)が事前に提示され、試験後にその結果が個別に示される。 3. 小レポートについては、第15回の授業で適宜フィードバックされる。		
受講ルール等	1. 私語は授業の円滑な運営を妨げ、他の学生の迷惑となるので、厳禁とする。 2. 授業の到達目標を確実に達成するため、課題に真剣に取り組み、授業の事前・事後学修を欠かさず行うこと。 3. 授業の進め方や成績評価、詳しい受講ルールについては、初回の授業で説明される。		
連絡先(質問等)	質問や連絡などについては、オフィスアワーに研究室で受け付ける。また、e-mailによる質問や連絡も、常時受け付ける。オフィスアワーの時間帯およびメールアドレスは、初回授業に提示する。		

授業科目名	観光基礎英語 I		
配当年次	1年次	配当学期	第1クォーター
クラス数	2クラス	単位数	1単位
必修・選択等の別	必修	授業の方法	演習
担当教員	田保 顕 / 高橋 紀穂		
科目区分	職業専門科目群(観光英語)		
授業概要	一般英語の修得を基本としつつ、ESP(English for Specific Purposes、特定目的のための英語)と呼ばれる領域の一つである観光英語においてよく用いられる英語表現を修得し、これを活用する能力を伸ばすことを主目標とする。今日、海外に出かける日本人が増加し、日本に観光目的でやってくる外国人の数も増えているが、いずれの場合においても英語でコミュニケーションが行われる場合が多く、そこにはおのずと典型的に用いられる英語表現や定型表現が見られる。本授業では、これらの表現を中心に、観光英語に慣れ親しむことを目指し、教科書及びCD等の補助教材を用いた演習形式による学修を展開する。授業の進行は、教科書の構成に従い、課を追って進めることを基本とする。		
関連するディプロマポリシー	DP5 観光英語力の修得		
キーワード	Tourism, Immigration & Customs, Tourist Information, Accommodation, Transportation		
到達目標	【到達目標1】観光のさまざまな場面で使われる英語を理解して、これを用いた言語活動を行うことができる。 【到達目標2】観光のさまざまな場面で使われる英語の言い回しを用いて表現することができる。 【到達目標3】英語文化の理解を深めて異文化理解の基礎的能力を養い、これを日本語文化と対照することができる。		
授業計画	第1回: 英語学習全般の振り返りと観光英語への方向付け、授業展開と成績評価基準の説明 第2回: Unit 1 Travel 第3回: Unit 2 Jobs and People 第4回: Unit 3 Getting on the Plane 第5回: Unit 4 At the Immigration and Customs 第6回: Unit 5 At the Airport 第7回: Unit 6 Hotel (Accommodation) 第8回: Unit 7 Restaurant (Breakfast and Fast Food) 第9回: Unit 8 Sightseeing 第10回: Unit 9 Shopping 第11回: Unit 10 Transportation 第12回: Unit 11 Problems and Complaints 第13回: Extra Unit 1 Traveling in Japan: Staying at a Hotel 第14回: Extra Unit 2 Traveling in Japan: Staying at a <i>Ryokan</i> 第15回: Extra Unit 3 Traveling in Japan: Eating, Shopping, and Sightseeing		
成績評価	評価の種類	評価割合(%)	評価基準
	筆記試験	60	【到達目標1～3】の達成度を確認するため、教科書の内容、および授業における説明が理解でき、定着しているかについて評価する。詳しい評価基準は、授業で説明する。
	小レポート	40	【到達目標1・2】の達成度を確認するため、教科書各課にて扱われる場面・状況に典型的な英語表現を抜き出して、これを整理・浄書して、次時授業において提出する。詳しい評価基準は、授業で説明する。
テキスト	観光英検センター 編 『ベーシック観光英語』(<i>English for Tourism, Basic</i>) 三修社(2014年) 2,000円+税		
参考書	授業で適宜紹介する。		
授業時間外学修(事前・事後学修等)	1. 事前学修として、教科書の内容についてCDを聴き、本文を読むとともに、未修語については辞書をひいておくこと(90分)。 2. 事後学修として、教科書の内容についてCDによってOverlappingを行うとともに、小レポートの課題をこなしておくこと(90分)。		
課題に対するフィードバックの方法	1. 筆記試験については、試験前に採点基準が提示され、試験後に解答が公表される。 2. 小レポートについては、提出されたものについて点検・評価がなされ、次時授業において返却される。		
受講ルール等	1. 私語は授業の円滑な運営を妨げ、他の学生の迷惑となるので、厳禁とする。 2. 授業の到達目標を確実に達成するため、課題に真剣に取り組み、授業の事前・事後学修を欠かさず行うこと。 3. 授業の進め方や成績評価、詳しい受講ルールについては、初回の授業で説明される。		
連絡先(質問等)	質問は、授業終了後に教室で受け付ける。		

授業科目名	地域資源論		
配当年次	1年次	配当学期	第2クォーター
クラス数	1クラス	単位数	2単位
必修・選択等の別	必修	授業の方法	講義
担当教員	吉田 雄介		
科目区分	職業専門科目群(学術) 地域観光論入門科目群		
授業概要	学問の系譜において、「地域資源」という言葉は、観光の分野ではなく、地域資源管理あるいは生態資源との関連で用いられてきた。ところが今では、社会的な要請により、まちづくりや地域づくりとの関連で、建物や暮らし、文化、産業など、地域を特徴づけるさまざまな資源を「地域資源」として広く認識するようになった。この授業では、まず(1)地域資源そのものを学術的に検討する。次いで、(2)地域資源を生み出す地域の気候や地形などの自然的要素および地域の技術や交通などの人文的要素について検討する。さらに、(3)そうした地域の構成要素が「地域資源」としていかに見出されたのかについても批判的に検討することで、地域資源という概念の問題点についても考察する。なお、授業は講義形式で進める。		
関連するディプロマポリシー	DP3 観光の理論と知識の理解		
キーワード	地域資源、気候、土地、植物、作物、都市、農村、文化、歴史、世界遺産、地場産業		
到達目標	【到達目標1】多様な地域資源の存在を理解し、地域の重層性を説明できる。 【到達目標2】各地の地域資源の特徴・特性を理解すると同時に、身近な地域資源を自分の言葉で説明できる。 【到達目標3】授業で身につけた地域資源論の考え方を、いろいろな研究課題に応用できる。		
授業計画	第1回：講義概要、授業計画、成績評価基準の解説 第2回：地域とは何か 第3回：地域資源とは何か 第4回：地域資源の身近な事例① 学校周辺 第5回：地域資源の身近な事例② 出身地域 第6回：自然的要素① 気候 第7回：自然的要素② 土地 第8回：自然的要素③ 植物・作物 第9回：人文的要素① 農村部 第10回：人文的要素② 都市部 第11回：地域資源の歴史的な変化 第12回：事例① 世界遺産から考える地域資源 第13回：事例② 工場、地場産業から考える地域資源 第14回：事例③ 第三次産業から考える地域資源 第15回：学修到達度の確認および講義内容の総括		
成績評価	評価の種類	評価割合(%)	評価基準
	論述試験	50	【到達目標1・3】の達成度を確認するため、論述試験を行う。詳しい評価基準は、授業で説明する。
	小レポート	50	【到達目標2】の達成度を確認するため、毎回の授業で小レポートの提出を求める。詳しい評価基準、課題の要点については、授業で説明する。
テキスト	使用しない。		
参考書	山口覚、水田憲志、金子直樹、吉田雄介、中窪啓介、矢嶋巖 著『図説 京阪神の地理』ミネルヴァ書房(2019年) 2,500円+税 その他、授業で適宜紹介する。		
授業時間外学修(事前・事後学修等)	1. 事前学修として、授業で指示された内容で課題を作成し、次回までに提出すること(90分)。 2. 事後学修として、授業で示された課題について小レポートを作成し、次回までに提出すること(90分)。		
課題に対するフィードバックの方法	1. 論述試験については、試験前に採点基準が提示され、試験後に模範解答が公表される。 2. 小レポートについては、担当教員が確認したのち、担当教員のコメントを付して返却される。		
受講ルール等	1. 私語は授業の円滑な運営を妨げ、他の学生の迷惑となるので、厳禁とする。 2. 授業の到達目標を確実に達成するため、課題に真剣に取り組み、授業の事前・事後学修を欠かさず行うこと。 3. 授業の進め方や成績評価、詳しい受講ルールについては、初回の授業で説明される。		
連絡先(質問等)	質問や連絡などについては、オフィスアワーに研究室で受け付ける。また、e-mailによる質問や連絡も、常時受け付ける。研究室の場所、オフィスアワーの時間帯およびメールアドレスは、初回の授業で提示する。		

授業科目名	地域観光基礎実習		
配当年次	1年次	配当学期	第2クォーター
クラス数	3クラス	単位数	1単位
必修・選択等の別	必修	授業の方法	実習
担当教員	吉田 雄介 / 松尾 有起 / 有國 明弘		
科目区分	職業専門科目群(学術) 地域観光論入門科目群		
授業概要	特定の集団・組織や地域社会を理解したり、課題の発見や解決の方策を考えたりするには、その対象の現状を把握するための調査手法や対象と向き合う心構えの修得が不可欠である。この実習では、研究はもとより、社会生活においても必要不可欠なスキルである、社会調査の手法と心構えについて、実践を交えながら学修する。授業では、調査手法について学修したのち、実際にフィールドワークを行い、リサーチのプロセス(計画準備～実施～データ整理・分析～成果報告)を実践する。調査はグループワークで行う。フィールドワークは校舎近隣の観光関連施設(例:公園・文化施設、門前町・商店街・ショッピングセンター・道の駅、空港・港・駅・バスターミナル、うどん店等)を予定している。なお、第14回と第15回の授業では、パワーポイント等を用いたプレゼンテーションにより、成果報告を行う。		
関連するディプロマポリシー	DP3 観光の理論と知識の理解		
キーワード	社会調査、聞き取り、観察、分析、考察帰納法、演繹法、調査研究倫理、危機管理、ラポール、チームワーク、コミュニケーション		
到達目標	【到達目標1】調査手法を理解し、その特徴を説明することができる。 【到達目標2】対象やテーマに合わせて、調査手法を選定し、実際に調査を計画・実施することができる。 【到達目標3】得られたデータを整理・分析することができる。 【到達目標4】チームで役割分担・協力をして課題解決に取り組むことができる。		
授業計画	第1回: なぜ調査をするのか? 量的調査研究と質的調査研究の特徴を理解する 第2回: 質的調査の技法を理解する① 対象の観察と記録の仕方 第3回: 質的調査の技法を理解する② 聞き取りと記録の仕方 第4回: 調査準備① テーマ・フィールド選定の仕方と心構え・危機管理 第5回: 調査準備② 計画策定 第6回: 調査① テーマおよび調査法の妥当性検証のための情報収集(聞き取り) 第7回: 調査② テーマおよび調査法の妥当性検証のための情報収集(観察) 第8回: データ整理・分析方法の理解と実践 第9回: 中間報告(ワークショップ)と分析内容の再検討 第10回: 調査③ 再検討した調査項目のデータ収集(聞き取り) 第11回: 調査④ 再検討した調査項目のデータ収集(観察) 第12回: 成果公表の仕方と意義の理解 第13回: 報告会に向けた準備 第14回: 成果報告会 第15回: 合同成果報告会とまとめ		
成績評価	評価の種類	評価割合(%)	評価基準
	小レポート	50	【到達目標1～3】の達成度を確認するため、毎回の授業で小レポートの提出を求める。詳しい評価基準は、授業で説明する。
	調査報告書	50	【到達目標1～4】の達成度を確認するため、調査報告書の作成および、その成果の発表を求め、その内容で評価する。また、その際のチームワークについても評価する。詳しい評価基準は、授業で説明する。
テキスト	使用しない。授業で、適宜レジュメやプリントを配布する。		
参考書	1. 伊藤徹哉、鈴木重雄、立正大学地理学教室 編 『地理を学ぼう: 地理エクスカッション』朝倉書店(2015年) 2,200円+税 2. 小田博志 著 『エスノグラフィー入門 <現場>を質的調査する』春秋社(2010年) 3,000円+税 3. 谷富夫、山本努 編著 『よくわかる質的的社会調査 プロセス編』ミネルヴァ書房(2010年) 2,500円+税 4. 野間晴雄、香川貴志、土平博ほか 編著 『ジオ・パルNEO 地理学・地理調査便利帖第2版』海青社(2017年) 2,500円+税		
授業時間外学修(事前・事後学修等)	1. 事後学修として、授業で示された課題についての小レポートを作成し、次回までに提出すること。 2. 情報・資料などを収集して整理する等、調査の準備を行うこと。 3. 調査で得られたデータ等を整理すること。 4. 成果報告会でのプレゼンテーションに向けて、発表の準備や報告書を作成すること。 なお、課題によってはチームによる作業となる場合がある。		
課題に対するフィードバックの方法	1. 小レポートについては、担当教員が確認したのち、担当教員のコメントを付して返却される。 2. 調査報告書の作成や、その発表に対するフィードバックは、原則授業で行われる(個別/グループ別)。必要に応じて、調査結果についてのフィードバックが、クラス全体で共有される。		
受講ルール等	1. 学生自身が実践する授業であるので、消極的な参加態度は授業運営に支障をきたすため、退席を求める。 2. この実習は、学外の多くの人々から協力を得ながら学修するため、本学の学生としての自覚をもち、実習活動を行うこと。 3. フィールドワークではカメラ(=デジタルカメラ、スマートフォン)を使用するため、充電をし、持参すること。 4. 授業の進め方や成績評価、詳しい受講ルールについては、初回の授業で説明される。 5. フィールドワーク等により学外で実施する際の交通費等は自己負担とする。		
連絡先(質問等)	質問や連絡などについては、オフィスアワーに研究室で受け付ける。また、e-mailによる質問や連絡も、常時受け付ける。研究室の場所、オフィスアワーの時間帯およびメールアドレスは、初回の授業で提示する。		

授業科目名	観光社会文化論		
配当年次	1年次	配当学期	第2クォーター
クラス数	1クラス	単位数	2単位
必修・選択等の別	必修	授業の方法	講義
担当教員	田保 顕		
科目区分	職業専門科目群(学術) 観光基礎理論科目群		
授業概要	この授業では、社会学や文化人類学などがとらえた「社会文化現象にかかわる観光」の研究を理解しながら、その研究で用いられる理論や方法も修得する。社会文化現象にかかわる観光は、1960年代に出現した「大衆観光」が、世界中の国々に多くの重大な社会経済的影響を及ぼすにつれて認識され始めた。大衆観光は、観光客受け入れ社会の文化や自然にさまざまな負の影響を及ぼしたので、大衆観光に代わる新しい観光の形態が、1980年代以降に模索され、その後の1990年代に、観光によって地域の文化や自然をまもり、「持続可能な地域社会」を構築する観光が実践された。その観光は、「持続可能な観光」と呼ばれる。このように再構築された「社会文化現象にかかわる観光」について、社会学や文化人類学が何をどのように考察したのかを学ぶ。		
関連するディプロマポリシー	DP3 観光の理論と知識の理解		
キーワード	大衆観光(マス・ツーリズム)、大衆消費社会、新たな観光のあり方(オルタナティブ・ツーリズム)、持続可能性、持続可能な観光、観光のまなざし、真正性と商品化、観光倫理		
到達目標	【到達目標1】現代観光の現実に関する基礎知識を身につけ、それらを説明できる。 【到達目標2】観光と社会・文化・環境についての基本的な理論と方法を理解して、それらを説明できる。 【到達目標3】観光と持続可能性の関係を説明できる。		
授業計画	I. 現代観光の現実 第1回: 社会現象としての「大衆観光」が出現した時代背景 第2回: 「大衆観光」による正負の効果 第3回: 大衆観光に代わる「持続可能な観光」の模索と実践 第4回: 社会現象としての「持続可能な観光」の意味 第5回: 持続可能な観光によって実践された「観光まちづくり」 II. 観光を見る視点 第6回: 「真正性を追い求める現代の儀礼」としての観光 第7回: 歴史が生み出す「観光のまなざし」 第8回: 観光による文化の「商品化」と「創発的真正性」 第9回: 自然・生態系を保護する観光 第10回: 文化を継承し創造する観光 III. 現代観光の展開 第11回: 世界観光倫理憲章と観光倫理の課題 第12回: 地域創生と観光文化のローカル化 第13回: 観光労働の現実 第14回: 持続可能な観光を支える観光振興専門職の課題 第15回: 学修到達度の確認および講義内容の総括		
成績評価	評価の種類	評価割合(%)	評価基準
	論述試験	70	【到達目標1～3】の達成度を確認するため、論述試験を行う。授業で説明された観光社会文化論の考え方や知識の理解度について評価する。詳しい評価基準は、授業で説明する。
	小レポート	30	【到達目標1・2】の達成度を確認するため、毎回の授業で小レポートの提出を求める。課題に対して適切な内容・記述であるかを評価する。詳しい評価基準は、授業で説明する。
テキスト	使用しない。		
参考書	1. 橋本和也 著 『地域文化観光論』ナカニシヤ出版(2018年) 2,600円+税 2. 安村克己、堀野正人、遠藤英樹、寺岡伸悟 編著 『よくわかる観光社会学』ミネルヴァ書房(2011年) 2,600円+税 3. 山下晋司 編著 『観光人類学』新曜社(1996年) 2,200円+税		
授業時間外学修(事前・事後学修等)	1. 事前学修として、指示された課題について、指定の要領で小レポートを作成し、次回までに提出すること(90分)。 2. 事後学修としては、授業で指示された課題に従って講義ノートを整理すること(90分)。		
課題に対するフィードバックの方法	1. 論述試験については、試験前に採点基準が提示され、試験後に模範解答が公表される。 2. 小レポートについては、提出後の次回授業においてフィードバックされる。		
受講ルール等	1. 私語は授業の円滑な運営を妨げ、他の学生の迷惑となるので、厳禁とする。 2. 授業の到達目標を確実に達成するため、課題に真剣に取り組み、授業の事前・事後学修を欠かさず行うこと。 3. 授業の進め方や成績評価、詳しい受講ルールについては、初回の授業で説明される。		
連絡先(質問等)	質問や連絡などについては、オフィスアワーに研究室で受け付ける。また、e-mailによる質問や連絡も、常時受け付ける。研究室の場所、オフィスアワーの時間帯およびメールアドレスは、初回の授業で提示する。		

授業科目名	観光基礎英語Ⅱ		
配当年次	1年次	配当学期	第2クォーター
クラス数	2クラス	単位数	1単位
必修・選択等の別	必修	授業の方法	演習
担当教員	田保 顕 / 高橋 紀穂		
科目区分	職業専門科目群(観光英語)		
授業概要	「観光基礎英語Ⅰ」の学修をもとに、観光分野において用いられる英語表現を幅広く学び、これを活用する能力を一層伸ばすことを主目標とする。各々の場面・文脈において用いられる英語表現には一定の定型表現があるが、その幅は、比較的限定されたものから、豊かなヴァリエーションを持つものまでさまざまであり、これらのヴァリエーションに親しむとともに、類似する場面にも対応できる応用力の修得を目指す。授業は、教科書及びCD等を用いた演習形式による学修を中心とし、適宜、応用的場面を織り込み、そうした場面に対応するにはどのような表現を用いれば良いかといった課題について、ペアやグループで討議するなど、コミュニケーション活動に展開していく。教科書は課を追って進めることを基本とする。		
関連するディプロマポリシー	DP5 観光英語力の修得		
キーワード	Travel Agency/Bureau, Tour Conductor Duties, Intercultural Understanding, Hospitality, Manners & Customs		
到達目標	【到達目標1】観光のさまざまな場面で使われる英語をいっそう深く理解して、これを用いた言語活動を行うことができる。 【到達目標2】観光のさまざまな場面で使われる英語の言い回しを用いて、ヴァリエーション豊かに表現することができる。 【到達目標3】英語のヴァリエーションについての認識を深めてそれに適切に対応することができる。		
授業計画	第1回: 観光英語にかかわる基礎的事項の確認とヴァリエーションを取り込んだ学習への方向付け、授業展開の説明 第2回: Unit 1 Travel Information 第3回: Unit 2 At the Airport 第4回: Unit 3 Hotel 第5回: Unit 4 Dining 第6回: Unit 5 Asking and Giving Directions 第7回: Unit 6 Buses and Trains 第8回: Unit 7 Mailing and Money Exchange 第9回: Unit 8 Sightseeing in London 第10回: Unit 9 Sightseeing in the World 第11回: Unit 10 Problems and Complaints 第12回: Unit 11 Tour Conductor Duties 第13回: Unit 12 Sightseeing in Japan 第14回: Extra Unit 1 American Usage and British Usage, Commonly Used Abbreviations 第15回: Extra Unit 2 French Terms Needed to Understand Restaurants Menus		
成績評価	評価の種類	評価割合(%)	評価基準
	筆記試験	60	【到達目標1～3】の達成度を確認するため、教科書の内容、および授業における説明が理解でき、定着しているかについて評価する。詳しい評価基準は、授業で説明する。
	小レポート	40	【到達目標1～3】の達成度を確認するため、教科書各課の場面・状況に典型的な英語表現を抜き出し、これにヴァリエーションをつけた表現を浄書して、次時授業において提出する。詳しい評価基準は、授業で説明する。
テキスト	観光英検センター 編 『ステップアップ観光英語』(English for Tourism, Intermediate) 三修社(2014年) 2,200円+税		
参考書	授業で適宜紹介する。		
授業時間外学修(事前・事後学修等)	1. 事前学修として、教科書の内容についてCDを聴き、本文を読むとともに、未修語については辞書をひいておくこと(90分)。 2. 事後学修として、教科書の内容についてCDによってShadowingを行うとともに、小レポートの課題をこなしておくこと(90分)。		
課題に対するフィードバックの方法	1. 筆記試験については、試験前に採点基準が提示され、試験後に解答が公表される。 2. 小レポートについては、提出されたものについて点検・評価がなされ、次時授業において返却される。		
受講ルール等	1. 私語は授業の円滑な運営を妨げ、他の学生の迷惑となるので、厳禁とする。 2. 授業の到達目標を確実に達成するため、課題に真剣に取り組み、授業の事前・事後学修を欠かさず行うこと。 3. 授業の進め方や成績評価、詳しい受講ルールについては、初回の授業で説明される。		
連絡先(質問等)	質問は、授業終了後に教室で受け付ける。		

授業科目名	観光支援ビジネス実務基礎論		
配当年次	1年次	配当学期	第3クォーター
クラス数	5クラス	単位数	1単位
必修・選択等の別	必修	授業の方法	講義
担当教員	大熊 伸二 / 石床 渉 / 島田 裕之 / 阿部 有香 / 川田 里絵 (実務経験を有する教員)		
科目区分	職業専門科目群(実務) 臨地実務実習事前学修科目群		
授業概要	この授業の目的は、「臨地実務実習Ⅰ」の学修をより効果的なものとするため、当実習の事前学修科目として、観光振興・地域創生の重要な実践主体である観光支援ビジネス施設の実務と、そのビジネス施設による観光振興・地域創生の実践とに関連する基本的な知識や技能を学修することにある。「臨地実務実習Ⅰ」の実習地域は、香川県内の①高松・東讃、②中讃、③西讃、④小豆島、⑤直島の5エリアであり、また実習施設は、それぞれのエリアに所在する観光支援ビジネス施設であるので、本授業はこの5エリアの観光および観光振興の現状と、各エリアの観光支援ビジネス施設の特徴などについて、講義やグループワーク、学生のプレゼンテーションなどの授業形式で学修する。		
関連するディプロマポリシー	DP4 観光実務の知識と技能の修得		
キーワード	地域観光、地域観光振興、観光まちづくり、地域産業、観光資源、エリア、香川県		
到達目標	【到達目標1】 実習施設(観光支援ビジネス施設)のある地域(実習先の地域)の基礎的な観光と観光振興の事情を説明することができる。 【到達目標2】 実習施設(観光支援ビジネス施設)の特徴を説明することができる。 【到達目標3】 実習施設(観光支援ビジネス施設)で実務に従事するにあたって必要とされる、心構えや基礎知識、マナーを理解し、実践できる。		
授業計画	第1回: 本科目と「臨地実務実習Ⅰ」の関連性の確認、授業の進め方について、課題の提示 第2回: 実習地と地域観光の理解と分析① 香川県全体 第3回: 実習地と地域観光の理解と分析② 実習エリアの基礎情報と地域資源 第4回: 実習地と地域観光の理解と分析③ 実習エリアの観光動向と観光支援ビジネス 第5回: 実習施設(観光支援ビジネス施設)の理解と分析 第6回: 実習地ならびに実習施設(観光支援ビジネス施設)の分析についての結果報告 第7回: 実習に向けた心構え・マナー・危機管理の確認 第8回: 「臨地実務実習Ⅰ」の計画確認		
成績評価	評価の種類	評価割合(%)	評価基準
	プレゼンテーション	50	【到達目標1・2】 の達成度を確認するため、所定項目の調査結果をまとめた口頭発表(パワーポイント使用のこと)を求める。その発表内容・発表形式について評価する。詳しい評価基準と調査項目は授業で説明する。
	実習計画書	30	【到達目標1～3】 の達成度を確認するため、「臨地実務実習Ⅰ」に関する実習計画書の作成を求め、その内容で評価する。詳しい評価基準と調査項目は授業で説明する。
	ディスカッション参加態度(リアクションペーパーも含む)	20	【到達目標1～3】 の達成度を確認するため、授業内でのディスカッションでの発言や参加態度(積極性)、リアクションペーパーの書き込み内容で評価する。詳しい評価基準と調査項目は授業で説明する。
テキスト	使用しない。授業内で適宜レジュメを配布する。		
参考書	学生には実習エリアならびに実習施設についてのリサーチを求める。その際参考となりうる資料については、適宜授業で紹介する。ただし、本授業では、各自で活用可能な資料検索に取り組むことが期待される。		
授業時間外学修(事前・事後学修等)	1. 事前学修として、指示された要領に従い、プレゼンテーション課題の準備を行うこと(120分)。 2. 事後学修として、得られた情報の整理を行い、「臨地実務実習Ⅰ」に向けた準備を進めること(60分)。		
課題に対するフィードバックの方法	1. プレゼンテーションについては、発表後の授業で講評される。 2. 実習計画書については、担当教員が確認したのち、講評される。 3. ディスカッション参加態度については、適宜授業でフィードバックされる。		
受講ルール等	1. 私語は授業の円滑な運営を妨げ、他の学生の迷惑となるので、厳禁とする。 2. 授業の到達目標を確実に達成するため、課題に真剣に取り組み、授業の事前・事後学修を欠かさず行うこと。 3. 授業の進め方や成績評価、詳しい受講ルールについては、初回の授業で説明される。		
連絡先(質問等)	質問や連絡などについては、オフィスアワーに研究室で受け付ける。また、e-mailによる質問や連絡も、常時受け付ける。研究室の場所、オフィスアワーの時間帯およびメールアドレスは、初回の授業で提示する。		

授業科目名	臨地実務実習 I		
配当年次	1年次	配当学期	第3クォーター
クラス数	5クラス	単位数	4単位
必修・選択等の別	必修	授業の方法	実習[臨]
担当教員	大熊 伸二 / 石床 渉 / 阿部 有香 / 川田 里絵 (実務経験を有する教員)		
科目区分	職業専門科目群(実務) 臨地実務実習科目群		
授業概要	この実習は、観光をさまざまな形態で支援する地域の交通、宿泊、その他の観光関連諸施設において、各施設の実務を体得し、また同時に各施設がその立地する地域の観光振興・地域創生とどのように連携しているかを実践的に学ぶ。実習先の施設は、本学が定める香川県内の①高松・東讃、②中讃、③西讃、④小豆島、⑤直島の5エリアにおいて観光支援ビジネスに従事する各施設である。各施設での実習を通して、それぞれの実務を身につけると同時に、その施設の事業が当地域の観光振興・地域創生事業といかに関係し、また他の諸施設といかに連携しているか、といった地域の観光振興・地域創生にかかわる状況を理解する。		
関連するディプロマポリシー	DP4 観光実務の知識と技能の修得		
キーワード	地域観光、観光まちづくり、地域産業、観光資源、地域性(歴史、風土、気候等)、エリア、香川		
到達目標	【到達目標1】事前学修した理論や知見、状況把握・課題発見の手法を活用し、実習施設が所在する地域と当該地における観光産業の特徴や現状と課題を的確に理解し、それについて他者にわかりやすく伝えることができる。 【到達目標2】実習施設業務の基本的な補助業務については単独で安全に遂行できる。 【到達目標3】各施設での様々な仕事の流れの中で自身の与えられた役割を理解し、周囲の人からの指示や示唆を受け入れ、的確に目標を遂行できる。 【到達目標4】提供されるオリジナル商品や観光サービスの製造工程ならびにそれを魅力ある商品・サービスとするための実行組織のあり方や役割分担を実地を通じて理解することができる。 【到達目標5】チームでのコミュニケーションを理解し、他者と協調・協働して行動できる。		
授業計画	実習期間：下記①～③を通して3週間とする。 ①実務実習(1週目)：実習施設に関する基礎的理解、業務遂行に必要な能力の理解(初日) ・経営者ならびに実習指導者より施設の概要、経営理念について説明を受け、実習施設について理解を深める。実習参加学生は事前に同施設や同施設の事業について学修しているため、その情報との整合性を確認する。 ・この実習中の到達点のすり合わせを行い、そのためにどのような実習に取り組むのか実習指導者と参加学生双方で確認する。実習施設の確認もあわせて行う。(2日目以降) 実習施設の業務に補助的立場で関わることで、当該施設における業務の大枠とその業務遂行に必要な能力を理解する。その際、製造・サービス業の基礎である服装、挨拶、礼儀正しい周囲への態度に留意する。チームワークや適切なコミュニケーションの手段・報連相(報告・連絡・相談)を意識的に実践する。 ②実務実習2週目：業務遂行に必要な力の涵養、実習地における実習施設の役割・位置づけの理解、実習地に関する理解 ・引き続き、実習施設の補助的業務に関わり、当該施設における業務遂行に必要な能力の基礎を学ぶ。 ・実習施設の実習地での役割について分析する。そのための手がかりとして、第2週前半で、経営者もしくは実習指導者より(彼らから見た)実習施設の実習地での役割について説明を受ける。このほか、実習生が経営者、実習指導者をはじめとする地域関係者に適宜インタビューをおこなったり、業務遂行をしながら観察をし、分析に必要なデータを収集する。 ・実習地の特徴と課題把握のために、業務を遂行しながら、地域状況の観察も行う。可能な範囲で、自治体関係者より実習エリアに関するレクチャー(基礎情報、総合計画と現状、課題、観光施策等)を提供してもらい、現状把握を進める。 ③実務実習3週目：業務遂行に必要な力の修得、実習地における実習施設の役割・位置づけと実習地の特徴分析 ・実習施設の補助的業務に関わり、当該施設における業務遂行に必要な能力の基礎を修得する。 ・実習施設の実習地での役割と実習地の特徴や課題を自分なりに整理する。 ・最終日の報告に向けたプレゼンテーション準備を行う。(最終日：1～2時間程度) ・実習の振り返りを行う。初日に確認した到達点への到達状況の確認をするほか、実習生より、実習地における実習施設の役割・位置づけと実習地の特徴の分析結果をプレゼンテーションし、実習指導者ほか受け入れに関わってくださった方々と意見交換を行う。		
成績評価	評価の種類	評価割合(%)	評価基準
	実習振り返りレポート	80	【到達目標1～5】の達成度を確認するため、実習終了後に振り返りレポートの提出を求める。
	臨地実務実習施設指導者評価書	20	【到達目標1～5】の達成度を総合的に評価する。
テキスト	使用しない。		
参考書	実習施設に応じて適宜紹介する。		
授業時間外学修(事前・事後学修等)	1. 実習前に、配布される実習要項(学生用)をしっかり読むこと。 2. 実習期間中は、別に定める様式により活動日誌を作成し、実習指導者等の確認を経て担当教員に報告すること。		
課題に対するフィードバックの方法	1. 実習振り返りレポートについては、担当教員が確認したのち、担当教員のコメントを付して返却される。 2. 実習期間中は、担当教員が臨地実務実習施設を巡回し、学生との面談および指導を行う。		
受講ルール等	1. 実習要項(学生用)を熟読し、しっかりと理解した上で実習に臨むこと。 2. 事前に、実習施設と取り交わす誓約書を提出すること。 3. 事前に、学生教育研究災害傷害保険および学研災付帯賠償責任保険に加入すること。 4. 実習期間中にかかる交通費等の費用は、原則として学生が負担する。		
連絡先(質問等)	実習期間中の連絡・質問のための連絡先、連絡方法等については、臨地実務実習事前学修科目「観光支援ビジネス実務基礎論」において説明する。実習要項(学生用)も確認のこと。		

授業科目名	観光振興・地域創生論		
配当年次	1年次	配当学期	第4クォーター
クラス数	1クラス	単位数	2単位
必修・選択等の別	必修	授業の方法	講義
担当教員	内田 忠賢		
科目区分	職業専門科目群(学術) 観光基礎理論科目群		
授業概要	この授業では、観光振興が地域創生と共振して「持続可能な地域社会」の形成をめざす現実と、その現実をとらえる研究の理論や方法を学ぶ。少子高齢化の時代が到来し「地方消滅」の社会状況が予測されるなかで、観光振興と地域創生のそれぞれの新たなあり方が交差して、地域を活性化し持続可能な地域社会を形成しようとする事例がいくつかみられるようになった。そのような事例が生じた経緯を、まず、一方で戦後の地域開発政策から現在の地方創生政策までの地域振興の変遷と、もう一方で大規模な観光地開発から持続可能な観光開発までの観光振興にかかわる変遷とをたどって明らかにする。そして、事例が発生した経緯の分析結果を踏まえて、観光振興と地域創生が結びつく持続可能な地域社会の形成が、いかに実現するかを考える。		
関連するディプロマポリシー	DP3 観光の理論と知識の理解		
キーワード	外発的振興(企業誘致型)、内発的振興(地域主導型)、全総(全国総合開発計画)、総合保養地域整備法(リゾート法)、観光開発、観光まちづくり、観光地づくり、DMO(Destination Management Organization)、地域創生		
到達目標	【到達目標1】 観光振興と地域創生についての研究の考え方や方法を説明できる。 【到達目標2】 観光振興による地域創生の事例研究の結果を評価し説明できる。 【到達目標3】 観光振興によって地域創生が実践されている動向を論理的・実証的に説明できる。		
授業計画	第1回: 本講義の目的 観光振興による地域創生と持続可能な地域社会の形成 Ⅰ. 外発的地域開発から内発的地域創生へ 第2回: 全総と外発的地域振興 第3回: 外発的地域振興の目標としての「地域経済活性化」 第4回: 大規模観光開発による地域振興とその挫折 第5回: 観光による内発的地域創生 ― 全国各地における「観光まちづくり」の出現 第6回: DMOと持続可能な観光地づくり 第7回: 観光地域創生の成功事例① 長浜の事例研究 第8回: 観光地域創生の成功事例② 由布院の事例研究 第9回: 観光地域創生の成功事例③ 直島の事例研究 第10回: 観光地域創生の成功事例④ 小豆島の事例研究 Ⅱ. 観光地域創生を実践するしくみ 第11回: 持続可能な観光による地域創生の理論構成 第12回: 観光地域創生の実践① 組織構成のプラットフォーム論 第13回: 観光地域創生の実践② ブランニングと集客交流戦略 第14回: 観光地域創生の実践③ 地域資本開発と持続可能性の実践 第15回: 学修到達度の確認および講義内容の総括		
成績評価	評価の種類	評価割合(%)	評価基準
	論述試験	70	【到達目標1～3】の達成度を確認するため、論述試験を行う。授業で説明された観光振興・地域創生論の考え方や知識の理解度について評価する。詳しい評価基準は、授業で説明する。
	小レポート	30	【到達目標1・2】の達成度を確認するため、毎回の授業で小レポートの提出を求める。課題に対して適切な内容・記述であるかを評価する。詳しい評価基準は、授業で説明する。
テキスト	使用しない。		
参考書	1. 橋本和也 著 『地域文化観光論』ナカニシヤ出版(2018年) 2,600円+税 2. 安村克己 著 『観光まちづくりの力学 第二版』学文社(2010年) 1,900円+税 3. 安村克己 著 『持続可能な世界へ 生活空間再生論序説』(2017年) 3,300円+税		
授業時間外学修(事前・事後学修等)	1. 事前学修として、授業で指示された課題について、指定の要領で小レポートを作成し、次回までに提出すること(90分)。 2. 事後学修としては、授業で指示された課題に従って講義ノートを整理事ること(90分)。		
課題に対するフィードバックの方法	1. 論述試験については、試験前に採点基準が提示され、試験後に模範解答が公表される。 2. 小レポートについては、提出後の次回授業においてフィードバックされる。		
受講ルール等	1. 私語は授業の円滑な運営を妨げ、他の学生の迷惑となるので、厳禁とする。 2. 授業の到達目標を確実に達成するため、課題に真剣に取り組む、授業の事前・事後学修を欠かさず行うこと。 3. 授業の進め方や成績評価、詳しい受講ルールについては、初回の授業で説明される。		
連絡先(質問等)	質問や連絡などについては、オフィスアワーに研究室で受け付ける。また、e-mailによる質問や連絡も、常時受け付ける。研究室の場所、オフィスアワーの時間帯およびメールアドレスは、初回の授業で提示する。		

授業科目名	観光事業論		
配当年次	1年次	配当学期	第4クォーター(集中)
クラス数	1クラス	単位数	2単位
必修・選択等の別	必修	授業の方法	講義
担当教員	藤野 公孝 (実務経験を有する教員)		
科目区分	職業専門科目群(実務) 観光事業論科目群		
授業概要	従来の観光事業論は、観光産業論ともよばれ、観光関連企業が利潤を追求する諸活動を研究したが、最新の観光事業論は、政府、自治体や公益団体が主体となっており、観光関連企業とも連携・協働し、地場産業、地元企業や地域住民にとって有益な「社会的価値」を生み出す諸活動の総体を研究するようになった。そこで、この授業では、政府や自治体から、あるいは民間企業と連携して、地域住民の福利厚生や地域全体の活性化を目指して実践する全ての観光事業活動について学ぶ。その際、我が国の観光事業の具体的なプログラムを観光政策のジャンルごとに説明し、世界の観光主要国の観光事業とも比較しながら検討する。		
関連する ディプロマポリシー	DP4 観光実務の知識と技能の修得		
キーワード	観光事業、観光立国、IR(統合リゾート)事業、地域ブランド化事業、エコツーリズム、グリーンツーリズム、文化観光、芸術祭、観光事業・観光政策の国際比較		
到達目標	【到達目標1】 観光事業論が観光の現実を捉える考え方と手法を身につけ、それらを説明できる。 【到達目標2】 観光事業論が捉えた観光の現実を理解し、それらを説明できる。 【到達目標3】 我が国の「観光立国」事業について、具体的な見識や意見を述べるができる。		
授業計画	第1回: オリエンテーション: 我が国の21世紀の国づくり「観光立国」を支える観光事業 第2回: 戦後の我が国の観光事業 第3回: 高度経済成長期の観光事業 第4回: VJ(ビジット・ジャパン)事業の推進と観光立国推進体制の充実 第5回: 訪日外国人受入環境の整備・充実 第6回: 国際会議等の開催状況と誘致活動 第7回: シンガポールのIR(統合リゾート)事業 第8回: 地域のブランド化と広域観光圏の整備 第9回: エコ・グリーンツーリズムによる地域活性化 第10回: 産業観光による地域活性化 第11回: 文化観光・芸術祭開催による地域活性化 第12回: スポーツ大会開催による地域活性化 第13回: アジア主要国の観光政策と観光事業 第14回: 欧米主要国の観光政策と観光事業 第15回: 東京五輪と観光立国総仕上げ		
成績評価	評価の種類	評価割合(%)	評価基準
	論述試験	60	【到達目標1～3】の達成度を確認するため、論述試験を行う。授業で説明された観光事業論の考え方や知識の理解度について評価する。詳しい評価基準は、授業で説明する。
	小レポート	40	【到達目標1・2】の達成度を確認するため、毎回の授業で小レポートの提出を求める。課題に対して適切な内容・記述であるかを評価する。詳しい評価基準は、授業で説明する。
テキスト	使用しない。		
参考書	藤野公孝、高橋一夫 編著 『CSV 観光ビジネス―地域ともに価値を創る』学芸出版社(2014年) 2,800円+税		
授業時間外学修 (事前・事後学修等)	1. 事前学修として、授業で指示された課題について、指定の要領で小レポートを作成し、次回までに提出すること(90分)。 2. 事後学修としては、授業で指示された課題に従って講義ノートを整理すること(90分)。		
課題に対する フィードバックの方法	1. 論述試験については、試験前に採点基準を提示し、試験後に模範解答を公表する。 2. 小レポートについては、提出後の次回授業においてフィードバックを行う。		
受講ルール等	1. 私語は授業の円滑な運営を妨げ、他の学生の迷惑となるので、厳禁とする。 2. 授業の到達目標を確実に達成するため、課題に真剣に取り組む、授業の事前・事後学修を欠かさず行うこと。 3. 授業の進め方や成績評価、詳しい受講ルールについては、初回の授業で説明される。		
連絡先(質問等)	質問は、授業終了後に教室で受け付ける。		

授業科目名	観光支援ビジネス実務発展論		
配当年次	1年次	配当学期	第4クォーター
クラス数	5クラス	単位数	1単位
必修・選択等の別	必修	授業の方法	講義
担当教員	大熊 伸二 / 石床 渉 / 阿部 有香 / 川田 里絵 (実務経験を有する教員)		
科目区分	職業専門科目群(実務) 臨地実務実習事後学修科目群		
授業概要	この授業は、「臨地実務実習Ⅰ」の学修成果を振り返り、その効果を理論的に整理して自身の能力に定着させ、さらに今後の学修全体に体系的につなげることを目的とする。振り返りのポイントは3つある。第一に、実習施設で実践的に学んだ観光支援ビジネス実務に関する理解度を確認する。第二に、当該実習施設で体得した各自の学修の成果と課題を自身で再検討する。そして第三に、学生各自が各エリアにおける各施設の実習で体得した観光支援ビジネスの状況について、エリアごとにグループ内で情報を交換しながら各エリアの観光振興・地域創生の全体像を統合する。授業は、講義にくわえて、グループワークやプレゼンテーションなどの授業形式によって進められる。		
関連するディプロマポリシー	DP4 観光実務の知識と技能の修得		
キーワード	地域観光、観光まちづくり、地域産業、観光資源、エリア、香川県		
到達目標	【到達目標1】 実習施設の観光実務と観光振興事業の概要・特徴・課題を説明できる。 【到達目標2】 「臨地実務実習Ⅰ」において必要な能力と今後鍛えるべき能力について分析し、説明することができる。 【到達目標3】 実習施設のある地域の観光地としての特徴と課題を説明することができる。		
授業計画	第1回: 本科目と「臨地実務実習Ⅰ」の関連性の確認、実習計画の見直し、授業の進め方 第2回: 実習におけるマナーと危機管理の振り返り 第3回: 実習の結果報告① 実習施設 第4回: 実習の結果報告② 第5回: 実習内容分析: 現状と課題の整理 第6回: 実習エリア分析: 現状と課題の整理 第7回: 実習エリア間での情報共有と香川県観光の分析 第8回: 香川県観光の分析結果の報告		
成績評価	評価の種類	評価割合(%)	評価基準
	プレゼンテーション	40	【到達目標1・2】 の達成度を確認するため、所定項目の調査結果をまとめた口頭発表(パワーポイント使用のこと)を求める。その発表内容・発表形式について評価する。詳しい評価基準と調査項目は授業で説明する。
	最終レポート	40	【到達目標1～3】 の達成度を確認するため、所定項目について論じたレポートの提出を求め、その内容で評価する。詳しい評価基準と調査項目は授業で説明する。
	ディスカッション参加態度(リアクションペーパーも含む)	20	【到達目標1～3】 の達成度を確認するため、授業内でのディスカッションでの発言や参加態度(積極性)、リアクションペーパーの書き込み内容で評価する。詳しい評価基準と調査項目は授業で説明する。
テキスト	使用しない。授業で適宜レジュメを配布する。		
参考書	授業で適宜紹介する。		
授業時間外学修(事前・事後学修等)	1. 事前学修として、指示された要領に従い、プレゼンテーション課題の準備を行うこと(120分)。 2. 事後学修として、得られた情報の整理を行い、「臨地実務実習Ⅰ」の実践を振り返ること(60分)。		
課題に対するフィードバックの方法	1. プレゼンテーションについては、発表後の授業で講評される。 2. 最終レポートについては、担当教員が確認したのち、担当教員のコメントを付して返却される。 3. ディスカッション参加態度については、適宜授業でフィードバックされる。		
受講ルール等	1. 私語は授業の円滑な運営を妨げ、他の学生の迷惑となるので、厳禁とする。 2. 授業の到達目標を確実に達成するため、課題に真剣に取り組み、授業の事前・事後学修を欠かさず行うこと。 3. 授業の進め方や成績評価、詳しい受講ルールについては、初回の授業で説明される。		
連絡先(質問等)	質問や連絡などについては、オフィスアワーに研究室で受け付ける。また、e-mailによる質問や連絡も、常時受け付ける。研究室の場所、オフィスアワーの時間帯およびメールアドレスは、初回の授業で提示する。		

授業科目名	観光英語 I		
配当年次	1年次	配当学期	第4クォーター
クラス数	1クラス	単位数	1単位
必修・選択等の別	選択	授業の方法	演習
担当教員	高橋 紀穂		
科目区分	職業専門科目群(観光英語)		
授業概要	観光英語では「読む・書く・聴く・話す」技能が重要である。特に、この4つの技能の中でも、言語が確立していく出発点は「聴く」能力である。本授業では、「観光基礎英語Ⅰ」及び「観光基礎英語Ⅱ」で修得した英語力をもとに、聴くトレーニングを中心に徹底的に学修し、「聴く」能力を向上させることで、英語を通してより高度なコミュニケーションができる力を身に付ける。主な学修方法としては、「単語・句・文」を繰り返し聴き、その後、声を出してシャドーイング練習をする。次に、ある程度の長さの文章をシャドーイング練習することにより、集中力を養うと同時にリスニング力を向上させる。		
関連するディプロマポリシー	DP5 観光英語力の修得		
キーワード	集中力、シャドーイング、スピーチ、(電話での)対話、スケジュール		
到達目標	【到達目標1】シャドーイング練習を継続することにより英語を聴き取る際に必要な「集中力」を向上できる。 【到達目標2】基礎的リスニング練習を継続することによりコミュニケーションに必要な「即応力」を養うことができる。 【到達目標3】英語検定3級/TOEIC 250点～400点相当の実力をつけることができる。		
授業計画	第1回: Lesson 1 の説明文を聞き取りながら、チャンク(単語の連なり)になるとどんな音・意味になるのかを知るトレーニング 第2回: Lesson 2 「イラストを見つけよう」の説明文を聞き取り、シャドーイング練習 第3回: Lesson 3 「明日の予定は？」のスケジュールを聞き取り、シャドーイング練習、各自の予定について学生より発言 第4回: Lesson 3 のシャドーイング及びLesson 4 「今日の部活のスケジュール」のスケジュールを聞き取り、シャドーイング 第5回: 過去のLesson のシャドーイング及びLesson 5 「みんなで出かけよう！」の施設の宣伝を聞き取り、シャドーイング 第6回: シャドーイング訓練及びLesson 6 「恐ろしい体験」の状況描写を聞き取り、シャドーイング、学生の発言 第7回: 過去のLesson のシャドーイング及びLesson 7 「ミキのクラスはどれ？」の人数を聞き取り、シャドーイング 第8回: Lesson 8 「初めてのボランティア」の話し手の気持ちを聞き取り、シャドーイング、体験者によるコメント 第9回: Lesson 9 「日本、好きです」のスピーチを聞き取り、シャドーイング、日本の好きなポイントについて各自発言 第10回: Lesson 10 「どこの国に行きたい？」の説明文を聞き取り、シャドーイング、学生に発言を求める 第11回: 過去のLesson のシャドーイング及びLesson 11 「朝ごはん抜き？」の対話の流れを聞き取り、シャドーイング 第12回: Lesson 12 「文化の違いだね」の対話の流れを聞き取り、シャドーイング、学生によるディスカッション 第13回: 過去のLesson のシャドーイング及びLesson 13 「姉からのプレゼント」の対話を聞き取り、シャドーイング 第14回: Lesson 14 「京都へ行きました」の対話の要点を聞き取り、シャドーイング、学生の発言 第15回: Lesson 15 「チケット入手法は？」の電話での対話を聞き取り、シャドーイング、学生によるスキット		
成績評価	評価の種類	評価割合(%)	評価基準
	リスニングテスト	40	日常生活に必要とされるレベルのリスニング力の達成度を確認するためにリスニングテストを行う。授業中に練習・訓練した「聴く能力」を評価する。
	筆記試験	30	日常生活で欠かせない簡単なメッセージ・人の紹介・道案内・出来事についての説明等に必要となる文法・語彙・読解力について評価をする。
	小レポート	30	コミュニケーションに必要な知識をより多く蓄積するため、毎回の授業で小レポートの提出を求める。適切な内容・記述であるかを評価する。
テキスト	金谷憲 監修『Listening Pilot Level 1 新訂版』東京書籍(2018年) 722円+税		
参考書	授業で適宜紹介する。		
授業時間外学修(事前・事後学修等)	1. 授業の事前・事後学修として、シャドーイング練習を欠かさず行うこと(90分)。 2. 事後学修として、授業で指示された課題について次回までに小レポートを作成・提出すること(90分)。		
課題に対するフィードバックの方法	1. リスニングについては、試験後に模範解答が公表され必要な場合には解説される。 2. 筆記試験についても、試験後に模範解答が公表され必要な場合には解説される。 3. 小レポートについては、内容が模範的である場合授業内で講評される。		
受講ルール等	1. 私語は授業の円滑な運営を妨げ、他の学生の迷惑となるので、厳禁とする。 2. 授業の到達目標を確実に達成するため、課題に真剣に取り組み、授業の事前・事後学修を欠かさず行うこと。 3. 授業の進め方や成績評価、詳しい受講ルールについては、初回の授業で説明される。		
連絡先(質問等)	質問は、授業終了後に教室で受け付ける。		

授業科目名	ファシリテーション実習		
配当年次	1年次	配当学期	第1クォーター
クラス数	1クラス	単位数	1単位
必修・選択等の別	必修	授業の方法	実習
担当教員	石原 晴子		
科目区分	展開科目群		
授業概要	多様化する社会問題に対して、社会のニーズに答えつつ解決していくためには、多様な価値観を受け入れ、考えられる人材を育て、組織を活性化していくための手法が必要である。時代の変化とともに、リーダーシップのスタイルも変容してきた。指示、命令するトップダウン型のリーダーシップのスタイルに加え、チームメンバーから意見を引き出し、コンセンサスを取る「ファシリテーション型リーダー」が求められている。本実習では、相手の思考と行動を促すコミュニケーションスキル「コーチング」と、チーム活動や会議運営を促進する「ファシリテーション」について学び、組織を活性化するための人材戦略の上でどのように活用すべきかを実践的に学ぶ。同じ学習目標を共有する「チーム活動」として、ファシリテーション実践の場としたい。		
関連するディプロマポリシー	DP6 他分野の応用的な能力の修得		
キーワード	コミュニケーションスキル、聞く力、伝える力、ファシリテーション、コーチング、リーダーシップ		
到達目標	【到達目標1】ファシリテーションとは何かを理解し説明できる。 【到達目標2】自らのコミュニケーションにおける課題は何かを認識し、改善に向けた行動をとることができる。 【到達目標3】自分らしいリーダーシップを発揮するために必要な要素を理解し、次の行動を考え実践することができる。		
授業計画	第1回：オリエンテーション：授業の狙いと自己目標設定 第2回：コミュニケーションとは何か 第3回：ファシリテーションの基礎知識 第4回：リーダーシップとマネジメント 第5回：聴く力を磨く 第6回：質問力を上げる3つのステップ 第7回：まとめるための板書力 第8回：ディスカッション実践① アイスブレイク 第9回：改善を生み出す振り返りの手法 第10回：ディスカッション実践② Tチャート 第11回：ディスカッション実践③ Iチャート 第12回：ディスカッション実践④ ブレーンストーミング 第13回：ディスカッション実践⑤ 親和図にまとめる 第14回：ディスカッション実践⑥ 様々なフレームワーク 第15回：総括 今後に向けて		
成績評価	評価の種類	評価割合(%)	評価基準
	小レポート	50	【到達目標1・2】の達成度を確認するため、毎回の授業で小レポートの提出を求める。授業内容への理解と、学びからの気づきの深さなど、記述内容から判断し、評価する。
	授業への貢献度 (授業における発表など)	20	【到達目標2・3】の達成度を確認するため、授業での発表の際など、授業への積極的な参加、課題取り組み時の態度など、他者の学びへの貢献を感じられた際に評価する。
	最終課題 (アクションプランの作成)	30	【到達目標1～3】の達成度を確認するため、各自で取り組む最終課題の完成度や、チームへの貢献度を可視化し評価する。
テキスト	使用しない。		
参考書	1. 谷益美、円茂竹縄 著 『マンガでやさしくわかるファシリテーション』日本能率協会マネジメントセンター(2017年) 1,500円+税 2. 谷益美、枝川義邦 著 『タイプがわかればうまくいく！コミュニケーションスキル』総合法令出版(2015年) 1,400円+税 3. 谷益美 著 『リーダーのための！ファシリテーションスキル』すばる舎(2014年) 1,500円+税 4. 大嶋祥誉 著 『マッキンゼーで叩き込まれた「問い」の力』三笠書房(2021年)750円+税		
授業時間外学修 (事前・事後学修等)	1. 事前学修として、高松市における地域課題解決の取り組みについて、それぞれに事前調査した上で授業に臨むこと。 2. 事後学修として、各自のコミュニケーション課題の改善に向けたアクションプランの作成により、自らのレベルアップに取り組むこと。		
課題に対するフィードバックの方法	1. 小レポートについては、毎回の授業でフィードバックされる。 2. 授業への貢献度については、授業で適宜フィードバックされる。 3. 最終課題(アクションプランの作成)については、最終の授業で、口頭でフィードバックされる。		
受講ルール等	1. 私語は授業の円滑な運営を妨げ、他の学生の迷惑となるので、厳禁とする。 2. 授業の到達目標を確実に達成するため、課題に真剣に取り組み、授業の事前・事後学修を欠かさず行うこと。 3. 授業の進め方や成績評価、詳しい受講ルールについては、初回の授業で説明される。 4. 対話しながらの体験学修のため、講師の指示の範囲内での飲食は可とする。 5. この授業は、授業内容の性質上、多くの相互対話の機会を持つ。対話やグループ活動への積極的な参加態度が必須であることに留意すること。		
連絡先(質問等)	授業終了後に、教室で質問を受け付ける。		

授業科目名	異文化理解		
配当年次	2年次	配当学期	第1クォーター
クラス数	1クラス	単位数	2単位
必修・選択等の別	選択必修	授業の方法	講義
担当教員	吉田 雄介		
科目区分	基礎科目群(思考法)		
授業概要	多様な文化的背景の人々が集まると、必ず葛藤が生じる。比較的同質とされる日本社会では、こうした文化間の葛藤や多文化共生の視点が苦手である。グローバル化した今日においてはこの種の葛藤は不可避であるが、逆にそれは文化の多様性や多文化共生を理解するチャンスでもある。異文化理解を検討する上で、この授業では、イスラーム教やイスラーム世界の文化・慣習を対象にする。それは、世界のイスラーム教徒人口が15億人を超え、イスラーム教やイスラーム諸国との日常的な接触が増えたにも関わらず、日本人の認識は必ずしも豊富といえないからである。しかも、イスラーム世界といっても一枚岩ではなく、各地で多様でもある。そこで、この授業では、イスラーム世界およびイスラーム教・文化について基本的な知識や理解を獲得することで、異文化理解の視点を養うことを目的とする(ただし、イスラーム世界の多様性にも十分に注意を払うことにする)。		
関連するディプロマポリシー	DP2 思考法の修得		
キーワード	異文化理解、文化摩擦、イスラーム、イスラーム諸国、西アジア、南アジア、東南アジア、アフリカ、ヨーロッパ、アメリカ		
到達目標	【到達目標1】異文化であるイスラーム(教)やそれに関連するイスラーム文化の基本的知識を説明できる。 【到達目標2】異文化であるイスラーム世界の文化的・地理的多様性を把握する能力を他の研究に応用できる。		
授業計画	第1回: 講義概要、授業計画、成績評価基準の解説 第2回: 同化主義、多文化主義、多文化共生 第3回: 異文化理解とは? グローバル・スタンダードとしての西欧文化 第4回: イスラーム諸国からの訪日客、日本のイスラーム教徒 第5回: イスラーム(教)とは① イスラームの教え 預言者とクルアーン 第6回: イスラーム(教)とは② イスラームの教え イスラーム法学と神学 第7回: イスラーム(教)とは③ イスラームの略史 第8回: イスラーム(教)とは④ 各地での発展 第9回: イスラーム文化① 歴史的な発展 第10回: イスラーム文化② 現代の地域的特色・多様性 第11回: イスラーム諸国の地誌① 西アジア、北アフリカ、南アジア 第12回: イスラーム諸国の地誌② 東南アジア、中央アジア 第13回: イスラームをめぐる問題① 欧米における移民問題と文化摩擦 第14回: イスラームをめぐる問題② 現代の文化的・地政学的な紛争・戦争 第15回: 学修到達度の確認および講義内容の総括		
成績評価	評価の種類	評価割合(%)	評価基準
	論述試験	50	【到達目標2】の達成度を確認するため、論述試験を行う。授業で説明された内容の理解度について評価する。
	小レポート	50	【到達目標1】の達成度を確認するため、毎回の授業で小レポートの提出を求める。評価基準については、授業で説明する。
テキスト	使用しない。授業で適宜プリントを配布する。		
参考書	1. 小杉泰、黒田賢治、二ツ山達朗 編 『大学生・社会人のためのイスラーム講座』ナカニシヤ出版(2018年) 2,400円+税 2. 寺坂昭信 著 『大学テキスト 観光地理学 世界と日本の都市と観光』古今書院(2009年) 2,600円+税		
授業時間外学修(事前・事後学修等)	1. 事前学修として、事前に授業で指示された内容で課題を作成し、次の授業までに提出すること(90分)。 2. 事後学修として、授業後に教員が関連する小レポートを指示するので、次の授業までに提出すること(90分)。		
課題に対するフィードバックの方法	1. 論述試験については、試験前に採点基準が提示され、試験後に模範解答が公表される。 2. 小レポートについては、担当教員が確認したのち、担当教員のコメントを付して返却される。		
受講ルール等	1. 私語は授業の円滑な運営を妨げ、他の学生の迷惑となるので、厳禁とする。 2. 授業の到達目標を確実に達成するため、課題に真剣に取り組み、授業の事前・事後学修を欠かさず行うこと。 3. 授業の進め方や成績評価、詳しい受講ルールについては、初回の授業で説明される。		
連絡先(質問等)	質問や連絡などについては、オフィスアワーに研究室で受け付ける。また、e-mailによる質問や連絡も、常時受け付ける。研究室の場所、オフィスアワーの時間帯およびメールアドレスは、初回の授業で提示する。		

授業科目名	信仰の歴史		
配当年次	2年次	配当学期	第3クォーター
クラス数	1クラス	単位数	2単位
必修・選択等の別	選択必修	授業の方法	講義
担当教員	内田 忠賢		
科目区分	基礎科目群(思考法)		
授業概要	信仰とは、神仏など何らかの対象を信じて崇めることをいい、日本では古くから多種多様な様相を見せている。本講義では、日本における民間信仰の歴史と現在を中心に論じたい。いわゆる大宗教(仏教、キリスト教、イスラム教など)諸派や新宗教、新々宗教を直接の対象とはしない。民間信仰は私たち庶民の身近な信仰のありかたである。そこには、森羅万象にカミを感じるアニミズム的な日本人の感性がよく反映している。しかも日本の歴史の中で、地域社会の歴史の中で育まれ、変貌してきた感性である。それらの具体相を学び、そこから特徴や課題を考えたい。また、日本人に編入させられたマイノリティ(アイヌ、琉球人)の信仰の歴史についても触れる。		
関連するディプロマポリシー	DP2 思考法の修得		
キーワード	民間信仰、あの世とこの世、死者、祭り、盆と正月、女性、アイヌ、琉球、社会組織、妖怪		
到達目標	【到達目標1】民間信仰の基本的な用語や概念について説明できる。 【到達目標2】民間信仰と地域社会、地域文化との関わり、相互の影響、それらの課題について説明できる。 【到達目標3】民間信仰をめぐる様々な現象について、現代社会の課題に関連づけて考えることができる。		
授業計画	第1回: ガイダンス 民間信仰の過去・現在・未来 第2回: 死んだら何処へ行くのか? (盆行事) 第3回: 死者は何処にいるのか? (両墓制) 第4回: 女性と民間信仰(女性差別? 女性区別? ジェンダー問題?) 第5回: 柳田国男と「妹の力」 第6回: 都市祭礼と信仰(京都・祇園祭) 第7回: 都市祭礼と信仰(千葉・佐原大祭) 第8回: 民間信仰と社会組織(年齢階梯制) 第9回: マイノリティと民間信仰(アイヌ文化) 第10回: マイノリティと民間信仰(琉球文化) 第11回: カミと妖怪 第12回: 山・海と民間信仰 第13回: 四国と信仰(四国遍路) 第14回: 四国と信仰(金毘羅詣) 第15回: 学修到達度の確認および講義内容の総括		
成績評価	評価の種類	評価割合(%)	評価基準
	コミュニケーションペーパー	50	【到達目標1】の達成度を確認するため、毎回の授業でコミュニケーションペーパーの提出を求める。
	論述試験	50	【到達目標1～3】の達成度を確認するため、論述試験を行う。
テキスト	使用しない。毎回授業で資料を配布する。		
参考書	授業で適宜紹介する。		
授業時間外学修(事前・事後学修等)	1. 事前学修として、次回の授業内容に関連するweb情報に、目を通しておくこと(90分)。 2. 事後学修として、授業で提示された書籍や論文を読むこと(90分)。		
課題に対するフィードバックの方法	1. コミュニケーションペーパーについては、各授業の冒頭でフィードバックされる。 2. 論述試験については、試験前に採点基準が提示される。		
受講ルール等	1. 私語は授業の円滑な運営を妨げ、他の学生の迷惑となるので、厳禁とする。 2. 授業の到達目標を確実に達成するため、課題に真剣に取り組み、授業の事前・事後学修を欠かさず行うこと。 3. 授業の進め方や成績評価は、初回の授業で説明される。		
連絡先(質問等)	質問や連絡などについては、講義後に教室で受け付ける。また、e-mailによる質問や連絡も、常時受け付ける。		

授業科目名	キャリアデザイン論		
配当年次	2年次	配当学期	第3クォーター
クラス数	1クラス	単位数	2単位
必修・選択等の別	必修	授業の方法	講義
担当教員	濱島 朋子 (実務経験を有する教員)		
科目区分	基礎科目群(自学自修)		
授業概要	多様化する社会の中で自立的なキャリアを形成するためには、自己理解を深め、広い視野で社会の現象を捉えることが不可欠である。本学の学修期間は、多くの学生にとって社会に出る直前の重要な段階にあたるため、ここでの時間をどのように過ごすかが今後の人生を大きく左右する。本講義では、キャリアデザインの理論を学び、自己分析や社会人基礎力の習得を通じて、自分のキャリアを主体的にデザインする力を養う。また、グループワークやプレゼンテーションを中心に、社会で求められるビジネスマナーやコミュニケーションスキルの実践的な演習を行い、講師の実務経験を基にした具体的な事例を紹介する。これにより、学生一人ひとりが将来の社会において自身のキャリアビジョンを実現できるよう、実践的な学びを提供し、社会で活躍するための基礎を築くことを目指す。		
関連するディプロマポリシー	DP1 自学自修の態度形成		
キーワード	キャリアデザイン、社会人基礎力、プロティアンキャリア、コミュニケーションスキル、自己分析、職業選択、グループワーク		
到達目標	【到達目標1】働くとは何か、その目的について考え方を説明できる。 【到達目標2】自己理解を深め、他者へ自己表現ができる。 【到達目標3】自身のキャリアデザインの考え方について説明できる。		
授業計画	第1回：オリエンテーションとキャリアデザインの意義 第2回：キャリア概論と自己分析の第一歩 第3回：社会人基礎力とグループワークの実践 第4回：変化する社会と柔軟なキャリア設計 第5回：キャリアゴール設定と意志決定の技法 第6回：グループプレゼンテーションによる基礎力向上 第7回：プレゼンテーションスキルの磨き方 第8回：パーソナル分析と職業選択のヒント 第9回：ビジネスマナーとコミュニケーションの基礎 第10回：応用コミュニケーションとマナーの実践 第11回：長期的キャリア形成と学びの継続 第12回：働き方の多様性とキャリア選択 第13回：キャリアデザインと効果的な自己表現① 第14回：キャリアデザインと効果的な自己表現② 第15回：学習到達度の確認とキャリアビジョンの総括		
成績評価	評価の種類	評価割合(%)	評価基準
	小レポート	40	【到達目標1・2】の達成度を確認するため、毎回の授業で小レポートの提出を求める。詳しい評価基準は、授業で説明する。
	プレゼンテーション	20	【到達目標1・2】の達成度を確認するため、第6回のグループプレゼンテーションと第14回の個別プレゼンテーションを求める。詳しい評価基準は、授業で説明する。
	論述試験	40	【到達目標1～3】の達成度を確認するため、論述試験を行う。授業の理解度について評価する。詳しい評価基準は、授業で説明する。
テキスト	使用しない。授業で適宜プリントを配布する。		
参考書	授業で適宜紹介する。		
授業時間外学修(事前・事後学修等)	1. 事前学修として、授業で示された課題や参考書に関する情報を収集し、自分なりの考えをまとめておくこと(90分)。 2. 事後学修として、授業で指示された課題や提出した小レポートの内容について、日常生活で実践すること(90分)。		
課題に対するフィードバックの方法	1. 小レポートについては、提出した次の授業においてフィードバックされる。 2. プレゼンテーションについては、発表後の授業で講評される。 3. 論述試験については、試験前に採点基準が提示され、試験後に模範解答が公表される。		
受講ルール等	1. 私語は授業の円滑な運営を妨げ、他の学生の迷惑となるので、厳禁とする。 2. 授業の到達目標を確実に達成するため、課題に真剣に取り組み、授業の事前・事後学修を欠かさず行うこと。 3. 授業の進め方や成績評価、詳しい受講ルールについては、初回の授業で説明される。		
連絡先(質問等)	質問や連絡などについては、オフィスアワーに研究室で受け付ける。また、e-mailによる質問や連絡も、常時受け付ける。研究室の場所、オフィスアワーの時間帯およびメールアドレスは、初回の授業で提示する。		

授業科目名	観光メディア論		
配当年次	2年次	配当学期	第1クォーター
クラス数	1クラス	単位数	2単位
必修・選択等の別	選択	授業の方法	講義
担当教員	有國 明弘		
科目区分	職業専門科目群(学術) 観光応用理論科目群		
授業概要	観光や観光振興は、メディアと深い関係がある。この授業では、ガイドブックや旅番組など、旅行情報を提供する広報ツールとしてのメディアの一面を取り扱うだけでなく、メディアがもたらす地域への影響や地域住民へのアイデンティティへの波及、観光客同士の情報交換など、さまざまな観点から観光とメディアの関係を学ぶ。それにより、学生自身が各々に馴染みのある地域を題材に、その地の観光とメディアの関係について具体的に考察できるようになることを目指す。なお、授業は講義形式で展開し、基本的にはテキストの内容に準じて進める。		
関連するディプロマポリシー	DP3 観光の理論と知識の理解		
キーワード	メディア、場所イメージ、ガイドブック、写真、映画、小説、モバイルメディア、再帰性		
到達目標	【到達目標1】 観光におけるメディアの種類や役割について説明できる。 【到達目標2】 メディアが観光地に与える影響について説明できる。 【到達目標3】 自らの出身地や馴染みの深い地域を題材に、観光とメディアの関係を、具体例をもって論じることができる。		
授業計画	第1回: ガイドブック: メディアとは何か 第2回: 観光の記号とメディア(テキスト第1章) 第3回: 再帰性のメディア(テキスト第13章) 第4回: バックパッカーたちのメディア — テレビ番組・ガイドブック(テキスト第4章) 第5回: 映画観光と住民運動 — 映画(テキスト第2章) 第6回: 観光地と場所イメージ — 映画(テキスト第3章) 第7回: 水の都・松江の夕日 — 旅行記(テキスト第5章) 第8回: 写真と語り — 写真(テキスト第8章) 第9回: メディア・コンテンツ・観光 — アニメ(テキスト第9章) 第10回: モバイルメディアとツーリズム — インターネット(テキスト第6章) 第11回: ツーリズムとしての音楽フェス — インターネット(テキスト第7章) 第12回: メディアとしての博物館施設 — 展示 第13回: 「ご当地」はどこにあるのか(テキスト第10章) 第14回: 観光とセルフ・オリエンタリズム(テキスト第11章) 第15回: 学修到達度の確認および講義内容の総括		
成績評価	評価の種類	評価割合(%)	評価基準
	小レポート	50	【到達目標1・2】の達成度を確認するため、毎回の授業で小レポートの提出を求める。指定した課題に対する適切な内容・記述になっているかについて評価する。詳しい評価基準は、授業で説明する。
	期末レポート	50	【到達目標1～3】の達成度を確認するため、全講義終了後に期末レポートの提出を求める。授業で説明された知識や考え方の理解度および応用力について評価する。詳しい評価基準は、授業で説明する。
テキスト	遠藤英樹、寺岡伸悟、堀野正人 編著 『観光メディア論』ナカニシヤ出版(2014年) 2,500円+税		
参考書	渡辺守雄 著 『動物園というメディア』青弓社(2000年) 1,600円+税 上記以外の文献についても、授業で適宜紹介する。		
授業時間外学修(事前・事後学修等)	1. 事前学修として、次の授業に該当するテキストの章を熟読し、要点をノートにまとめておくこと(90分)。 2. 事後学修として、各回の授業テーマについて、授業で扱った題材や地域以外の事例について調べる(90分)。		
課題に対するフィードバックの方法	小レポートおよび期末レポートについては、評価基準表にもとづく評価結果を付して返却される。		
受講ルール等	1. 私語は授業の円滑な運営を妨げ、他の学生の迷惑となるので、厳禁とする。 2. 授業の到達目標を確実に達成するため、課題に真剣に取り組み、授業の事前・事後学修を欠かさず行うこと。 3. 授業の進め方や成績評価、詳しい受講ルールについては、初回の授業で説明される。 4. 授業時間外に大学外の図書館での調査や、レンタルDVD等で作品の鑑賞・分析が必要となる場合がある。		
連絡先(質問等)	質問や連絡などについては、オフィスアワーに研究室で受け付ける。また、e-mailによる質問や連絡も、常時受け付ける。研究室の場所、オフィスアワーの時間帯およびメールアドレスは、初回の授業で提示する。		

授業科目名	観光データ整理実習		
配当年次	2年次	配当学期	第1クォーター
クラス数	1クラス	単位数	1単位
必修・選択等の別	必修	授業の方法	実習
担当教員	有國 明弘		
科目区分	職業専門科目群(学術) 観光応用理論科目群		
授業概要	情報やデータの収集・処理・加工・分析は、観光の分野にとどまらず、現代社会では基礎的かつ必須の素養である。UNWTO (World Tourism Organization of the United Nations 国連世界観光機関)の観光統計を含め、観光関連の統計データは国内外で整備が遅れていた。それが近年、観光に関するデータや統計の整備が進みつつあり、こうした情報を利用することで、観光振興の問題点などを洗い出しやすくなった。そこで、この実習では、主として観光に関連するデータを収集、整理し、さらに図表化することで、観光にかかわる諸現象を総合的・学術的に把握し、さらに観光と地域の特徴をわかりやすく説明する能力を獲得することを目標とする。なお、データの整理、分析、図表化には、表計算ソフトExcelを使用する。また、観光にかかわるアンケート調査のデータ整理についても基本的な知識を身につけることを目標とする。		
関連するディプロマポリシー	DP3 観光の理論と知識の理解		
キーワード	統計、UNWTO、観光統計、EXCEL、グラフ作成、データ分析、アンケート		
到達目標	【到達目標1】観光に関連する統計類の入手と加工ができる。 【到達目標2】観光に関するデータを視覚化することで、地域の特徴や観光の動向を明確に読み取ることができる。 【到達目標3】授業で身につけた統計データ整理の方法を、いろいろな研究課題に応用できる。		
授業計画	第1回: ガイダンス: 授業概要・授業計画・成績評価基準の解説 第2回: さまざまなデータ 第3回: 観光にかかわるさまざまな統計データ 第4回: Excelの基本操作① セルデータの作成、書式設定 第5回: Excelの基本操作② 数式や関数の適用 第6回: 統計データの取り込みと表の作成 第7回: データの視覚化① 円グラフと帯グラフ 第8回: 合計、比率 第9回: データの分布、平均値、最頻値、中央値 第10回: 標準偏差 第11回: 因果関係を探る 第12回: データの視覚化② 折れ線グラフと散布図 第13回: アンケート調査① アンケート調査とは 第14回: アンケート調査② 初歩的なアンケート調査方法 第15回: 学修到達度の確認および授業内容の総括		
成績評価	評価の種類	評価割合(%)	評価基準
	論述試験	50	【到達目標2・3】の達成度を確認するため、論述試験を行う。授業で説明された統計データの加工・分析の理解度について評価する。詳しい評価基準は、授業で説明する。
	小レポート	50	【到達目標1】の達成度を確認するため、毎回の授業で小レポートの提出を求める。詳しい評価基準は、授業で説明する。
テキスト	使用しない。授業で適宜プリントを配布する。		
参考書	中村永友、山田智哉、金明哲 著 『Excelで学ぶ統計・データ解析入門』丸善出版(2011年) 2,800円+税		
授業時間外学修(事前・事後学修等)	1. 事前学修として、事前に授業で指示する内容で課題を作成し、次回までに提出すること。 2. 事後学修として、指示された課題について、指定の要領で小レポートを作成し、次回までに提出すること。		
課題に対するフィードバックの方法	1. 論述試験については、試験前に採点基準が提示され、試験後に模範解答が公表される。 2. 小レポートについては、提出後の次回授業においてフィードバックされる。		
受講ルール等	1. 私語は授業の円滑な運営を妨げ、他の学生の迷惑となるので、厳禁とする。 2. 授業の到達目標を確実に達成するため、課題に真剣に取り組み、授業の事前・事後学修を欠かさず行うこと。 3. 授業の進め方や成績評価、詳しい受講ルールについては、初回の授業で説明される。		
連絡先(質問等)	質問や連絡などについては、オフィスアワーに研究室で受け付ける。また、e-mailによる質問や連絡も、常時受け付ける。研究室の場所、オフィスアワーの時間帯およびメールアドレスは、初回の授業で提示する。		

授業科目名	観光実務基礎論		
配当年次	2年次	配当学期	第1クォーター
クラス数	4クラス	単位数	1単位
必修・選択等の別	必修	授業の方法	講義
クラスの担当教員	大熊 伸二 / 石床 渉 / 島田 裕之 / 阿部 有香 / 川田 里絵 (実務経験を有する教員)		
科目区分	職業専門科目群(実務) 臨地実務実習事前学修科目群		
授業概要	本授業の目的は、「臨地実務実習Ⅱ」の学びを円滑かつ効果的にするため、実習先の観光支援ビジネスの業務を想定して、あらかじめ身につけておくべき知識と技能を修得することにある。授業では、実習先の観光支援ビジネスのうち、航空、鉄道、宿泊、観光地域創生について、各事業の歴史や特性、経営と課題、事業所の組織、部門別業務概要などの総括的知識にくわえ、それぞれの事業において近年特に重要性が増している地域観光振興への取り組みなどについても学修する。授業は主に講義形式で展開されるが、グループワーク、パワーポイントを使用した発表などの機会も設ける。また、「臨地実務実習Ⅱ」において体験することとなる部門別実務への予行演習として、観光支援ビジネス施設の各業務部門での具体的な職務手順や関連する専門知識などについて、ロールプレイも交えながら実践的に学修する。		
関連するディプロマポリシー	DP4 観光実務の知識と技能の修得		
キーワード	観光支援ビジネス、航空業、鉄道業、宿泊業、地域観光創生事業、基礎実務、地域連携、安全		
到達目標	【到達目標1】観光支援ビジネスの「臨地実務実習Ⅱ」に備えた基礎実務の予備知識を説明できる。 【到達目標2】観光支援ビジネスに携わる各事業体(航空、鉄道、宿泊、観光地域創生)の役割・課題を理解し、自らの言葉で説明できる。 【到達目標3】授業で身につけた考え方や知識を、「臨地実務実習Ⅱ」やいろいろな研究課題に応用できる。		
授業計画	第1回：観光支援ビジネスの歴史と社会的経済的意義 第2回：観光支援ビジネス関連施設の歴史と機能 第3回：観光支援ビジネスの基礎実務 第4回：観光支援ビジネスと地域連携の関係 第5回：観光支援ビジネスにおける安全の重要性とその確保に向けた取り組み 第6回：観光支援ビジネスの現場業務の現状と課題、未来展望 第7回：「臨地実務実習Ⅱ」に向けた準備(心構え、マナー、危機管理) 第8回：学修到達度の確認および講義内容の総括		
成績評価	評価の種類	評価割合(%)	評価基準
	論述試験	70	【到達目標1～3】の達成度を確認するため、論述試験を行う。授業で説明された考え方や知識の理解度について評価する。詳しい評価基準については、授業で説明する。
	小レポート	20	【到達目標1～2】の達成度を確認するため、毎回の授業で小レポートの提出を求める。詳しい評価基準については、授業で説明する。
	小テスト	10	【到達目標1～2】の達成度を確認するため、毎回の授業で小テストを実施する。詳しい評価基準については、授業で説明する。
テキスト	必要に応じて、初回の授業で担当教員より指示する。		
参考書	授業で担当教員より適宜紹介する。		
授業時間外学修(事前・事後学修等)	1. 事前学修として、指示された課題について、指定の要領で小レポートを作成し、次回までに提出すること(90分)。 2. 事後学修として、授業の講義ノートを整理し、指示されたキーワードの説明をできるようにしておくこと(90分)。なお、次回の授業で毎回、その理解度を確認するための小テストが実施される。		
課題に対するフィードバックの方法	1. 論述試験については、試験前に採点基準が提示され、試験後に模範解答が公表される。 2. 小レポートについては、各授業の冒頭でフィードバックされる。 3. 小テストについては、授業で解答の要点が解説され、採点後に答案用紙が返却される。		
受講ルール等	1. 私語は授業の円滑な運営を妨げ、他の学生の迷惑となるので、厳禁とする。 2. 授業の到達目標を確実に達成するため、課題に真剣に取り組み、授業の事前・事後学修を欠かさず行うこと。 3. 授業の進め方や成績評価、詳しい受講ルールについては、初回の授業で説明される。		
連絡先(質問等)	質問や連絡などについては、オフィスアワーに研究室で受け付ける。また、e-mailによる質問や連絡も、常時受け付ける。研究室の場所、オフィスアワーの時間帯およびメールアドレスは、初回の授業で提示する。		

授業科目名	観光英語Ⅱ		
配当年次	2年次	配当学期	第1クォーター
クラス数	1クラス	単位数	1単位
必修・選択等の別	選択	授業の方法	演習
担当教員	高橋 紀穂		
科目区分	職業専門科目群(観光英語)		
授業概要	「観光英語Ⅰ」の場合と同様に「単語・句・文」を繰り返し聴き、シャドーイング練習をするが、より高度なレベルの内容となる。聞き取れない部分は、発音とその前後の意味や内容から推測し、リスニングをする。こうしたシャドーイング練習を繰り返すことにより、集中力をさらに高め、英文を聴きながら推測し理解する能力を身に付ける。これは日本人が日本語を聴くときに無意識のうちにやっている作業である。カラオケ上達方法と同様に、シャドーイングの技能の向上はトレーニングではなく、それに費やした時間で決まる。言い換えればシャドーイングの日常化で決まる。なお本授業の履修には、「観光英語Ⅰ」を履修済みであることが望ましい。		
関連するディプロマポリシー	DP5 観光英語力の修得		
キーワード	シャドーイング・レシテーション・スキット		
到達目標	【到達目標1】観光英語Ⅰに引き続き、シャドーイングを継続することにより「集中力」をさらに向上させることができる。 【到達目標2】観光英語Ⅰより高度な内容のリスニング練習により、コミュニケーションに必要な「即応力」を身に付けることができる。 【到達目標3】英語検定3級～準2級/TOEIC300点～500点相当の実力をつけることができる。		
授業計画	第1回: Lesson 1「病院に行くときは・・・」の説明文を聞き取り、シャドーイング及び要約 第2回: Lesson 2「ロンドン橋の歴史」を聞き取り、シャドーイング及び要約、「高松城の歴史」レポート作成を宿題 第3回: Lesson 3「この紙は何?」の手続きの流れを聞き取り、シャドーイング及び要約 第4回: 「高松城の歴史」について各学生よりスピーチ、講師よりアドバイス・コメント 第5回: Lesson 4「図書館のカードを作りたい」の手続きの流れを聞き取り、シャドーイング 第6回: 過去のLesson のシャドーイング及びLesson 5「エンターテインメント・ショー」のテレビ番組を聞き取り、シャドーイング 第7回: 過去のLesson のシャドーイング及びLesson 6「皆様にお知らせします」のアナウンスを聞き取り、シャドーイング 第8回: Lesson 7「おじいさん、日本へ行く」のストーリーの流れを聞き取り、シャドーイング及びレシテーション 第9回: Lesson 7「おじいさん、日本へ行く」の原稿を暗唱して各学生よりレシテーション・スキット 第10回: Lesson 8「犬を探して」のストーリーの流れを聞き取り、シャドーイング、学生よりコメント 第11回: Lesson 9「プレゼントはどこにある?」の位置の説明を聞き取り、シャドーイング 第12回: Lesson 10「保育体験」の体験談を聞き取り、シャドーイング 第13回: 過去のLesson のシャドーイング及びLesson 11「身近な交通手段は?」のスピーチを聞き取り、シャドーイング 第14回: Lesson 12「私の住む町」の街の紹介を聞き取り、シャドーイング、「自分の住む町」レポート作成を宿題 第15回: 「自分の住む町」について各学生よりスピーチ、講師よりアドバイス・コメント		
成績評価	評価の種類	評価割合(%)	評価基準
	リスニングテスト	40	観光英語Ⅰより高度なレベルのリスニング力の達成度を確認するためにリスニングテストを実施し、授業中に訓練した「聴く能力」を評価する。
	筆記試験	30	日常生活で欠かせないメッセージ・物や場所の紹介・道案内・出来事等の説明に必要な文法・語彙・読解力について評価する。
	小レポート	30	コミュニケーションに必要な背景知識を増やすためには、学生自らが書籍・ビデオ・その他のメディア等で情報収集することが必要である。知的財産創りの観点から適切な内容であるかを評価する。
テキスト	金谷憲 監修『Listening Pilot Level 2 新訂版』東京書籍 (2020年) 722年+税		
参考書	授業で適宜紹介する。		
授業時間外学修(事前・事後学修等)	1. 授業の事前・事後学修として、シャドーイング練習を欠かさず行うこと(90分)。 2. 事後学修として、授業で指示された課題について小レポートを作成・提出あるいはスピーチ等の準備をすること(90分)。		
課題に対するフィードバックの方法	1. リスニングについては、試験後に模範解答が公表され必要な場合には解説される。 2. 筆記試験についても、試験後に模範解答が公表され必要な場合には解説される。 3. 小レポート・スピーチ等については、内容が模範的である場合授業内で講評される。		
受講ルール等	1. 私語は授業の円滑な運営を妨げ、他の学生の迷惑となるので、厳禁とする。 2. 授業の到達目標を確実に達成するため、課題に真剣に取り組み、授業の事前・事後学修を欠かさず行うこと。 3. 授業の進め方や成績評価、詳しい受講ルールについては、初回の授業で説明される。		
連絡先(質問等)	質問や連絡などについては、オフィスアワーに研究室で受け付ける。また、e-mailによる質問や連絡も、常時受け付ける。研究室の場所、オフィスアワーの時間帯およびメールアドレスは、初回の授業で提示する。		

授業科目名	臨地実務実習Ⅱ		
配当年次	2年次	配当学期	第2クォーター
クラス数	4クラス	単位数	8単位
必修・選択等の別	必修	授業の方法	実習[臨]
クラスの担当教員	大熊 伸二 / 石床 渉 / 島田 裕之 / 阿部 有香 / 川田 里絵 (実務経験を有する教員)		
科目区分	職業専門科目群(実務) 臨地実務実習科目群		
授業概要	この実習では、観光支援ビジネスで高い実績をあげ地域の観光振興にも寄与する事業体を実習先として、観光支援ビジネスの現場のフロントラインからバックヤードまで、基礎的な実務を実践的に学修する。具体的には、各事業体が従事する基礎的実務、つまり「覚えて遂行する実務」と、業務や地域観光振興・地域連携業務にかかわる基礎知識を修得する。実習先となる観光支援ビジネスの事業体は、①航空、②鉄道、③宿泊、④観光地域創生という4分野のクラスに分けられる。この4クラスの中から学生は自身で実習先となる事業体を選択して、観光支援ビジネスの基礎的実務の実習を行い、思考力、実践力、協働力を実践的に身につける。本実習は、学生各自が実社会の現場における実際の活動に身を置いて学ぶので、普段よりいっそうの真摯な学修態度が求められる。		
関連するディプロマポリシー	DP4 観光実務の知識と技能の修得		
キーワード	観光支援ビジネス、航空業、鉄道業、宿泊業、観光地域創生事業、基礎実務、ホスピタリティ実務、安全・安心、リスク管理		
到達目標	【到達目標1】観光支援ビジネス(航空、鉄道、宿泊、観光地域創生)の基本動作や基本実務を単独で遂行することができる。 【到達目標2】観光支援ビジネス(航空、鉄道、宿泊、観光地域創生)の現場における基本実務の遂行を通して、観光支援ビジネスの大前提となる「安全」の重要性を理解したうえで、安全の業務を実践できる。 【到達目標3】観光支援ビジネス全般に通用するレベルのホスピタリティを体得したうえで、実習の現場で適正なホスピタリティを提供できる。 【到達目標4】観光振興という視点から、観光支援ビジネスの存在意義や課題を自ら考察し説明できる。 【到達目標5】ハンディキャップを持つ顧客への対応、多国籍/多宗教のインバウンド観光客への対応等についての知識や技能を理解し実践できる。		
授業計画	実習期間: 下記①～③を通して6週間とする。 ①実習施設に関する基礎的理解(期間: 2～7日間) ・実務実習の意義や心得、観光支援ビジネスにおける各業務の位置づけ等を理解するとともに、安全に関わる基本姿勢と注意事項、施設設備の概要、各組織、顧客サービスに関する考え方、その他の基礎知識について、実務を担当する実習施設の担当者から説明を受ける。 ・安全・安心に関わる事前学修として、非常時の緊急連絡、顧客の避難誘導、緊急看護、自己の身を守る技術等に関わる実地訓練実習を、事前学修した理論を踏まえながら、実践的に学修する。また、日本語を解さない顧客、高齢者、ハンディキャップを持つ顧客等への対応をロールプレイ等も含めた実習で学修する。 ②実務実習 ・実習先施設における観光支援ビジネス機能の位置づけ、重要性を学修した上で、各部署別の主要業務の基礎実務について、事前学修で修得した知識や技能を踏まえながら、実習先施設の定めたプログラムによって、順次実務実習を行う。実際に顧客への対面サービス実施を通じて、ホスピタリティの実践能力を修得する。この実務実習は、実習施設の実務担当者の指導の下、OJT方式にて実施する。 ③実務実習の振り返りとまとめ(期間: 1日間(最終日)) ・経験した各実務の意義、課題、反省点などについて報告会を行う。また、実務経験を踏まえ観光支援ビジネス施設に関わる新規事業、新たなマーケット開発、並びにIT等を活用したイノベーション等について、ブレーンストーミングと意見交換会を実施する。この報告会/意見交換会には、実習施設実務担当者を配置して、適宜助言や指導を実施する。		
成績評価	評価の種類	評価割合(%)	評価基準
	実習振り返りレポート	80	【到達目標1～5】の達成度を確認するため、実習終了後に振り返りレポートの提出を求める。
	臨地実務実習施設指導者評価書	20	【到達目標1～5】の達成度を総合的に評価する。
テキスト	使用しない。		
参考書	実習施設に応じて適宜紹介する。		
授業時間外学修(事前・事後学修等)	1. 実習前に、配布される実習要項(学生用)をしっかりと読むこと。 2. 実習期間中は、別に定める様式により活動日誌を作成し、実習指導者等の確認を経て担当教員に報告すること。		
課題に対するフィードバックの方法	1. 実習振り返りレポートについては、担当教員が確認したのち、担当教員のコメントを付して返却される。 2. 実習期間中は、担当教員が臨地実務実習施設を巡回し、学生との面談および指導を行う。		
受講ルール等	1. 実習要項(学生用)を熟読し、しっかりと理解した上で実習に臨むこと。 2. 事前に、実習施設と取り交わす誓約書を提出すること。 3. 事前に、学生教育研究災害傷害保険および学研災付帯賠償責任保険に加入すること。 4. 実習期間中にかかる交通費等の費用は、原則として学生が負担する。		
連絡先(質問等)	実習期間中の連絡・質問のための連絡先、連絡方法等については、臨地実務実習事前学修科目「観光実務基礎論」において説明する。実習要項(学生用)も確認のこと。		

授業科目名	観光行動論		
配当年次	2年次	配当学期	第3クォーター
クラス数	1クラス	単位数	2単位
必修・選択等の別	必修	授業の方法	講義
担当教員	田保 顕		
科目区分	職業専門科目群(学術) 観光基礎理論科目群		
授業概要	この授業は、観光行動の社会心理学的なメカニズム、および観光行動と観光対象の関係について講義形式で学ぶ。経済的に豊かな社会では、観光が個人の日常生活の一部となり、個人や集団の観光行動が現代社会に広く普及した結果として、観光行動が現代社会のさまざまな領域で大きな影響を及ぼすようになった。そうした観光行動がどのような社会心理学的な仕組みで発生し、また観光行動がどのような社会的現実をいかに生みだしているのかについても、観光研究の知見を通して解説される。観光行動の研究は、観光研究における主要な課題の一つなので、その研究成果は観光に関連する多くの研究課題に応用される。		
関連するディプロマポリシー	DP3 観光の理論と知識の理解		
キーワード	観光行動、観光客類型、観光類型、観光対象、回遊行動論、巡礼・遍路		
到達目標	【到達目標1】観光行動論について学んだ知識と方法を説明できる。 【到達目標2】観光行動と社会・文化・環境との関係について説明できる。 【到達目標3】観光行動論で身につけた知見を、観光研究のいろいろな課題に応用できる。		
授業計画	第1回：観光行動の基礎理論 観光行動が生起する仕組み 第2回：観光行動の調査方法① 観光行動の実態調査 第3回：観光行動の調査方法② 観光行動の予測調査 第4回：観光行動と観光客類型 第5回：観光回遊の行動特性 第6回：日本人の観光行動の歴史的背景① 古代から近世までの観光行動 第7回：日本人の観光行動の歴史的背景② 近現代の観光行動 第8回：インバウンド観光客の行動 第9回：観光行動と文化 第10回：観光行動と自然 第11回：観光行動と教育 第12回：観光行動と福祉 第13回：観光行動と情報 第14回：観光行動と接遇 巡礼・遍路のホスピタリティ 第15回：学修到達度の確認および講義内容の総括		
成績評価	評価の種類	評価割合(%)	評価基準
	論述試験	70	【到達目標1～3】の達成度を確認するため、論述試験を行う。授業で説明された観光行動論の考え方や知識の理解度について評価する。詳しい評価基準は、授業で説明する。
	小レポート	30	【到達目標1・2】の達成度を確認するため、毎回の授業で小レポートの提出を求める。課題に対して適切な内容・記述であるかを評価する。詳しい評価基準は、授業で説明する。
テキスト	使用しない。		
参考書	前田勇 著『観光とサービスの心理学 観光行動学序説 第二版』学文社(2015年) 2,500円+税		
授業時間外学修(事前・事後学修等)	1. 事前学修として、授業で指示された課題について、指定の要領で小レポートを作成し、次回までに提出すること(90分)。 2. 事後学修としては、授業で指示された課題に従って講義ノートを整理すること(90分)。		
課題に対するフィードバックの方法	1. 論述試験については、試験前に採点基準が提示され、試験後に模範解答が公表される。 2. 小レポートについては、提出後の次回授業においてフィードバックされる。		
受講ルール等	1. 私語は授業の円滑な運営を妨げ、他の学生の迷惑となるので、厳禁とする。 2. 授業の到達目標を確実に達成するため、課題に真剣に取り組み、授業の事前・事後学修を欠かさず行うこと。 3. 授業の進め方や成績評価、詳しい受講ルールについては、初回の授業で説明される。		
連絡先(質問等)	質問や連絡などについては、オフィスアワーに研究室で受け付ける。また、e-mailによる質問や連絡も、常時受け付ける。研究室の場所、オフィスアワーの時間帯およびメールアドレスは、初回の授業で提示する。		

授業科目名	国際観光論		
配当年次	2年次	配当学期	第3クォーター
クラス数	1クラス	単位数	2単位
必修・選択等の別	選択	授業の方法	講義
担当教員	内田 忠賢		
科目区分	職業専門科目群(学術) 観光応用理論科目群		
授業概要	この授業では、国際観光の歴史と現実を学び、国際観光が地球規模でもたらす影響や問題点について考える。大衆化した国際観光は1960年代から出現し、その規模は今日までに急速に拡大し続けている。1960年に7000万人であった年間国際観光客数は、2017年に13億2000万人にまで増大した。このように規模が拡大する国際観光は、いまや世界の動向に重大かつ多様な影響を及ぼす。国際観光がもたらす影響は、収益の増大といった正の効果ばかりでなく、観光公害、文化変容、自然破壊といった、深刻な負の効果も生み出してきた。そうした重大な影響力をもつ国際観光の動向や本質を明らかにして、現代日本における国際観光の現実と問題点についても考えていく。なお、授業は講義形式で展開する。		
関連するディプロマポリシー	DP3 観光の理論と知識の理解		
キーワード	大衆観光(マス・ツーリズム)、観光開発、観光立国政策、観光新植民地主義、囲い込み地観光、観光デモンストレーション効果、エコツーリズム、こだわり観光(スペシャル・インタレスト・ツーリズム)、観光とジェンダー、インバウンドとアウトバウンド、持続可能な観光		
到達目標	【到達目標1】 授業で理解した国際観光論の考え方を説明できる。 【到達目標2】 授業で学んだ国際観光に関する知識を説明できる。 【到達目標3】 授業で身につけた国際観光論の知見を、いろいろな研究課題に応用できる。		
授業計画	第1回: 移動の時代の到来と国際観光 第2回: 大衆観光の幕開けと観光の国際化 第3回: 観光立国政策と南北問題(1970年代) 第4回: 国際観光の拡大と地球規模の環境問題 第5回: 発展途上国の観光開発とその問題 第6回: 国連世界観光機関による持続可能な観光開発 第7回: 先進国のコミュニティ主導型観光開発 第8回: 国際観光客の多様化 行楽客から「こだわり観光客」へ 第9回: ソーシャル・ツーリズムからアクセシブル・ツーリズムへ 第10回: 国際観光のインバウンドとアウトバウンド 第11回: 日本の観光におけるアウトバウンドの動向と課題 第12回: 日本の観光におけるインバウンドの効果と問題 第13回: 国際観光と日本の観光政策 第14回: 日本の観光におけるインバウンドとアウトバウンドの展望 第15回: 学修到達度の確認および講義内容の総括		
成績評価	評価の種類	評価割合(%)	評価基準
	論述試験	70	【到達目標1～3】 の達成度を確認するため、論述試験を行う。授業で説明された国際観光論の考え方や知識の理解度について、評価する。詳しい評価基準は、授業で説明する。
	小レポート	20	【到達目標1・2】 の達成度を確認するため、毎回の授業で小レポートの提出を求める。詳しい評価基準は、授業で説明する。
	小テスト	10	【到達目標1・2】 の達成度を確認するため、毎回の授業で小テストを行う。授業に関連するキーワードなどの理解度を評価する。詳しい評価基準は、授業で説明する。
テキスト	使用しない。		
参考書	授業で適宜紹介する。		
授業時間外学修(事前・事後学修等)	1. 事前学修として、授業で指示された課題について、指定の要領で小レポートを作成し、次回までに提出すること(90分)。 2. 事後学修として、授業の講義ノートを整理し、指示されたキーワードの説明をできるようにしておくこと(90分)。なお、次回の授業で毎回、その理解度を確認するための小テストが実施される。		
課題に対するフィードバックの方法	1. 論述試験については、試験前に採点基準が提示され、試験後に模範解答が公表される。 2. 小レポートについては、提出後の次回授業においてフィードバックされる。 3. 小テストについては、授業で解答の要点が解説され、採点後に答案用紙が返却される。		
受講ルール等	1. 私語は授業の円滑な運営を妨げ、他の学生の迷惑となるので、厳禁とする。 2. 授業の到達目標を確実に達成するため、課題に真剣に取り組み、授業の事前・事後学修を欠かさず行うこと。 3. 授業の進め方や成績評価、詳しい受講ルールについては、初回の授業で説明される。		
連絡先(質問等)	質問や連絡などについては、オフィスアワーに研究室で受け付ける。また、e-mailによる質問や連絡も、常時受け付ける。研究室の場所、オフィスアワーの時間帯およびメールアドレスは、初回の授業で提示する。		

授業科目名	観光文化施設論		
配当年次	2年次	配当学期	第3クォーター
クラス数	1クラス	単位数	2単位
必修・選択等の別	選択	授業の方法	講義
担当教員	川田 里絵		
科目区分	職業専門科目群(学術) 観光応用理論科目群		
授業概要	この授業は、数ある観光施設(宿泊施設、飲食施設、土産物店などの物販施設、観光案内施設、交通施設等)の中でも、特にレジャー・文化関連の施設を「観光文化施設」とし、その成り立ちを中心に学ぶ。観光文化施設には、例えば博物館や動物園、テーマパークなどが挙げられ、これらは身近なレジャー施設であると同時に、それ自体が観光目的となり遠方から人々を呼び込む観光資源にもなりうる。多くは明治以降に作られたものであるが、その源流は江戸時代からたどることが可能である。近世の人々の文化や習慣、娯楽等が、西洋の影響や近代化を経てどのような形で今日のレジャー施設・文化施設へと転じていったのかを示しながら、これらの施設の現在の状況や機能について事例を用いながら学ぶ。なお、授業は講義形式で行う。		
関連する ディプロマポリシー	DP3 観光の理論と知識の理解		
キーワード	レジャー施設、文化施設、盛り場、レクリエーション、展示・保存		
到達目標	【到達目標1】観光施設にはどのようなものがあるのかを説明できる。 【到達目標2】観光文化施設の歴史や成立過程を説明できる。 【到達目標3】観光文化施設の成り立ちや現在の取り組みを、自ら調査して説明できる。		
授業計画	第1回: はじめに: 観光施設の種類と観光文化施設 第2回: 近世におけるご開帳と見世物 第3回: 博物館① 博覧会の開催と博物館の誕生 第4回: 博物館② 現代の博物館の取り組み 第5回: 動物園① 近世における舶来動物の見世物 第6回: 動物園② 動物園の誕生と現代の動物園の取り組み 第7回: 水族館 「観魚室」と水族館 第8回: 美術館 初期の美術展示と現代の美術館 第9回: 遊園地① 「公園」の誕生と博覧会における遊戯施設 第10回: 遊園地② 現在の遊園地とテーマパーク 第11回: 劇場① 日本における演劇の歴史と劇場 第12回: 劇場② 西洋劇場の登場と劇場の今 第13回: 競馬場 「競べ馬」と近代競馬 第14回: スポーツ施設 日本におけるスポーツの歴史と競技場 第15回: 講義内容の確認と総括		
成績評価	評価の種類	評価割合(%)	評価基準
	提出課題 (コメントシート)	50	【到達目標1・2】の達成度を確認するため、毎回の授業で課題(コメントシート)の提出を求める。授業で説明した内容や理解度について、コメントをもとに評価を行う。詳しい評価基準は、授業で説明する。
	期末レポート	50	【到達目標3】の達成度を確認するため、全講義終了後に期末レポートの提出を求める。レポートの分量や詳しい評価基準は、授業で説明する。
テキスト	使用しない。毎回の授業で教材を配布する。		
参考書	1. 橋爪紳也 著 『日本の遊園地』講談社(2000年) 660円+税 2. 石田戡 著 『日本の動物園』東京大学出版会(2010年) 3,600円+税 上記の他にも、適宜授業で紹介する。		
授業時間外学修 (事前・事後学修等)	1. 事前学修として、次回授業で扱うテーマについて、事前に配布した教材を読んでおくこと(90分)。 2. 事後学修として、授業で扱ったテーマについて、授業で提示したもの以外の事例とその取り組みを調べる(90分)。		
課題に対する フィードバックの方法	1. 提出課題(コメントシート)は、評価基準表に基づく評価結果を付して毎授業の最初に返却される。 2. 期末レポートは、評価基準表に基づく評価結果と担当教員のコメントを付して返却される。		
受講ルール等	1. 私語は授業の円滑な運営を妨げ、他の学生の迷惑となるので、厳禁とする。 2. 授業の到達目標を確実に達成するため、課題に真剣に取り組む、授業の事前・事後学修を欠かさず行うこと。 3. 授業の進め方や成績評価、詳しい受講ルールについては、初回の授業で説明される。		
連絡先(質問等)	質問や連絡などについては、オフィスアワーに研究室で受け付ける。また、e-mailによる質問や連絡も、常時受け付ける。オフィスアワーの時間帯およびメールアドレスは、初回授業時に提示する。		

授業科目名	エコツーリズム実習		
配当年次	2年次	配当学期	第3クォーター
クラス数	1クラス	単位数	1単位
必修・選択等の別	必修	授業の方法	実習
担当教員	横山 昌太郎		
科目区分	職業専門科目群(学術) 観光応用理論科目群		
授業概要	エコツーリズムは、地域の環境を保全しながら行われる観光の一形態であり「持続可能な観光(サステナブルツーリズム)」の一つである。本実習では、エコツーリズムの考え方に基づくガイドツアーを企画するとともに、実践することでガイドとしてのスキルも身につけることを目的とする。実習ではグループワークにより地域の資源の価値や由来、歴史などについて調べるとともに、それらを人々に楽しくかつ興味や好奇心を引き起こす技法について学び、実践する。 ■習得する技術等 ①ガイドツアーの企画・運営・改善方法 ②ガイド(特にインタープリター)としての技術(心構え、コミュニケーション、安全管理、情報の伝え方、参加者の楽しませ方等)		
関連するディプロマポリシー	DP3 観光の理論と知識の理解		
キーワード	エコツーリズム、ガイド、ガイド技術、環境保全、コミュニケーション、プログラムの企画・運営、情報発信、持続可能な観光、インタープリテーション		
到達目標	【到達目標1】エコツーリズムの考え方を説明できる。 【到達目標2】ガイドに必要な要素を説明できる。 【到達目標3】エコツアープログラムを企画できる。 【到達目標4】自ら企画したエコツアープログラムにおいて【到達目標1～3】を踏まえたガイドが実践できる。		
授業計画	第1回: 授業概要, エコツーリズムの考え方 第2回: エコツーリズムの事例(国内、海外、動画) 第3回: エコツアーにおけるガイドの役割と技術 第4回: グループワーク(コミュニケーション) 第5回: エコツアーの企画(資源の活用法、ターゲット、魅力と満足、集客) 第6回: ツアー及びインタープリテーション体験(屋外) 第7回: グループワーク(屋外:屋島を予定、ボランティアガイドツアーへの参加) 第8回: グループワーク(現地調査) 第9回: エコツアーの運営(ガイド技術、インタープリテーションにおけるTORE) 第10回: グループワーク(屋内:ツアーの企画、テーマ設定) 第11回: グループワーク(屋外:企画したツアーのリハーサルと改善) 第12回: 同上 第13回: グループワーク(屋外、各グループで企画したツアーの実践) 第14回: 同上 第15回: エコツアーの改善、まとめ		
	評価の種類	評価割合(%)	評価基準
	提出課題(ガイドツアー参加体験)	30	【到達目標1～2】の達成度を確認するため、エコツーリズム及びガイドツアーの観点から体験したツアー(屋島のボランティアガイド)について、分析・評価する。評価基準は、授業において説明したエコツーリズムの考え方やガイドの役割についてどれだけ理解しているかとする。
	提出課題(エコツアーの実践)	40	【到達目標2～4】の達成度を確認するため、第13, 14回におけるガイドツアーの内容によって評価する。評価基準は授業において説明するプログラム企画やガイド技術の要素をどれだけ踏まえているか、とする。
	提出課題(エコツアーの企画レポート)	30	【到達目標1～4】の達成度を確認するため、各個人でオリジナリティのあるエコツアーを企画を行い、レポートとして提出する。評価基準は授業において説明するプログラム企画やガイド技術の要素に加え、販売・集客など社会への影響をどれだけ想定しているか、とする。
テキスト	パワーポイント等のプレゼンテーションソフトを使用した実習については、その内容を印刷したものを各回に配布する。		
参考書	・スー・ビートン『エコツーリズム教本 先進国オーストラリアに学ぶ実践ガイド』平凡社(2002年)2,400円+税 ・真板昭夫/石森秀三/海津ゆりえ[編]『エコツーリズムを学ぶ人のために』世界思想(2011年)2,500円+税 ・藤崎亜矢子著『サステナブルツーリズム 地球の持続可能性の視点から』見洋書房(2018年)2,200円+税 ・サム・H・ハム著『インタープリテーション』山口書店(2023年)4,000円+税 ・ジム・ブックホルツ/ブレンダ・ラッキー/マイケル・グロス/ロン・ジーマーマン『インタープリターズ ガイドブック』ラーニングアウトドア(2023年)2,800円+税 ・菊間彰『もういちど会いたいと思われる人になる インタープリターが伝えるコミュニケーションと探求の極意』学事出版(2020年)2,100円+税		

授業時間外学修 (事前・事後学修等)	1. 事前学習として、各回の授業内容について、受講前に自分なりの考えをまとめておくこと。 2. 事後学習として、各界の授業内容についてメモを整理し復習しておくこと。 3. 授業の開講期間内に、実際に行われているエコツアーに参加して、そのレポートを作成し、提出すること。 4. 第13回、14回で実践するエコツアーを企画するために、グループごとに企画・運営準備をすすめること。
課題に対する フィードバックの方法	1. 提出課題については、事前に示される評価基準表に基づく評価結果を付して、返却される。
受講ルール等	1. 私語は授業の円滑な運営を妨げ、他の学生の迷惑となるので、厳禁とする。 2. 授業の到達目標を確実に達成するため、課題に真剣に取り組み、授業の事前・事後学修を欠かさず行うこと。 3. 授業の進め方や成績評価、詳しい受講ルールについては、初回の授業で説明される。 4. ガイド技術は、相手の立場に立って、相手に合わせた伝え方の技術でもあり、さまざまな場面で役立つものである。また、ツアーの企画は商品開発の要素が大きいことから、マーケティングなどの基礎的な知識の修得と実践にもつながる。 5. フィールドワーク等により学外で実施する際の交通費等は自己負担とする。
連絡先(質問等)	質問は、授業終了後に教室で受け付ける。

授業科目名	観光実務発展論		
配当年次	2年次	配当学期	第3クォーター
クラス数	4クラス	単位数	1単位
必修・選択等の別	必修	授業の方法	講義
クラスの担当教員	大熊 伸二 / 石床 渉 / 島田 裕之 / 阿部 有香 / 川田 里絵 (実務経験を有する教員)		
科目区分	職業専門科目群(実務) 臨地実務実習事後学修科目群		
授業概要	本授業では、「臨地実務実習Ⅱ」における実践的学修の成果を、理論的に整理しながら今後の学びに有機的につなげることを目的として、主に実習の各ステップにおける学びの振り返りを行う。振り返りのポイントは4つある。第一に、「臨地実務実習Ⅱ」での各自の実践的学修の成果と課題を確認する。第二に、「臨地実務実習Ⅱ」における観光支援ビジネスの基本実務について、各自の理解度を確認する。第三に、観光支援ビジネス全般にかかわる事業特性と業務の課題などについて、ケーススタディで理解を深める。そして第四に、観光支援ビジネスの事業体が、その立地する地域の観光振興にどのような活動をしているかを確認する。なおこの授業は、講義とともに、グループワークやプレゼンテーションによって行われる。		
関連するディプロマポリシー	DP4 観光実務の知識と技能の修得		
キーワード	観光支援ビジネス、基本実務、基本動作、ホスピタリティ実務、ケーススタディ、理論と実践		
到達目標	【到達目標1】「臨地実務実習Ⅱ」で学んだ観光支援ビジネス基本実務の概要・特徴・課題などを理論的に分析し説明できる。 【到達目標2】「臨地実務実習Ⅱ」で学んだ観光支援ビジネス基本実務に求められる知識・技能について整理し説明できる。 【到達目標3】観光支援ビジネスにおける基本実務の課題と今後の展開について、自身の考え方を説明できる。		
授業計画	第1回:「臨地実務実習Ⅱ」で何を学び、それを今後のキャリアにどのように活かすのか(グループ討議) 第2回: 観光支援ビジネス基本実務の事業全体における位置づけと役割(「臨地実務実習Ⅱ」の理論的再確認) 第3回: 観光支援ビジネス基本実務の機能 ケーススタディ① 旅行業の観光振興実務 第4回: 観光支援ビジネス基本実務の機能 ケーススタディ② 鉄道業の観光振興実務 第5回: 観光支援ビジネス基本実務の機能 ケーススタディ③ 宿泊業のホスピタリティ実務 第6回: 観光支援ビジネス基本実務の機能 ケーススタディ④ 空港業務の基本実務(運航・客室・ケータリング等) 第7回: 観光支援ビジネス基本実務の機能 ケーススタディ⑤ 地域創生事業の観光振興実務 第8回: 総括 観光支援ビジネス基本実務の理論と実践		
成績評価	評価の種類	評価割合(%)	評価基準
	プレゼンテーション	40	【到達目標1・2】の達成度を確認するため、所定項目の調査結果をまとめた口頭発表(パワーポイント使用のこと)を求める。その発表内容・発表形式について評価する。詳しい評価基準と調査項目は授業で説明する。
	最終レポート	60	【到達目標1～3】の達成度を確認するため、所定項目について論じたレポートの提出を求め、その内容で評価する。詳しい評価基準と調査項目は授業で説明する。
テキスト	使用しない。授業で適宜レジュメを配布する。		
参考書	授業で適宜紹介する。		
授業時間外学修(事前・事後学修等)	1. 事前学修として、指示された要領に従い、プレゼンテーション課題などの準備を行うこと(90分)。 2. 事後学修として、「臨地実務実習Ⅱ」の実践について、授業で求められる課題ごとに振り返り分析すること(90分)。		
課題に対するフィードバックの方法	1. プレゼンテーションについては、発表後の授業で講評される。 2. 最終レポートについては、担当教員が確認したのち、担当教員のコメントを付して返却される。		
受講ルール等	1. 私語は授業の円滑な運営を妨げ、他の学生の迷惑となるので、厳禁とする。 2. 授業の到達目標を確実に達成するため、課題に真摯に取り組み、授業の事前・事後学修を欠かさず行うこと。 3. 授業の進め方や成績評価、詳しい受講ルールについては、初回の授業で説明される。		
連絡先(質問等)	質問や連絡などについては、オフィスアワーに研究室で受け付ける。また、e-mailによる質問や連絡も、常時受け付ける。研究室の場所、オフィスアワーの時間帯およびメールアドレスは、初回の授業で提示する。		

授業科目名	観光実務応用論		
配当年次	2年次	配当学期	第3クォーター
クラス数	4クラス	単位数	1単位
必修・選択等の別	必修	授業の方法	講義
クラスの担当教員	大熊 伸二 / 石床 渉 / 島田 裕之 / 阿部 有香 / 川田 里絵 (実務経験を有する教員)		
科目区分	職業専門科目群(実務) 臨地実務実習事前学修科目群		
授業概要	本授業の目的は、「臨地実務実習Ⅲ」の学びを円滑かつ効果的にするため、実習先の観光支援ビジネスの主にマネジメント業務を想定して、あらかじめ身につけておくべき知識と技能を修得することにある。授業では、実習先の観光支援ビジネスのうち、交通、宿泊、観光地域創生について、事業体の経営理念、各事業のマネジメントとその課題などの総合的知識にくわえ、それぞれの事業において重要性が増している地域観光振興への理念や実践管理などについても学修する。授業は主に講義形式で展開されるが、グループワーク、パワーポイントを使用した発表などの機会も設ける。また、「臨地実務実習Ⅲ」において体験することとなる部門別実務への予行演習として、観光支援ビジネス施設の各業務部門での具体的なマネジメント手法や関連する専門知識などについて、ケーススタディも交えながら実践的に学修する。		
関連するディプロマポリシー	DP4 観光実務の知識と技能の修得		
キーワード	観光支援ビジネス、交通業、宿泊業、地域観光創生事業、マネジメント実務、観光振興・地域連携のマネジメント実務、インバウンド観光のマネジメント実務		
到達目標	【到達目標1】観光支援ビジネス(航空、鉄道、宿泊、観光地域創生)の「臨地実務実習Ⅲ」に備え、マネジメント実務の予備知識を説明できる。 【到達目標2】観光支援ビジネスに携わる各事業体(航空、鉄道、宿泊、観光地域創生)のオフィスワーク・管理業務を理解し、自らの言葉で説明できる。 【到達目標3】授業で身につけた考え方や知識を、「臨地実務実習Ⅲ」やいろいろな研究課題に応用できる。		
授業計画	第1回：観光支援ビジネスの組織と機能 第2回：観光支援ビジネスのオフィスワークと管理業務 第3回：観光支援ビジネスのマネジメント実務 第4回：観光支援ビジネスと観光振興・インバウンド観光のマネジメント実務 第5回：観光支援ビジネスのリスクマネジメント実務 第6回：観光支援ビジネスマネジメントの現状と課題、未来展望 第7回：「臨地実務実習Ⅲ」に向けた準備(マネジメント実務とインバウンド観光の知識と応用) 第8回：学修到達度の確認および講義内容の総括		
成績評価	評価の種類	評価割合(%)	評価基準
	論述試験	70	【到達目標1～3】の達成度を確認するため、論述試験を行う。授業で説明された考え方や知識の理解度について評価する。詳しい評価基準については、授業で説明する。
	小レポート	20	【到達目標1～2】の達成度を確認するため、毎回の授業で小レポートの提出を求める。詳しい評価基準については、授業で説明する。
	小テスト	10	【到達目標1～2】の達成度を確認するため、毎回の授業で小テストを実施する。詳しい評価基準については、授業で説明する。
テキスト	必要に応じて、初回の授業で担当教員より指示する。		
参考書	授業で担当教員より適宜紹介する。		
授業時間外学修(事前・事後学修等)	1. 事前学修として、指示された課題について、指定の要領で小レポートを作成し、次回までに提出すること(90分)。 2. 事後学修として、授業の講義ノートを整理し、指示されたキーワードの説明をできるようにしておくこと(90分)。なお、次回の授業で毎回、その理解度を確認するための小テストが実施される。		
課題に対するフィードバックの方法	1. 論述試験については、試験前に採点基準が提示され、試験後に模範解答が公表される。 2. 小レポートについては、各授業の冒頭でフィードバックされる。 3. 小テストについては、授業で解答の要点が解説され、採点後に答案用紙が返却される。		
受講ルール等	1. 私語は授業の円滑な運営を妨げ、他の学生の迷惑となるので、厳禁とする。 2. 授業の到達目標を確実に達成するため、課題に真剣に取り組み、授業の事前・事後学修を欠かさず行うこと。 3. 授業の進め方や成績評価、詳しい受講ルールについては、初回の授業で説明される。		
連絡先(質問等)	質問や連絡などについては、オフィスアワーに研究室で受け付ける。また、e-mailによる質問や連絡も、常時受け付ける。研究室の場所、オフィスアワーの時間帯およびメールアドレスは、初回の授業で提示する。		

授業科目名	観光英語Ⅲ		
配当年次	2年次	配当学期	第3クォーター
クラス数	1クラス	単位数	1単位
必修・選択等の別	選択	授業の方法	演習
担当教員	高橋 紀穂		
科目区分	職業専門科目群(観光英語)		
授業概要	通訳案内士は日本の歴史・文化・地理・アートその他様々なことについて語らなければならないが、同時にニュースにも精通していなければならない。そこでこの授業は、英語ニュースを教材にして授業を進めていく。まずは優しい内容の最新ニュースを繰り返し聴き、その内容のアウトラインを英語で述べる。次にニュース内容をディクテーションし、聴こえない部分と聴き間違えた部分を学生自身に気づかせる。同時に「発音と意味内容の両方から聴き取れない部分を推測する」ことの重要性に気付かせ、実践させる。ニュース内で用いられた単語のテストも実施する。なお本授業の履修には、「観光英語Ⅱ」を履修済みであることが望ましい。		
関連するディプロマポリシー	DP5 観光英語力の修得		
キーワード	集中力、シャドーイング、スピーチ、スキット等		
到達目標	【到達目標1】時事英語ニュースを繰り返し聴くことにより、内容を素早く理解する「集中力」を向上させることができる。 【到達目標2】時事英語ニュースの内容把握後、各自の意見・感想を述べることにより反動的に答える「即応力」を養うことができる。 【到達目標3】英語検定準2級～2級/TOEIC400点～600点相当の実力をつけることができる。		
授業計画	第1回：安保分野 第2回：文化分野 第3回：災害分野 第4回：政治分野 第5回：外交分野 第6回：経済分野 第7回：防衛分野 第8回：文化分野 第9回：災害分野 第10回：政治分野 第11回：外交分野 第12回：経済分野 第13回：文化分野 第14回：安保分野 第15回：文化分野		
成績評価	評価の種類	評価割合(%)	評価基準
	リスニングテスト	40	観光英語Ⅱより高度な時事英語ニュースのリスニング力達成度を確認するためにリスニングテストを実施し、授業中に訓練した「聴く能力」を評価する。
	筆記試験	30	観光英語Ⅱより高度な時事英語ニュースに求められる文法・語彙・読解力について評価する。
	単語テスト	30	授業中に実施する単語テスト(30点満点)の平均点で評価する。
テキスト	授業で適宜教材を配布する。		
参考書	英字新聞(Asahi Evening News/Daily Yomiuri/Japan Times etc.)		
授業時間外学修(事前・事後学修等)	1. 事前学修として、前回までの英語ニュースを聴いて内容把握・シャドーイング等の訓練をすること(90分)。 2. 事後学修として、授業で使った英語ニュースの内容把握・英作文・単語を書く練習をすること(90分)。		
課題に対するフィードバックの方法	1. リスニングについては、試験後に模範解答が公表され必要な場合には解説される。 2. 筆記試験についても、試験後に模範解答が公表され必要な場合には解説される。		
受講ルール等	1. 私語は授業の円滑な運営を妨げ、他の学生の迷惑となるので、厳禁とする。 2. 授業の到達目標を確実に達成するため、課題に真剣に取り組み、授業の事前・事後学修を欠かさず行うこと。 3. 授業の進め方や成績評価、詳しい受講ルールについては、初回の授業で説明される。		
連絡先(質問等)	質問は、授業終了後に教室で受け付ける。		

授業科目名	臨地実務実習Ⅲ		
配当年次	2年次	配当学期	第4クォーター
クラス数	4クラス	単位数	8単位
必修・選択等の別	必修	授業の方法	実習【臨】
クラスの担当教員	大熊 伸二 / 石床 渉 / 島田 裕之 / 阿部 有香 / 川田 里絵 (実務経験を有する教員)		
科目区分	職業専門科目群(実務) 臨地実務実習科目群		
授業概要	この実習では、観光支援ビジネスで高い実績をあげ地域の観光振興にも寄与する施設を実習先として、観光支援ビジネスの現場とオフィスにおいて、基礎的実務にくわえ、高度な応用的実務も実践的に学修する。具体的には、「臨地実務実習Ⅱ」で学修した基礎的実務とともに、各事業体における応用的実務、つまり「考えて実践する実務・計画して実践する実務」と、業務や地域観光振興・地域連携にかかわるマーケティングやマネジメントなどの応用的知識を修得する。実習先となる観光支援ビジネスの事業体により、①航空、②鉄道、③宿泊、④観光地域創生という4分野のクラスに分けられる。この4クラスの中から学生は自身で施設を選択して実習を行い、思考力、実践力、協働力を実践的に身につける。本実習は、学生各自が実社会の現場における実際の活動に身を置いて学ぶので、普段よりいっそうの真摯な学修態度が求められる。		
関連する ディプロマポリシー	DP4 観光実務の知識と技能の修得		
キーワード	観光支援ビジネス、航空業、鉄道業、宿泊業、観光地域創生事業、発展専門実務、ホスピタリティマネジメント、リスクマネジメント		
到達目標	【到達目標1】観光支援ビジネス(航空、鉄道、宿泊、観光地域創生)の専門知識を身につけ、専門知識・技能を活用する職務を単独で遂行できる。 【到達目標2】観光支援ビジネス(航空、鉄道、宿泊、観光地域創生)の大前提となる”安全”の重要性を体得し、「安全」の意味をマネジメントの観点から理解し、リスクマネジメントにもとづく動作を遂行できる。 【到達目標3】観光支援ビジネス全般に通用するレベルのホスピタリティをマネジメントの観点から理解したうえで、適正なホスピタリティ・マネジメントを実践できる。 【到達目標4】観光支援ビジネス(航空、鉄道、宿泊、観光地域創生)が取り組む観光振興策や地域連携などの業務について、マネジメントの観点から理解し、その業務を遂行することができる。 【到達目標5】ハンディキャップを持つ顧客への対応、多国籍/多宗教のインバウンド観光客への対応等をマネジメントの観点から理解し、関連業務を実践できる。 【到達目標6】観光支援ビジネス(航空、鉄道、宿泊、観光地域創生)の新規需要/マーケット開発、互いの知見や強みを活かした異業種との協業による新規分野への進出、IT等を活用したイノベーション等について、自己のアイデアを発表することができる。		
授業計画	実習期間：下記①～③を通して6週間とする。 ①実習施設に関する基礎的理解(期間：2～7日間) ・観光支援ビジネス(航空、鉄道、宿泊、観光地域創生)の臨地実務実習に向けて、事前学修で修得した知識・技能などを再確認しながら、本実務実習の意義や心得、観光支援ビジネスの地域社会における役割・位置づけ、観光振興を通じた地域発展への貢献等の理解を深化させるとともに、事前学修を踏まえ特に安全にかかわる基本姿勢と注意事項を中心に、施設設備の概要、各組織、顧客の特性、顧客サービスに関する考え方等について、実務を担当する実習施設の担当者、および施設のトップマネジメント層から説明を受ける。 ・安全、安心にかかわる事前学修として、非常時の緊急連絡、顧客の避難誘導、緊急看護、自己の身を守る技術等にかかわる実地訓練実習を、事前学修した理論を踏まえながらリスクマネジメントの実践面を学修する。また、日本語を解さない顧客、高齢者、ハンディキャップを持つ顧客等への対応実習で学修する。 ②実務実習 ・実習先施設における観光支援ビジネス機能の位置づけ、重要性を学修した上で、各部署別の主要業務におけるマネジメント関係の発展実務について、事前学修した知識や技能を踏まえながら、実習先施設における実習プログラムによって、順次実務実習を実施する。実際に顧客への対面サービス実施を通じて、ホスピタリティ・マネジメントの実践能力を修得する。 ③実務実習の振り返りとまとめ(期間：1日間(最終日)) ・経験した各実務の意義、課題、反省点などについて報告会を行う。また、観光支援ビジネス事業にかかわる新規事業/新たなマーケット開発、並びにIT等を活用したイノベーション等について、ブレインストーミング/意見交換会を実施する。この報告会/意見交換会には、実習施設実務担当者を配置して、適宜助言や指導を実施する。また、受入れ事業体の現場トップからの訓話を受け、トップマネジメントとしての経営哲学、経営理念、経営方針等を学ぶ。		
成績評価	評価の種類	評価割合(%)	評価基準
	実習振り返りレポート	80	【到達目標1～6】の達成度を確認するため、実習終了後に振り返りレポートの提出を求める。
	臨地実務実習施設指導者評価書	20	【到達目標1～6】の達成度を総合的に評価する。
テキスト	使用しない。		
参考書	実習施設に応じて適宜紹介する。		
授業時間外学修 (事前・事後学修等)	1. 事前に、配布される実習要項(学生用)をしっかり読むこと。 2. 実習期間中は、別に定める様式により活動日誌を作成し、実習指導者等の確認を経て担当教員に報告すること。		
課題に対する フィードバックの方法	1. 実習振り返りレポートについては、担当教員が確認したのち、担当教員のコメントを付して返却される。 2. 実習期間中は、担当教員が臨地実務実習施設を巡回し、学生との面談および指導を行う。		
受講ルール等	1. 実習要項(学生用)を熟読し、しっかりと理解した上で実習に臨むこと。 2. 事前に、実習施設と取り交わす誓約書を提出すること。 3. 事前に、学生教育研究災害傷害保険および学研災付帯賠償責任保険に加入すること。 4. 実習期間中にかかる交通費等の費用は、原則として学生が負担する。		
連絡先(質問等)	実習期間中の連絡・質問のための連絡先、連絡方法等については、臨地実務実習事前学修科目「観光実務応用論」において説明する。実習要項(学生用)も確認のこと。		

授業科目名	経営学		
配当年次	2年次	配当学期	第1クォーター
クラス数	1クラス	単位数	2単位
必修・選択等の別	必修	授業の方法	講義
担当教員	岡本 丈彦		
科目区分	展開科目群		
授業概要	現代社会において欠かすことのできない「企業」とは、どのような存在か？そして、この「企業」を対象とする社会科学である経営学は、どこでどのようにして生まれ、そして発展してきたのか？この授業では、経営学の基礎を講義するとともに、企業の目標、存在意義を検討するとともに、誰が「企業」を経営し、それを監視・監督するのかという企業統治の問題と、「企業」は誰に対して社会的責任を負っているのかを明らかにする。		
関連するディプロマポリシー	DP6 他分野の応用的な能力の修得		
キーワード	現代企業、経営学の歴史、企業の目標、生産性向上、人的資源管理、企業の社会的責任、企業倫理、持続可能な社会		
到達目標	【到達目標1】 経営学について学んだ知識を活用して、現代社会に「企業」の行動原理を説明できる。 【到達目標2】 「企業」における最上位の目標が何であるのかを、説明することができる。 【到達目標3】 企業の社会的責任及び企業倫理について、自分なりの考えを持ちそれを説明できる。		
授業計画	第1回：イントロダクション(講義の概要・進め方、成績評価の説明) 第2回：経営学はどのような学問か ―経営学を学ぶことにどのような意味があるのか― 第3回：経営学の方法と歴史① ―アメリカにおける経営学の誕生と展開― 第4回：経営学の方法と歴史② ―ドイツにおける経営学の誕生と展開― 第5回：経営学の方法と歴史③ ―日本における経営学の誕生と展開― 第6回：企業行動と企業目標 ―企業は何のために活動するのか― 第7回：企業と生産性向上 ―生産性を低下させる要因と生産性向上の施策― 第8回：企業と人的資源管理① ―日本の経営の変化と「定年制」の是非― 第9回：企業と人的資源管理② ―AIによる労働の変化― 第10回：企業の社会的責任と倫理的行動① ―複数の倫理のズレを中心として― 第11回：企業の社会的責任と倫理的行動② ―企業不祥事・組織不祥事と炎上― 第12回：企業の社会的責任と倫理的行動③ ―ズーハネクにおける「重要な不一致」の予防と治療― 第13回：企業と持続可能な社会① ―持続不可能の社会とズーハネクにおける「規範主義的な短絡思考」― 第14回：企業と持続可能な社会② ―持続可能な社会を導くための企業の責任― 第15回：講義内容の総括		
成績評価	評価の種類	評価割合(%)	評価基準
	論述試験	59	【到達目標1～3】の達成度を確認するため、論述試験を行う。授業で説明された経営学の考え方や知識の理解度について評価する。詳しい評価基準は、授業で説明する。
	小レポート	41	【到達目標1・2】の達成度を確認するため、毎回の授業で小レポートの提出を求める。課題に対して適切な内容・記述であるかを評価する。詳しい評価基準は、授業で説明する。
テキスト	指定しない。		
参考書	深山明・海道ノブチカ 編著 『基本経営学』改訂版 同文館出版(2015年) 3,500円＋税		
授業時間外学修(事前・事後学修等)	1. 事前学修として、授業で指示された課題について、指定の要領で小レポートを作成し、次回までに提出すること(90分)。 2. 事後学修として、授業で指示された課題に従って講義ノートを整理事務すること(90分)。		
課題に対するフィードバックの方法	1. 論述試験については、試験前に採点基準が提示され、試験後に模範解答が公表される。 2. 小レポートについては、提出後の次回授業においてフィードバックされる。		
受講ルール等	1. 私語は授業の円滑な運営を妨げ、他の学生の迷惑となるので、厳禁とする。 2. 授業の到達目標を確実に達成するため、課題に真剣に取り組む、授業の事前・事後学修を欠かさず行うこと。 3. 授業の進め方や成績評価、詳しい受講ルールについては、初回の授業で説明される。		
連絡先(質問等)	質問は、授業終了後に教室で受け付ける。また、初回の講義に講義担当者の大学のアドレスを掲載した資料を配布する。		

授業科目名	せとうち観光アート論		
配当年次	3年次	配当学期	第1クォーター
クラス数	1クラス	単位数	2単位
必修・選択等の別	選択必修	授業の方法	講義
担当教員	笠原 良二 (実務経験を有する教員)		
科目区分	職業専門科目群(学術) せとうち観光研究科目群		
授業概要	本授業においては、近年瀬戸内海を代表する著名な観光地となった「直島」の開発及びその活動の経緯について、複数の視点からアプローチすることで、観光のもつ本来的な意義や可能性及び課題について学ぶ。具体的な視点としては、直島を軸とした地域の現状分析、行政のリーダーシップによる観光開発、企業の文化活動としての地域開発、地域に根差した現代アート活動、現代アート活動による地域の活性化、地域型芸術祭の現状等を中心とする。講義による学修に加え、事前のテーマ設定の上、直島現地の視察(2回を予定)を行うと共に、視察結果に基づく課題及び提案については、討議や相互フィードバックなどのグループワークを行い、相互発表する機会を設けるものとする。		
関連するディプロマポリシー	DP3 観光の理論と知識の理解		
キーワード	地域資源の発見、地域型芸術祭、サイトスペシフィックワーク、直島メソッド、現代アート		
到達目標	【到達目標1】直島の観光開発の経緯と意義が説明ができ、自らの研究に応用できる。 【到達目標2】現代アートを使った地域資源の掘り起こしの方法論が説明できるとともに、自らの研究に応用できる。 【到達目標3】瀬戸内国際芸術祭を軸に地域型芸術祭の現状と意義が説明できる。		
授業計画	第1回：講義：ベネッセアートサイト直島の活動の意義とその軌跡 第2回：講義：直島町のまちづくり計画と南部観光開発の経緯及び現地実習の観点確認 第3回：現地実習：直島の既存観光施設視察(美術館) 第4回：現地実習：直島の既存観光施設視察(屋外作品) 第5回：現地実習：直島の既存観光施設視察(家プロジェクト1) 第6回：現地実習：直島の既存観光施設視察(家プロジェクト2) 第7回：講義：現地実習の振り返りと今後の授業概観 第8回：講義：直島におけるサイトスペシフィックワークの展開 第9回：講義：直島家プロジェクトの展開：地域資源と現代美術 第10回：講義：瀬戸内国際芸術祭の開催の経緯とその意義及び現地実習の観点確認 第11回：現地実習：直島の地域資源視察(公共建築) 第12回：現地実習：直島の地域資源視察(産業施設1) 第13回：現地実習：直島の観光施設視察(産業施設2) 第14回：講義：現地実習の振り返り直島の観光に対する提案発表 第15回：講義：学修到達度の確認および講義内容の総括		
成績評価	評価の種類	評価割合(%)	評価基準
	論述試験	50	【到達目標1～3】の達成度を確認するため、論述試験を行う。授業で説明された考え方や知識の理解度について評価する。詳しい評価基準は、授業で説明する。
	小レポート	50	【到達目標1～3】の達成度を確認するため、毎回の授業で小レポートの提出を求める。課題に対して適切な内容・記述であるかを評価する。詳しい評価基準は、授業で説明する。
テキスト	なし。適宜授業で教材を配布する。		
参考書	授業で適宜紹介する。		
授業時間外学修(事前・事後学修等)	1. 事前学修として、授業で提示されたテーマに関する資料を次回までに読むこと(90分)。 2. 事後学修として、授業で指示された課題に従って講義ノートを整理すること(90分)。		
課題に対するフィードバックの方法	1. 論述試験については、試験前に採点基準が提示され、試験後に模範解答が公表される。 2. 小レポートについては、提出後の次回授業においてフィードバックされる。		
受講ルール等	1. 私語は授業の円滑な運営を妨げ、他の学生の迷惑となるので、厳禁とする。 2. 授業の到達目標を確実に達成するため、課題に真剣に取り組む、授業の事前・事後学修を欠かさず行うこと。 3. 授業の進め方や成績評価、詳しい受講ルールについては、初回の授業で説明される。 4. フィールドワーク等により学外で実施する際の交通費等は自己負担とする。		
連絡先(質問等)	質問は、授業終了後に教室で受け付ける。		

授業科目名	観光実務マネジメント論		
配当年次	3年次	配当学期	第1クォーター
クラス数	4クラス	単位数	1単位
必修・選択等の別	必修	授業の方法	講義
クラスの担当教員	大熊 伸二 / 石床 渉 / 島田 裕之 / 阿部 有香 / 川田 里絵 (実務経験を有する教員)		
科目区分	職業専門科目群(実務) 臨地実務実習事後学修科目群		
授業概要	本授業では、「臨地実務実習Ⅲ」における実践的学修の成果を、理論的に整理しながら今後の学びに有機的につなげることを目的として、主に実習の各ステップにおける学びの振り返りを行う。振り返りのポイントは4つある。第一に、「臨地実務実習Ⅲ」での各自の実践的学修の成果と課題を確認する。第二に、「臨地実務実習Ⅲ」における観光支援ビジネスの基本実務と発展実務について、各自の理解度を確認する。第三に、観光支援ビジネス全般にかかわる事業特性と経営管理の課題などについて、ケーススタディによって理解を深める。そして第四に、観光支援ビジネスのマネジメントにおいて、観光振興やインバウンド観光の事業がいかに位置づけられているかを理解する。なおこの授業は、講義とともに、グループワークやプレゼンテーションによって行われる。		
関連するディプロマポリシー	DP4 観光実務の知識と技能の修得		
キーワード	観光支援ビジネス、発展実務、マネジメント実務、ホスピタリティマネジメント、観光振興事業、インバウンド観光事業、ケーススタディ、理論と実践		
到達目標	【到達目標1】「臨地実務実習Ⅲ」で学んだ観光支援ビジネス発展実務の概要・特徴・課題などを理論的に分析し説明できる。 【到達目標2】「臨地実務実習Ⅲ」で学んだ観光支援ビジネス発展実務に求められる知識・技能について整理し説明できる。 【到達目標3】観光支援ビジネス業界の課題と今後の展望について、自身の考え方を論理的かつ実証的に説明できる。		
授業計画	第1回：臨地実務実習Ⅲで何を学び、それを今後のキャリアにどのように活かすのか(グループ討議) 第2回：観光支援ビジネス実務マネジメントの事業全体における位置づけと役割(臨地実務実習Ⅲの理論的再確認) 第3回：観光支援ビジネス実務マネジメントの機能 ケーススタディ① 旅行業の観光振興事業の企画・運営 第4回：観光支援ビジネス実務マネジメントの機能 ケーススタディ② 鉄道業の観光振興事業の企画・運営 第5回：観光支援ビジネス実務マネジメントの機能 ケーススタディ③ 宿泊業のホスピタリティマネジメント 第6回：観光支援ビジネス実務マネジメントの機能 ケーススタディ④ 航空業の観光振興・地域創生事業 第7回：観光支援ビジネス実務マネジメントの機能 ケーススタディ⑤ 観光創生事業の地域創生イベントの企画・運営 第8回：観光支援ビジネス実務マネジメントの理論と実践		
成績評価	評価の種類	評価割合(%)	評価基準
	プレゼンテーション	40	【到達目標1・2】の達成度を確認するため、所定項目の調査結果をまとめた口頭発表(パワーポイント使用のこと)を求める。その発表内容・発表形式について評価する。詳しい評価基準と調査項目は授業で説明する。
	最終レポート	60	【到達目標1～3】の達成度を確認するため、所定項目について論じたレポートの提出を求め、その内容で評価する。詳しい評価基準と調査項目は授業で説明する。
テキスト	使用しない。授業で適宜レジュメを配布する。		
参考書	授業で適宜紹介する。		
授業時間外学修(事前・事後学修等)	1. 事前学修として、指示された要領に従い、プレゼンテーション課題などの準備を行うこと(90分)。 2. 事後学修として、「臨地実務実習Ⅲ」の実践について、授業で求められる課題ごとに振り返り分析すること(90分)。		
課題に対するフィードバックの方法	1. プレゼンテーションについては、発表後の授業で講評される。 2. 最終レポートについては、担当教員が確認したのち、担当教員のコメントを付して返却される。		
受講ルール等	1. 私語は授業の円滑な運営を妨げ、他の学生の迷惑となるので、厳禁とする。 2. 授業の到達目標を確実に達成するため、課題に真剣に取り組み、授業の事前・事後学修を欠かさず行うこと。 3. 授業の進め方や成績評価、詳しい受講ルールについては、初回の授業で説明される。		
連絡先(質問等)	質問や連絡などについては、オフィスアワーに研究室で受け付ける。また、e-mailによる質問や連絡も、常時受け付ける。研究室の場所、オフィスアワーの時間帯およびメールアドレスは、初回の授業で提示する。		

授業科目名	観光英語Ⅳ		
配当年次	3年次	配当学期	第1クォーター
クラス数	1クラス	単位数	1単位
必修・選択等の別	選択	授業の方法	演習
担当教員	高橋 紀穂		
科目区分	職業専門科目群(観光英語)		
授業概要	「観光英語Ⅲ」より単語・構文・内容ともにレベルが高い英語の最新ニュースを教材にする。学生は繰り返し聴き、内容のアウトラインを英語で説明し、ニュース内容をディクテーションする。内容を理解できた段階で、その内容についてどう思うかといった、感想・意見等のコメントを各自述べる。このとき他の学生は、発表する学生のコメント内容をよく聴く。これらを繰り返すことで、他人の話を聴きながら自分の意見を考え、述べることができるように訓練する。ニュース内で用いられた単語のテストも実施する。なお本授業の履修には、「観光英語Ⅲ」を履修済みであることが望ましい。		
関連するディプロマポリシー	DP5 観光英語力の修得		
キーワード	集中力、シャドーイング、スピーチ、スキット等		
到達目標	【到達目標1】時事英語ニュースを繰り返し聴くことにより、内容を素早く理解する「集中力」を向上させることができる。 【到達目標2】時事英語ニュースの内容把握後、各自の意見・感想を述べることにより反響的に答える「即応力」を養うことができる。 【到達目標3】英語検定2級～準1級/TOEIC 500点～800点相当の実力をつけることができる。		
授業計画	第1回：文化分野 第2回：事件分野 第3回：政治分野 第4回：外交分野 第5回：貿易分野 第6回：防衛分野 第7回：文化分野 第8回：事故分野 第9回：政治分野 第10回：外交分野 第11回：防衛分野 第12回：文化分野 第13回：政治分野 第14回：外交分野 第15回：文化分野		
成績評価	評価の種類	評価割合(%)	評価基準
	リスニングテスト	40	観光英語Ⅲより高度な時事英語ニュースのリスニング力達成度を確認するためにリスニングテストを実施し、授業中に訓練した「聴く能力」を評価する。
	筆記試験	30	観光英語Ⅲより高度な時事英語ニュースに求められる文法・語彙・読解力について評価する。
	単語テスト	30	授業中に実施する単語テスト(30点満点)の平均点で評価する。
テキスト	授業で適宜教材を配布する。		
参考書	英字新聞(Asahi Evening News/Daily Yomiuri/Japan Times etc.)		
授業時間外学修(事前・事後学修等)	1. 事前学修として、前回までの英語ニュースを聴いて内容把握・シャドーイング等の訓練をすること(90分)。 2. 事前学修として、授業で使用した英語ニュースの内容把握・英作文・単語を書く練習をすること(90分)。		
課題に対するフィードバックの方法	1. リスニングについては、試験後に模範解答が公表され必要な場合には解説される。 2. 筆記試験についても、試験後に模範解答が公表され必要な場合には解説される。		
受講ルール等	1. 私語は授業の円滑な運営を妨げ、他の学生の迷惑となるので、厳禁とする。 2. 授業の到達目標を確実に達成するため、課題に真剣に取り組み、授業の事前・事後学修を欠かさず行うこと。 3. 授業の進め方や成績評価、詳しい受講ルールについては、初回の授業で説明される。		
連絡先(質問等)	質問は、授業終了後に教室で受け付ける。		

授業科目名	観光政策論		
配当年次	3年次	配当学期	第2クォーター(集中)
クラス数	1クラス	単位数	2単位
必修・選択等の別	必修	授業の方法	講義
担当教員	藤野 公孝		
科目区分	職業専門科目群(学術) 観光基礎理論科目群		
授業概要	この授業では、観光政策において、観光行政が実施に至る政策的プロセスや事業実施の財政的な支援スキーム等について学ぶ。本講義は、観光行政が取り組む「4つの施策」を主題とする。その「4つの施策」とは、①外貨獲得や自国に対する理解の増進等といった国益の実現をめざす「インバウンド観光の振興」、②社会政策的視点から余暇生活の充実による国民福祉の向上をめざす「国内観光旅行やアウトバウンド観光の振興」、③一国経済政策の視点から国内産業の活性化や雇用の増大等をめざす「観光関連産業の振興」、そして④地方経済政策の視点から地域経済の活性化や地域の経済格差是正等をめざす「地域観光関連産業の振興」である。この4つの主題が、①政策の現実と変遷、②観光行政の手法、そして③「観光政策事例研究」という3つの切り口から解説される。		
関連するディプロマポリシー	DP3 観光の理論と知識の理解		
キーワード	観光政策と観光事業、観光行政、地方経済政策、インバウンド観光振興、アウトバウンド観光振興、観光関連産業、総合リゾート(総合保養地域整備)法、ラングドックルシオン、由布院、統合型リゾート(IR)法		
到達目標	【到達目標1】観光政策において観光行政が取り組む「4つの施策」を理解し、その特徴と現実を説明できる。 【到達目標2】我が国の観光政策を考察するための「政策の現実と変遷」「観光行政の手法」「観光政策事例研究」という3つの視座を身につけ、それぞれの内容を説明できる。 【到達目標3】観光事業の成り立ち、その成功や失敗等について、具体的な見識や意見を述べることができる。		
授業計画	第1回: オリエンテーション: 講義概要と講義日程 第2回: 観光政策の現実と変遷① 戦前・戦後の観光政策 第3回: 観光政策の現実と変遷② 観光立国への政策転換 第4回: 観光政策の現実と変遷③ 観光立国推進基本法の制定等 第5回: 観光政策の現実と変遷④ 観光立国実現に向けた政策スキーム 第6回: 観光行政の手法① 観光産業の育成・規制関連法制の整備 第7回: 観光行政の手法② インバウンド・アウトバウンド双方向の観光政策 第8回: 観光行政の手法③ 外客接遇対策の飛躍的向上を目指して 第9回: 観光行政の手法④ 「観光圏」整備の支援スキーム 第10回: 観光行政の手法⑤ 「広域観光周遊ルート」整備の支援スキーム 第11回: 観光政策事例研究① 黒字減らし・内需拡大と総合リゾート法の施行 第12回: 観光政策事例研究② 仏ラングドック・ルシオン観光開発に学ぶ 第13回: 観光政策事例研究③ 九州由布院「温泉リゾートまちづくり」に学ぶ 第14回: 観光政策事例研究④ 統合型リゾート(IR)法の実施について 第15回: 学修到達度の確認および講義内容の総括		
成績評価	評価の種類	評価割合(%)	評価基準
	論述試験	60	【到達目標1～3】の達成度を確認するため、論述試験を行う。授業で説明された観光政策論の考え方や知識の理解度について評価する。詳しい評価基準は、授業で説明する。
	小レポート	40	【到達目標1・2】の達成度を確認するため、毎回の授業で小レポートの提出を求める。課題に対して適切な内容・記述であるかを評価する。詳しい評価基準は、授業で説明する。
テキスト	使用しない。適宜レジュメを配布する。		
参考書	授業で適宜紹介する。		
授業時間外学修(事前・事後学修等)	1. 事前学修として、授業で指示された課題について、指定の要領で小レポートを作成し、次回までに提出すること(90分)。 2. 事後学修として、授業で指示された課題に従って講義ノートを整理事務すること(90分)。		
課題に対するフィードバックの方法	1. 論述試験については、試験前に採点基準が提示され、試験後に模範解答が公表される。 2. 小レポートについては、提出後の次回授業においてフィードバックされる。		
受講ルール等	1. 私語は授業の円滑な運営を妨げ、他の学生の迷惑となるので、厳禁とする。 2. 授業の到達目標を確実に達成するため、課題に真剣に取り組み、授業の事前・事後学修を欠かさず行うこと。 3. 授業の進め方や成績評価、詳しい受講ルールについては、初回の授業で説明される。		
連絡先(質問等)	質問は、授業終了後に教室で受け付ける。		

授業科目名	せとうち観光資源論		
配当年次	3年次	配当学期	第2クォーター
クラス数	1クラス	単位数	2単位
必修・選択等の別	選択必修	授業の方法	講義
担当教員	三谷 雄治 (実務経験を有する教員)		
科目区分	職業専門科目群(学術) せとうち観光研究科目群		
授業概要	観光の対象となる観光資源の分類には、海、島、山岳などの「自然観光資源」と、社寺、城郭、公園などの「人文観光資源」、郷土景観、歴史景観などの「複合型観光資源」といった3つがある。本講義では、瀬戸内地域におけるそれぞれの観光資源について知識を深めるとともに、日本国内だけでなく、インバウンド観光客を受け入れられる地域とするためには、これらの観光資源をどのように磨き上げ、その魅力等をどのような形で発信していくかを考察する。基本的に学生の事前学修に基づき、アクティブ・ラーニング形式で授業を行う。また現地でのフィールドワークを2時間分、適当な土曜ないし日曜日に行い、その後グループワークを行う。		
関連するディプロマポリシー	DP3 観光の理論と知識の理解		
キーワード	自然観光資源、人文観光資源、複合型観光資源、各県の観光資源、観光資源の磨き上げ、観光ニーズ、瀬戸内海		
到達目標	【到達目標1】 地域が有する観光資源を説明できる。 【到達目標2】 地域資源の活用方法を説明できる。 【到達目標3】 現地調査に基づいて具体的に観光資源の活用方法、商品化について考えを示すことができる。		
授業計画	第1回: ガイダンス(講義概要、授業計画、成績評価基準の解説)、観光資源とは 第2回: 東洋のエーゲ海の瀬戸内海 第3回: さぬきうどんの香川 第4回: 道後温泉の愛媛 第5回: はりまや橋の高知 第6回: 阿波踊りの徳島 第7回: 桃太郎の岡山 第8回: 原爆ドームの広島 第9回: 異人館の兵庫 第10回: 産業観光とグリーンツーリズム 第11回: 観光資源磨き上げ・商品化 第12回: フィールドワーク① 現地視察(東かがわ市) 第13回: フィールドワーク② 現地での関係者聞き取り(東かがわ市) 第14回: 観光資源磨き上げワークショップ① フィールドワークに基づく観光資源の磨き上げを検討 第15回: 観光資源磨き上げワークショップ② フィールドワークに基づく観光資源の商品化を検討		
成績評価	評価の種類	評価割合(%)	評価基準
	中間レポート	30	【到達目標1・2】 の達成度を確認するために、課題に対する問題意識、考え方について評価する。詳しい評価基準は授業で説明する。
	最終レポート	40	【到達目標3】 の達成度を確認するために、課題に対する考え方について評価する。詳しい評価基準は授業で説明する。
	毎回のリアクションシート	30	【到達目標1～3】 の達成度を確認するために、毎回の授業についての理解度について評価する。詳しい評価基準は授業で説明する。
テキスト	使用しない。		
参考書	授業の際に指定。		
授業時間外学修(事前・事後学修等)	1. 事前学修として、授業で指示された課題について、調査して授業に臨むこと(90分)。 2. 事後学修として、授業で指示された課題に従って講義ノートを整理事務すること(90分)。		
課題に対するフィードバックの方法	1. 中間レポート、リアクションシートについては、提出後の次回授業においてフィードバックされる。 2. 最終レポートについては、提出後、学校を通じてフィードバックされる。		
受講ルール等	1. 私語は授業の円滑な運営を妨げ、他の学生の迷惑となるので、厳禁とする。 2. 授業の到達目標を確実に達成するため、課題に真剣に取り組む、授業の事前・事後学修を欠かさず行うこと。 3. 授業の進め方や成績評価、詳しい受講ルールについては、初回の授業で説明される。 4. フィールドワーク等により学外で実施する際の交通費等は自己負担とする。		
連絡先(質問等)	質問は、授業終了後に教室で受け付ける。		

授業科目名	交通産業論		
配当年次	3年次	配当学期	第2クォーター
クラス数	1クラス	単位数	2単位
必修・選択等の別	選択必修	授業の方法	講義
担当教員	大熊 伸二		
科目区分	職業専門科目群(実務) 観光事業論科目群		
授業概要	この授業では、人員の移動や運送にかかわる全ての産業、すなわち陸運・水運・空運全般とその関連分野を対象として、それぞれの発祥期から現代に到るまでの発展の歴史や、社会的・経済的な役割、現在の課題や今後の展開、さらには現在特に社会的な注目度が高い個別の関連テーマなどについて学ぶ。また、これらの学修結果を踏まえた上で、後半では特に「公共の利益の視点」「観光業振興の視点」等、多角的な視点から交通産業について考察を深める。		
関連するディプロマポリシー	DP4 観光実務の知識と技能の修得		
キーワード	公共交通、地域社会、まちづくり、観光		
到達目標	【到達目標1】 交通産業の社会的意義、課題を理解し、自らの言葉で説明できる。 【到達目標2】 交通産業を主体的に考察し、地域・まちづくりの視点からアプローチできる。 【到達目標3】 授業で身につけた考え方や知識を、いろいろな研究課題に応用できる。		
授業計画	第1回：序論（講義の狙い、進め方、評価の仕方など） 第2回：経済発展と交通 第3回：交通事業－わが国の交通事業の現状と課題－ 第4回：交通インフラと整備（1）都市間鉄道（新幹線） 第5回：交通インフラと整備（2）地方鉄道 第6回：交通インフラと整備（3）地域交通（モビリティ） 第7回：交通インフラと整備（4）／振り返り（中間試験） 第8回：行政と交通政策 第9回：民間事業と交通政策 第10回：交通まちづくり（1）（車優先のまちづくり・中心街の疲弊・スプロール現象） 第11回：交通まちづくり（2）（公共交通の整備、コンパクトシティ） 第12回：交通まちづくり（3）（観光発展と交通） 第13回：これからの地域交通と観光 第14回：縮小社会において持続できる交通のあり方 第15回：学修到達度の確認および講義内容の総括		
成績評価	評価の種類	評価割合(%)	評価基準
	期末試験	60	【到達目標1～3】の達成度を確認するため、期末試験を行う。授業で説明された交通産業論の考え方や知識の理解度について評価する。詳しい評価基準は、授業で説明する。
	中間試験	30	【到達目標1・2】の達成度を確認するため、中間試験を行う。詳しい評価基準は、授業で説明する。
	小レポート	10	【到達目標1・2】の達成度を確認するため、小レポートの提出を求める。詳しい評価基準は、授業で説明する。
テキスト	必要に応じて授業で指示する。		
参考書	授業で適宜紹介する。		
授業時間外学修（事前・事後学修等）	1. 事前学修として、指示された課題について、指定の要領で小レポートを作成し、提出すること(90分)。 2. 事後学修として、授業の講義ノートを整理し、指示されたキーワードの説明をできるようにしておくこと(90分)。		
課題に対するフィードバックの方法	1. 論述試験については、試験前に採点基準が提示し、試験後に模範解答が公表される。 2. 小レポートについては、授業の冒頭でフィードバックされる。		
受講ルール等	1. 私語は授業の円滑な運営を妨げ、他の学生の迷惑となるので、厳禁とする。 2. 授業の到達目標を確実に達成するため、課題に真剣に取り組み、授業の事前・事後学修を欠かさず行うこと。 3. 授業の進め方や成績評価、詳しい受講ルールについては、初回の授業で説明される。		
連絡先(質問等)	質問は、授業終了後に教室で受け付ける。		

授業科目名	宿泊産業論		
配当年次	3年次	配当学期	第2クォーター
クラス数	1クラス	単位数	2単位
必修・選択等の別	選択必修	授業の方法	講義
担当教員	島田 裕之 (実務経験を有する教員)		
科目区分	職業専門科目群(実務) 観光事業論科目群		
授業概要	この授業の目的は、宿泊産業の古来から現代に至る歴史的な役割をたどり、地域産業としての宿泊業の重要性を認識することである。そこで、宿泊産業が歴史的に発展してきた経緯を概観したうえで、日本の外資系ホテルと国内系ホテルにおける宿泊パッケージプラン、料金宿泊形態、収益部門などの特徴から、両系のホテルの経営方法、顧客フォロー、経営の現状などについて比較検討しながら、宿泊産業全体の動向をとらえる。また、近年の宿泊産業が、各事業所の所在地域の観光振興や地域連携を模索し実践する状況を探り、そうした状況を踏まえて、今後の宿泊産業の長期的な課題や展望について考える。		
関連するディプロマポリシー	DP4 観光実務の知識と技能の修得		
キーワード	宿泊産業の歴史、社会的・経済的意義、外資系ホテル、国内系ホテル、ブランドイメージ、おもてなし、マーケティング、販売促進事業、ゲストハウス、持続可能性、職業倫理		
到達目標	【到達目標1】 宿泊産業の地域産業としての重要性を説明できる。 【到達目標2】 さまざまな形態のホテルの現状と課題について説明できる。 【到達目標3】 宿泊産業の課題解決策と将来展望について自分なりの考え方を説明できる。 【到達目標4】 宿泊産業の最新事情について説明できる。		
授業計画	第1回：宿泊産業の現状と展望 第2回：宿泊産業の歴史と社会的・経済的意義 第3回：宿泊産業におけるホスピタリティの基本 第4回：ホテル・旅館の組織とチームワーク 第5回：外資系ホテルの経営方法とサービス形態① ブランドイメージと送客方法 第6回：外資系ホテルの経営方法とサービス形態② ホテルの料金形態と収入部門 第7回：国内系ホテルの経営方法とサービス形態① 外資系ホテルとの経営方法とサービス形態の比較 第8回：国内系ホテルの経営方法とサービス形態② ホテルの料金形態とおもてなしの基本 第9回：外資系ホテルと国内系ホテルの経営方法とサービス形態の比較 第10回：宿泊マーケティングの基礎 第11回：宿泊マーケティングと販売促進事業 第12回：インバウンドマーケティングと宿泊産業 第13回：さまざまな宿泊施設の在り方 ― ゲストハウスとホテル 第14回：宿泊産業の課題解決策と将来展望 ― 持続可能な地域と観光をめざして 第15回：授業内容の確認と総括		
成績評価	評価の種類	評価割合(%)	評価基準
	論述試験	70	【到達目標1～4】の達成度を確認するため、論述試験を行う。授業で説明された宿泊産業の現状と展望についての考え方や社会的・経済的意義などの理解度について評価する。詳しい評価基準は、授業で説明する。
	小レポート	30	【到達目標1～4】の達成度を確認するため、毎回の授業で小レポートの提出を求める。詳しい評価基準は、授業で説明する。
テキスト	必要に応じて授業で指示する。		
参考書	富田昭次 著 『「おもてなし」の日本文化誌 ホテル・旅館の歴史に学ぶ』青弓社(2017年) 2,000円+税		
授業時間外学修(事前・事後学修等)	1. 事前学修として、指示された課題について情報を収集し、その内容をノートにまとめておくこと(90分)。 2. 事後学修として、授業で与えられた課題について、小レポートを作成すること(90分)。		
課題に対するフィードバックの方法	1. 論述試験については、試験前に採点基準が提示され、試験後に模範解答が公表される。 2. 小レポートについては、各授業の冒頭でフィードバックされる。		
受講ルール等	1. 私語は授業の円滑な運営を妨げ、他の学生の迷惑となるので、厳禁とする。 2. 授業の到達目標を確実に達成するため、課題に真剣に取り組み、授業の事前・事後学修を欠かさず行うこと。 3. 授業の進め方や成績評価、詳しい受講ルールについては、初回の授業で説明される。		
連絡先(質問等)	質問や連絡などについては、オフィスアワーに研究室で受け付ける。また、e-mailによる質問や連絡も、常時受け付ける。研究室の場所、オフィスアワーの時間帯およびメールアドレスは、初回の授業で提示する。		

授業科目名	地域創生事業論		
配当年次	3年次	配当学期	第2クォーター
クラス数	1クラス	単位数	2単位
必修・選択等の別	選択必修	授業の方法	講義
担当教員	古川 康造 (実務経験を有する教員)		
科目区分	職業専門科目群(実務) 観光事業論科目群		
授業概要	この授業では、地域創生事業の理論と実践について、特に中心商店街活性化による地域創生を事例として学ぶ。授業では、まず地域創生の実践において多くの地域が抱える一般的な諸課題を理解するとともに、地域経済の実態や地域行政組織の仕組みや役割について考察する。なお、地域行政組織の仕組みや役割については、学生が、授業全般に渡る主担当教員の実践的理論に加え、その基盤となる高度な学術的理論を学修することができるよう、学術系の兼任教員を補充して行う。そのうえで、次にそれらの課題を解決するための、地域創生の理論と方法を考察して、さらにそうした取り組みが地域にもたらす影響についての知識も修得する。具体的には、成功事例と評価される、実在する商店街の地域創生事業を題材として、その事業コンセプト、事業プロセス、事業の特長、などを理解したうえで、地域創生事業の結果として地域経済がいかに活性化し、また持続可能な観光振興が地域創生事業にいかに関与するかについての仕組みを学修する。		
関連するディプロマポリシー	DP4 観光実務の知識と技能の修得		
キーワード	地域創生、観光振興、商店街、街づくり、集客戦略、合意形成、組織運営、持続可能な地域社会、地域経済、地域行政、行政組織		
到達目標	【到達目標1】 授業で学修した地域再生や地域活性化の取り組みについて説明できる。 【到達目標2】 地域再生や地域活性化の取り組みについて、自らの意見を説明できる。 【到達目標3】 地域再生の考え方を理解し、その成功・失敗事例を学び、実践に応用できる。		
授業計画	第1回：オリエンテーション 地域経済・地域創生とは何か 第2回：基礎知識の修得 地域創生と持続可能な観光振興 第3回：まち巡り(玉藻公園) 第4回：地方自治と行政組織 組織の成り立ち及び政策決定の仕組みと過程 第5回：まち巡り(丸亀町北部) 第6回：地域経済事情① 第7回：まち巡り(丸亀町南部) 第8回：地域経済事情② 第9回：まち巡り(南新町・田町・トキワ街) 第10回：丸亀町商店街再生計画① 第11回：まち巡り(ライオン通り・片原町) 第12回：丸亀町商店街再生計画② 第13回：丸亀町商店街再生計画③ 第14回：なぜ丸亀町商店街が国内外からこれほどの注目を浴びたのか 第15回：学修到達度の確認および講義内容の総括		
成績評価	評価の種類	評価割合(%)	評価基準
	論述試験	70	【到達目標1～3】 の達成度を確認するため、論述試験を行う。授業で説明された考え方や知識の理解度について評価する。詳しい評価基準は、授業で説明する。
	小テスト	30	【到達目標1・2】 の達成度を確認するため毎回の授業で小テストを実施する。詳しい評価基準は、授業で説明する。
テキスト	使用しない		
参考書	石原武政 著 『商業・まちづくり口辞苑』硯学舎(2012年) 1,800円+税		
授業時間外学修(事前・事後学修等)	1. 事前学修として、指示された課題について情報を収集し、その内容をノートにまとめておくこと(90分)。 2. 事後学修として、授業の講義ノートを整理し、指示されたキーワードの説明をできるようにしておくこと(90分)。なお、次回の授業で毎回、その理解度を確認するための小テストが実施される。		
課題に対するフィードバックの方法	1. 論述試験については、試験前に採点基準が提示され、試験後に模範解答が公表される。 2. 小テストについては、授業で解答の要点が解説され、採点後に答案用紙が返却される。		
受講ルール等	1. 私語は授業の円滑な運営を妨げ、他の学生の迷惑となるので、厳禁とする。 2. 授業の到達目標を確実に達成するため、課題に真剣に取り組み、授業の事前・事後学修を欠かさず行うこと。 3. 授業の進め方や成績評価、詳しい受講ルールについては、初回の授業で説明される。		
連絡先(質問等)	質問は、授業終了後に教室で受け付ける。		

授業科目名	四国巡礼研究		
配当年次	3年次	配当学期	第3クォーター
クラス数	1クラス	単位数	2単位
必修・選択等の別	選択必修	授業の方法	講義
担当教員	大賀 陸夫		
科目区分	職業専門科目群(学術) せとうち観光研究科目群		
授業概要	四国遍路には、長い歴史、幾多の変遷があるが、現代においては、1990年頃から、原点回帰の「歩き遍路」が復活し耳目を集めている。外国人お遍路さんの急増は史上初の現象といえる。現代において、わが国のみならず、世界中が四国遍路の魅力を発見・再発見するようになったのはなぜか。本講義では、これを中心テーマに据える。四国遍路の現代的意義を考察するには、多数出版されている遍路体験記が役立つ。多くの時間とお金を費やして遍路道を歩く理由は何か。遍路体験記から明らかになるのは、ものの豊かさより、スピリチュアルな価値を求める現代人の姿である。やや誇張した言い方になるが、四国遍路は、スピリチュアル・ツーリズムといえよう。講義では、四国遍路のそのような側面に焦点を当てるが、予備知識として四国遍路の歴史や遍路の思想的背景についても学ぶ。また、体験的理解も有効なので、可能な限り遍路体験を授業の中に取り入れたい。		
関連するディプロマポリシー	DP3 観光の理論と知識の理解		
キーワード	空海、熊野信仰、歩き遍路、スピリチュアリティ、人格形成		
到達目標	【到達目標1】四国遍路の歴史を語ることができる。 【到達目標2】四国遍路の現代的意義を説明することができる。 【到達目標3】般若心経を現代語に訳すことができる。		
授業計画	第1回：今日の四国遍路概説 第2回：四国遍路の起源 第3回：熊野信仰と四国遍路 第4回：空海と四国遍路 第5回：江戸初期における四国遍路の確立 第6回：写し霊場の発展(小豆島八十八箇所巡礼) 第7回：四国遍路の光と影 第8回：スピリチュアル・ツーリズムとしての遍路 第9回：遍路体験記の分析 第10回：四国遍路による人格形成 第11回：遍路体験記の名著 第12回：四国遍路バーチャル体験①般若心経 第13回：四国遍路バーチャル体験②十善戒、霊場の本尊 第14回：四国遍路vs.サンチャゴ巡礼 第15回：まとめ		
成績評価	評価の種類	評価割合(%)	評価基準
	論述試験	70	到達目標1、2の達成度を確認するため論述試験を行う。授業で説明した内容の理解度、洞察力を評価する。
	レポート	30	到達目標2に関連する課題として、授業で紹介する遍路体験記を2冊以上読みレポートを作成する。遍路の現代的意義の理解度を評価する。
テキスト	使用しない。		
参考書	頼富本広 著 『四国遍路とはなにか』角川書店(2009年)		
授業時間外学修(事前・事後学修等)	1. 事前学修として、授業で指示された課題について、指定の要領で予習すること(90分)。 2. 事後学修として、授業で指示された課題に従って講義ノートを整理すること(90分)。		
課題に対するフィードバックの方法	1. 論述試験については、試験前に採点基準が提示され、試験後に模範解答が公表される。 2. レポートについては、教員のコメントをつけて返却する。		
受講ルール等	1. 私語は授業の円滑な運営を妨げ、他の学生の迷惑となるので、厳禁とする。 2. 授業の到達目標を確実に達成するため、課題に真剣に取り組み、授業の事前・事後学修を欠かさず行うこと。 3. 授業の進め方や成績評価、詳しい受講ルールについては、初回の授業で説明される。		
連絡先(質問等)	質問は、授業終了後に教室で受け付ける。		

授業科目名	四国観光史		
配当年次	3年次	配当学期	第4クォーター
クラス数	1クラス	単位数	2単位
必修・選択等の別	選択必修	授業の方法	講義
担当教員	三谷 雄治 (実務経験を有する教員)		
科目区分	職業専門科目群(学術) せとうち観光研究科目群		
授業概要	本講義では、これまで四国地域が観光においてどのように発展してきたか、近代から現代までの四国の観光の歴史を学修する。また、これまでの四国の観光の歴史を理解した上で、これから四国の観光がどのような方向に向かおうとしているのか、また現在どのようなことが必要とされている、そうしたニーズにこれからどのように対応していくのかについて、四国の各地域の自然、社会、文化・芸術、人物、インフラなどさまざまな観点からアプローチし、考察する。基本的に学生の事前学修を基に、アクティブ・ラーニング形式で授業を行う。		
関連するディプロマポリシー	DP3 観光の理論と知識の理解		
キーワード	四国遍路、こんびら参り、洋上観光、瀬戸大橋、インバウンド、まちづくり、観光ニーズ		
到達目標	【到達目標1】各時代の四国の観光について説明できる。 【到達目標2】四国の観光の変遷について説明できる。 【到達目標3】今後の四国の観光のあり方について考えを示すことができる。		
授業計画	第1回: ガイダンス(講義概要、授業計画、成績評価基準の解説)、四国の観光の概要 第2回: 江戸期の四国の観光 第3回: 明治期の四国の観光 第4回: 大正から戦前の四国の観光 第5回: 戦後から昭和30年代の四国の観光 第6回: 昭和40年代から瀬戸大橋開通までの四国の観光 第7回: 瀬戸大橋開通後の四国の観光 第8回: 平成後半の四国の観光 第9回: 住民によるまちづくりと四国の観光 第10回: 四国の観光のニーズ 第11回: 今後の徳島の観光のあり方 第12回: 今後の香川の観光のあり方 第13回: 今後の愛媛の観光のあり方 第14回: 今後の高知の観光のあり方 第15回: 今後の四国の観光のあり方		
成績評価	評価の種類	評価割合(%)	評価基準
	中間レポート	30	【到達目標1・2】の達成度を確認するために、課題に対する問題意識、考え方について評価する。詳しい評価基準は授業で説明する。
	期末レポート	40	【到達目標3】の達成度を確認するために、課題に対する考え方について評価する。詳しい評価基準は授業で説明する。
	毎回のリアクションシート	30	【到達目標1～3】の達成度を確認するために、毎回の授業についての理解度について評価する。詳しい評価基準は授業で説明する。
テキスト	使用しない。		
参考書	授業で適宜紹介する。		
授業時間外学修(事前・事後学修等)	1. 事前学修として、授業で指示された課題について、調査して授業に臨むこと(90分)。 2. 事後学修として、授業で指示された課題に従って講義ノートを整理すること(90分)。		
課題に対するフィードバックの方法	1. 中間レポート、リアクションシートについては、提出後の次回授業においてフィードバックされる。 2. 最終レポートについては、提出後、学校を通じてフィードバックされる。		
受講ルール等	1. 私語は授業の円滑な運営を妨げ、他の学生の迷惑となるので、厳禁とする。 2. 授業の到達目標を確実に達成するため、課題に真剣に取り組み、授業の事前・事後学修を欠かさず行うこと。 3. 授業の進め方や成績評価、詳しい受講ルールについては、初回の授業で説明される。		
連絡先(質問等)	質問は、授業終了後に教室で受け付ける。		

授業科目名	中小企業論		
配当年次	3年次	配当学期	第1クォーター
クラス数	1クラス	単位数	2単位
必修・選択等の別	選択必修	授業の方法	講義
担当教員	山本 慶子		
科目区分	展開科目群		
授業概要	日本の中小企業は企業全体の99.7%を占めるが、中小企業の実態については理解が十分なされていない。一方、ベンチャー企業はイノベーションを実用化することにより雇用の創出となり、日本の地域経済・産業の発展に貢献する。本講義では、日本の経済・産業における中小企業の位置づけと役割、さらに中小企業の特徴や現状を学修する。中小企業に関する理論と実態を理解し、持続可能な中小企業の今後の動向を探る。コロナ後の社会課題の解決を重要視した経営方針や中小企業の付加価値・生産性をいかに高めるかを学ぶ。授業は毎回1テーマを取上げ、レジュメに基づき進める。講義形式を基本とし、必要に応じて議論・対話を交える。		
関連するディプロマポリシー	DP6 他分野の応用的な能力の修得		
キーワード	イノベーション、SDGs(持続可能な開発目標)、DX(デジタル・トランスフォーメーション)、IT・IoT、AI、事業承継、起業		
到達目標	【到達目標1】 中小企業について戦後から現在までの変化・変遷について説明できる。 【到達目標2】 中小企業の生き残るために必要なことは何かを説明できる。 【到達目標3】 中小企業存続に不可欠な事業承継について学んだ知見から説明できる。		
授業計画	第1回：序・地域とつながる中小企業論 第2回：①なぜ中小企業は必要なのか 第3回：①中小企業の今後の役割と存在意義 第4回：②ベンチャービジネスと中小企業 第5回：②イノベーションの担い手は誰か 第6回：③中小企業と下請ビジネス 第7回：④地場産業・産地の中小企業 第8回：⑤地域経済と中小企業 第9回：⑥地域経済・コミュニティを支える中小企業 第10回：⑦持続的発展と中小企業 第11回：⑧ウェルビーイングと中小企業 第12回：⑧ウェルビーイング時代の自己実現 第13回：⑨中小企業金融を学ぶ 第14回：⑩中小企業政策を学ぶ 第15回：補) 中小企業論のレンズを通して社会経済・地域をみる		
成績評価	評価の種類	評価割合(%)	評価基準
	論述試験	60	【到達目標1～3】の達成度を確認するため、論述試験を行う。授業で説明した中小企業論の考え方、知識の理解度、課題解決方法について評価する。詳しい評価基準は、授業で説明する。
	小レポート	20	【到達目標1～3】の達成度を確認するため、毎回の小レポートの提出を求める。課題に対して適切な内容・記述であったかを評価する。詳しい評価基準は、授業で説明する。
	グループ討議	20	【到達目標1～3】の達成度、理解度を確認するため、グループによる課題解決についての討議を行う。筆者はファシリテーターを務める。詳しい評価は授業で説明する。
テキスト	「地域とつながる中小企業論」長山宗広・遠山恭司・山本篤民・許伸江著、有斐閣出版社、2024		
参考書	「日本企業の勝算」デービット・アトキンソン著、東洋経済新報社、2020		
授業時間外学修(事前・事後学修等)	1. 事前学習として、教科書を熟読し、課題について理解を深めておくこと。 2. 事後学習として、授業で習得した講義内容をノートに整理すること。		
課題に対するフィードバックの方法	1. 課題については、講義の中で事例を紹介し、理解を深められる具体的な内容でフィードバックされる。 2. 小レポートについては、提出後の次回授業においてフィードバックされる。		
受講ルール等	1. 私語は授業の円滑な運営を妨げ、他の学生の迷惑となるので、厳禁とする。 2. 授業の到達目標を確実に達成するため、課題に真剣に取り組み、授業の事前・事後学修を欠かさず行うこと。 3. 授業の進め方や成績評価、詳しい受講ルールについては、初回の授業で説明される。		
連絡先(質問等)	質問は、授業終了後に教室で受け付ける。		

授業科目名	コミュニティデザイン論		
配当年次	3年次	配当学期	第2クォーター
クラス数	1クラス	単位数	2単位
必修・選択等の別	選択必修	授業の方法	講義
担当教員	西成 典久		
科目区分	展開科目群		
授業概要	コミュニティデザインとは、ある地域やコミュニティのなかで、人と人のつながり方やその仕組みをデザインすることである。別の言い方をすれば、地域の課題解決に向けたコミュニティの主体づくり、ともいえる。人口急減、超少子高齢化社会において、地方都市や中山間地域の活力をどのように維持あるいは活性化させることができるのか、本講義では特にコミュニティデザインという概念や手法に着目し、生活環境の課題解決や魅力創造に貢献しうる基礎的能力を身につけることを目的としている。この授業では、講義形式での学修を中心に地域をめぐる諸課題について学び、地域やまちの特徴を教科書輪読を通じて学びを深めていく。また、グループワーク等を通じて、コミュニティデザインの発想を用いた課題解決の事例研究もしくは解決策提案に取り組む。		
関連する ディプロマポリシー	DP6 他分野の応用的な能力の修得		
キーワード	まちづくり・地域振興・課題解決・場づくり・環境デザイン・地域魅力		
到達目標	【到達目標1】地域をめぐる諸課題について説明することができる。 【到達目標2】地域やまちの特徴や魅力を形成史から説明することができる。 【到達目標3】課題解決に向けてグループワークを通じた発表をすることができる。		
授業計画	第1回：ガイダンス・自己紹介・イントロダクション 第2回：日本の地方都市・中山間地域をめぐる諸問題 第3回：コミュニティデザインワークショップ(1) プランの作り方 第4回：コミュニティデザインワークショップ(2) 問題解決思考 第5回：まちの形成史から場所の特徴を把握する(1) 海城町の物語① 第6回：まちの形成史から場所の特徴を把握する(2) 海城町の物語② 第7回：まちの形成史から場所の特徴を把握する(3) 海城町の物語③ 第8回：まちの形成史から場所の特徴を把握する(4) 海城町の物語④ 第9回：まちの形成史から場所の特徴を把握する(5) 海城町の物語⑤ 第10回：まちの形成史から場所の特徴を把握する(6) 海城町の物語⑥ 第11回：コミュニティデザインワークショップ(3) グループワーク① 第12回：コミュニティデザインワークショップ(4) グループワーク② 第13回：コミュニティデザインワークショップ(5) グループワーク③ 第14回：コミュニティデザインワークショップ(6) グループワーク④ 第15回：最終発表・まとめ		
成績評価	評価の種類	評価割合(%)	評価基準
	出席と提出物	40	講義に対する参加度と主体性を評価する。
	レポートおよび最終プレゼンテーション	30	論理性と創造性に両面から評価する。
	グループワークでの主体性	30	グループワークで主体性と貢献度を評価する。
テキスト	『高松 海城町の物語』瀬戸内人(定価2,200円)		
参考書	授業で適宜紹介する。		
授業時間外学修 (事前・事後学修等)	1. 事前学修として、講義内容と関連する書籍を読み、予備知識を得ておくこと(90分)。 2. 事後学修として、講義ノートをあらためて整理し、自分の感想や疑問を記しておくこと(90分)。		
課題に対する フィードバックの方法	1. 提出物については、提出後の次回授業においてフィードバックされる。		
受講ルール等	1. 私語は授業の円滑な運営を妨げ、他の学生の迷惑となるので、厳禁とする。 2. 授業の到達目標を確実に達成するため、課題に真剣に取り組み、授業の事前・事後学修を欠かさず行うこと。 3. 授業の進め方や成績評価、詳しい受講ルールについては、初回の授業で説明される。 4. フィールドワーク等により学外で実施する際の交通費等は自己負担とする。		
連絡先(質問等)	質問は、授業終了後に教室で受け付ける。		

授業科目名	人工知能概論		
配当年次	3年次	配当学期	第2クォーター
クラス数	1クラス	単位数	2単位
必修・選択等の別	必修	授業の方法	講義
担当教員	安藤 一秋		
科目区分	展開科目群		
授業概要	人工知能(AI:Artificial Intelligence)の研究は1950年代から続いているが、現在は第三次人工知能ブームと言われ、新聞やニュースなどでも人工知能に関する話題を見聞きする機会が増えた。本講義ではまず、人工知能とは何か、人工知能にはどのような歴史があるのかについて述べる。その後、人工知能に関する基礎知識や実現するための仕組みについて概観する。また、ビジネスの現場で人工知能はどのように導入されているのか、人工知能をどのように活用すべきか、今後、人工知能の進化が社会にどのような影響を及ぼすのかなどについても俯瞰する。授業は原則、講義形式で実施するが、発言してもらう機会も設ける。		
関連するディプロマポリシー	DP6 他分野の応用的な能力の修得		
キーワード	AIリテラシー、人工知能、機械学習、シンギュラリティ、AIプロジェクト		
到達目標	【到達目標1】 人工知能の全体像について説明できる。 【到達目標2】 人工知能の基礎技術について基本原理を説明できる。 【到達目標3】 人工知能に関する基礎知識を観光分野を含めた多様な分野で活用できる。		
授業計画	第1回：人工知能とは？ 第2回：人工知能の研究事例 第3回：人工知能の歴史(第一次ブーム) 第4回：人工知能の歴史(第二次ブーム) 第5回：人工知能の現状 第6回：人工知能の未来 第7回：人工知能の基礎知識 第8回：機械学習(教師あり学習) 第9回：機械学習(教師なし学習) 第10回：ニューラルネットワーク 第11回：ディープラーニング 第12回：人工知能プロジェクトの考え方 第13回：人工知能と社会 第14回：AI演習 第15回：最終課題の作成		
成績評価	評価の種類	評価割合(%)	評価基準
	小レポート	70	【到達目標1～3】の達成度を確認するため、毎回の授業で小レポートの提出を求める。課題に対して適切な内容・記述であるかを評価する。詳しい評価基準は、授業で説明する。
	最終課題(レポート)	30	【到達目標1～3】の総合的な達成度を確認するため、最終課題の提出を求める。授業で説明された人工知能に関する知識や考え方、活用法などの理解度について評価する。詳しい評価基準は、授業で説明する。
テキスト	授業Web上で資料を配布する。授業Webおよび資料の入手方法は初回の授業で連絡する。		
参考書	授業で適宜紹介する。		
授業時間外学修(事前・事後学修等)	1. 事前学修として、次回の授業内容に関連する資料を確認し、関連情報を調査すること(90分)。 2. 事後学修として、授業で示された課題を仕上げ、小レポートにまとめること(90分)。		
課題に対するフィードバックの方法	1. 小レポートについては、締切後の次回授業にて、あるいは電子的にフィードバックされる。 2. 最終レポートについては、総評を電子的にフィードバックされる。		
受講ルール等	1. 私語は授業の円滑な運営を妨げ、他の学生の迷惑となるので、厳禁とする。 2. 授業の到達目標を確実に達成するため、課題に真剣に取り組み、授業の事前・事後学修を欠かさず行うこと。 3. 授業の進め方や成績評価、詳しい受講ルールについては、初回の授業で説明される。		
連絡先(質問等)	質問は、授業終了後に教室で受け付ける。		

授業科目名	マップデザイン実習		
配当年次	3年次	配当学期	第2クォーター
クラス数	1クラス	単位数	1単位
必修・選択等の別	必修	授業の方法	実習
担当教員	吉田 雄介		
科目区分	展開科目群		
授業概要	近年、スマートフォンなどのデジタル機器が普及したこともあり、Google Mapsをはじめとして地図が身近な存在となっている。また、企業や行政などのさまざまな組織の現場においても、地図の作成やデジタルマップの利用が重要となっている。この授業は、基本的な地図の作成やその表現方法を身につけ、目的に応じて地図を作成できる手法の修得を目的とする。実習では、Adobe Illustratorを用いてベースマップのトレースや地図表現の方法といった基本的な製図法に習熟し、そのうえで課題の発見や地図の作成目的などの設定操作の方法を修得する。その際には、教員の指定した地域を対象とし、その地域の課題に応じた地図を作成することとする。		
関連するディプロマポリシー	DP6 他分野の応用的な能力の修得		
キーワード	地図、GIS、デジタルマップ、Adobe Illustrator、主題図、アクセスマップ		
到達目標	【到達目標1】地図の基本的な扱い方や基礎知識、図法のルールを理解し、説明することができる。 【到達目標2】製図に必要なIllustratorの使用方法を修得し、目的に応じた説得的な地図を作成することができる。		
授業計画	第1回：ガイダンス 第2回：一般図と主題図について 第3回：Adobe Illustratorの基本操作① ラインの作成 第4回：Adobe Illustratorの基本操作② ポリゴンの作成 第5回：Adobe Illustratorの基本操作③ 塗りつぶし、線や色の変更 第6回：対象地域について 第7回：地図の作成① ベースマップのトレース 第8回：地図の作成② データの記号化 第9回：地図の作成③ データの記号化 第10回：地図の作成④ 注記に用いる文字と配置 第11回：地図の作成⑤ 地図の彩色 第12回：課題のプレゼンテーション① 第13回：課題のプレゼンテーション②と講評 第14回：手書き地図による地域づくり・まちづくり① 第15回：手書き地図による地域づくり・まちづくり②		
成績評価	評価の種類	評価割合(%)	評価基準
	小レポート	40	【到達目標1】の達成度を確認するため、毎回の授業で小レポートの提出を求める。授業で説明された地図の基本的な語句・概念についてまとめた内容で評価を行う。詳しい評価基準は、授業で説明する。
	プレゼンテーション	60	【到達目標2】の達成度を確認するため、第13回から第15回の授業で、各自に発表を求める。その発表内容、およびそれに関連する成果物の内容について評価する。詳しい評価基準は、授業で説明する。
テキスト	使用しない。毎回の授業で資料を配布する。		
参考書	浮田典良・森三紀『地図表現ガイドブック-主題図作成の原理と応用』ナカニシヤ出版、2004年。手書き地図推進委員会編著『地元を再発見する! 手書き地図のつくり方』学芸出版社、2019年。他は授業で適宜紹介する。		
授業時間外学修(事前・事後学修等)	1. 事前学修として、地図作成の課題に向けて、対象地域に関連する論文・書籍などに目を通し、作成する地図について考えておくこと。 2. 事後学修として、適宜Illustratorや製図の復習を行うこと。		
課題に対するフィードバックの方法	1. 小レポートについては、第9回の授業でフィードバックされる。 2. プレゼンテーションおよびそれに関連する成果物については、第15回の授業でフィードバックされる。		
受講ルール等	1. 私語は授業の円滑な運営を妨げ、他の学生の迷惑となるので、厳禁とする。 2. 授業の到達目標を確実に達成するため、課題に真剣に取り組み、授業の事前・事後学修を欠かさず行うこと。 3. 授業の進め方や成績評価、詳しい受講ルールについては、初回の授業で説明される。		
連絡先(質問等)	質問は、授業終了後に教室で受け付ける。		

授業科目名	メディアコンテンツ実習		
配当年次	3年次	配当学期	第2クォーター
クラス数	1クラス	単位数	1単位
必修・選択等の別	必修	授業の方法	実習
担当教員	有國 明弘		
科目区分	展開科目群		
授業概要	この実習は、メディアコンテンツが展開する実相やそれに伴う課題について、調査研究を通して体験的に理解を深めるものである。近年、紙媒体の漫画作品がアニメ化されたり、実写ドラマ化されたり、さらにそれが映画化されたりするなど、メディアコンテンツの積極的な展開が目立っている。また、一つの作品が他言語に吹替えられたり、設定や物語の一部に改変が加えられたりして他国で受容されるのも、コンテンツ展開の一側面である。このように、生み出された作品がそれだけで完結せず、さまざまなメディアや文化を越えて広まっていく状況について、学生各自が題材を選びながら追試することで、コンテンツの流通について知見を深めることを本実習の目的とする。実習準備でメディアコンテンツの流通について体験的に学び、実習では学生自らが任意のコンテンツを選び、その展開について調査をし、プレゼンテーションおよびディスカッションを行う。		
関連するディプロマポリシー	DP6 他分野の応用的な能力の修得		
キーワード	メディア、大衆文化、コンテンツ、フォーマット、現地化、パロディ、リメイク作品、異文化		
到達目標	【到達目標1】メディアとコンテンツの関係性について説明できる。 【到達目標2】コンテンツの展開について、具体例を用いて説明できる。 【到達目標3】インターネットを使って、信頼に足る適切な情報を得ることができる。 【到達目標4】他者の発表について積極的に質問をし、ディスカッションを活性化できる。		
授業計画	第1回：はじめに：メディアとコンテンツ 第2回：コンテンツを構成する要素：フォーマットとナラティブ 第3回：コンテンツの展開：メディア間の移動 第4回：コンテンツの展開：作品のパロディと海外展開 第5回：調査：調査方法とテーマの設定 第6回：調査：コンテンツの基本情報 第7回：調査：コンテンツの展開① 国内でのメディア間展開の様相 第8回：調査：コンテンツの展開② コンテンツの海外展開の様相 第9回：中間発表・ディスカッション 第10回：調査：コンテンツの展開③ コンテンツ展開におけるナラティブの変容 第11回：調査：コンテンツの展開④ ナラティブの変容の背景 第12回：調査：発表準備① 各テーマにおけるコンテンツのメディア間展開の分析 第13回：調査：発表準備② 各テーマにおけるコンテンツの文化間越境の分析 第14回：調査：発表準備③ 各テーマにおけるコンテンツ展開のまとめ 第15回：最終発表・ディスカッション		
成績評価	評価の種類	評価割合(%)	評価基準
	提出課題 (コメントシート)	30	【到達目標1・2】の達成度を確認するため、毎回の授業でコメントシートの提出を求める。授業で理解した内容や、調査の進捗状況の記入を求め、その内容について評価基準表に基づき評価を行う。詳しい評価基準は、授業で説明する。
	プレゼンテーション	40	【到達目標1～4】の達成度を確認するため、自らのテーマに沿った発表を行い、その内容が実習の計画と結果の内容を踏まえているか、出典の確かな情報によって議論が構築されているかなどについて評価する。詳しい評価基準は、授業で説明する。
	授業参加への積極性 (ディスカッションへの参加度)	30	【到達目標4】の達成度を確認するため、他の学生の発表において、他者に対して適切な質問ができていないか、自分のテーマと関連付けたコメントができるかについて評価する。詳しい評価基準は、授業で説明する。
テキスト	使用しない。		
参考書	岡本健、遠藤英樹 編『メディア・コンテンツ論』ナカニシヤ出版(2016年) 2,500円+税 上記のほか、授業で適宜紹介する。		
授業時間外学修 (事前・事後学修等)	1. 事前学修として、第1回から第4回の授業においては、前回の授業において提示したテーマに関する資料を読み、第5回から第15回の授業においては、各自がテーマとする作品に関して、分析に必要となる作品鑑賞や情報収集、発表に向けた準備を行うこと。 2. 事後学修として、第1回から第4回の授業においては、復習として実習計画の内容をノートに整理理解を深め、第5回から第15回の授業においては、発表準備として授業で教員からのアドバイスがあった部分などを追加調査すること。		
課題に対するフィードバックの方法	1. 提出課題(コメントシート)については、担当教員より、評価基準表に基づく評価結果を付して、返却される。 2. プレゼンテーションについては、事前に評価基準が説明され、実施後に各自にフィードバックされる。 3. 授業参加への積極性については、事前に評価基準が説明され、授業でフィードバックされる。		
受講ルール等	1. 私語は授業の円滑な運営を妨げ、他の学生の迷惑となるので、厳禁とする。 2. 授業の到達目標を確実に達成するため、課題に真剣に取り組む、授業の事前・事後学修を欠かさず行うこと。 3. 授業の進め方や成績評価、詳しい受講ルールについては、初回の授業で説明される。		
連絡先(質問等)	質問や連絡などについては、オフィスアワーに研究室で受け付ける。また、e-mailによる質問や連絡も、常時受け付ける。研究室の場所、オフィスアワーの時間帯およびメールアドレスは、初回の授業で提示する。		

授業科目名	マーケティング論		
配当年次	3年次	配当学期	第3クォーター
クラス数	1クラス	単位数	2単位
必修・選択等の別	選択必修	授業の方法	講義
担当教員	日笠 倫周		
科目区分	展開科目群		
授業概要	この授業は、マーケティングの基礎的な概念や理論枠組みを理解し、それらの知識を活用できるようになることを目的とする。そのために、企業と市場との関係やマーケティング意思決定に関して特に焦点を当て、これらのことについて講義形式で学ぶ。授業計画としては、企業と市場との関係について5回分、マーケティング意思決定について8回分、マーケティングの応用領域について2回分という配分で講義を行う。応用領域では、近年注目を集めている国際マーケティングやオンラインマーケティングに関する説明を行う。また、授業は基本的に講義の形式をとるが、理解促進のためにグループワーク等も行う。		
関連するディプロマポリシー	DP6 他分野の応用的な能力の修得		
キーワード	価値交換、顧客満足度、セグメンテーション、ターゲティング、ポジショニング、製品開発、価格差別、SP、VMS		
到達目標	【到達目標1】 マーケティング論で学んだ概念や理論を説明できる。 【到達目標2】 マーケティング論で学んだ知識を利用して、企業の行動を説明できる。 【到達目標3】 マーケティング論で身につけた知見を、観光研究のいろいろな課題に応用できる。		
授業計画	第1回：オリエンテーション 第2回：マーケティングの歴史 第3回：マーケティングと顧客満足 第4回：マーケティングと市場 第5回：製品差別化の基礎 第6回：ケーススタディー 第7回：マーケティング・リサーチ 第8回：マーケティング戦略 第9回：製品政策 第10回：価格政策 第11回：プロモーション政策 第12回：流通政策 第13回：製品寿命と市場地位 第14回：マーケティング領域の拡大 第15回：近年のマーケティング研究		
成績評価	評価の種類	評価割合(%)	評価基準
	小テスト	50	【到達目標1】の達成度を確認するため、小テストを実施する。授業で説明されたマーケティング論の考え方や知識の理解度について評価する。詳しい評価基準は、授業で説明する。
	授業内課題	20	【到達目標1・2】の達成度を確認するため、毎回の授業で課題を課す。課題に対して適切な内容・記述であるかを評価する。詳しい評価基準は、授業で説明する。
	レポート	30	【到達目標1～3】の達成度を確認するため、レポートの提出を求める。課題に対して適切な内容・記述であるかを評価する。詳しい評価基準は、授業で説明する。
テキスト	毎回の授業で教材を配布する。		
参考書	授業で適宜紹介する。		
授業時間外学修(事前・事後学修等)	1. 事前学修として、授業で指示された課題について、指定の要領で小レポートを作成し、次回までに提出すること(90分)。 2. 事後学修として、授業で指示された課題に従って講義ノートを整理すること(90分)。		
課題に対するフィードバックの方法	1. 小テストについては、答案提出後に解説を行い、次回授業時に答案を返却する。 2. 授業内課題については、答案提出後に解説を行い、次回授業時に答案を返却する。 3. レポートについては、提出後の次回授業においてフィードバックを行う。		
受講ルール等	1. 私語は授業の円滑な運営を妨げ、他の学生の迷惑となるので、厳禁とする。 2. 授業の到達目標を確実に達成するため、課題に真剣に取り組み、授業の事前・事後学修を欠かさず行うこと。 3. 授業の進め方や成績評価、詳しい受講ルールについては、初回の授業で説明される。		
連絡先(質問等)	質問は、授業終了後に教室で受け付ける。		

授業科目名	データリテラシー		
配当年次	3年次	配当学期	第3クォーター
クラス数	1クラス	単位数	2単位
必修・選択等の別	必修	授業の方法	講義
担当教員	米谷 雄介		
科目区分	展開科目群		
授業概要	データ活用やデジタル技術の進化により、我が国や諸外国において、データ・デジタル技術を活用した産業構造の変化が起きている。このような変化の中で企業が競争上の優位性を確立するためには、常に変化する社会や顧客の課題を捉え、デジタルトランスフォーメーション(DX)を実現することが重要である。 DXの推進において、データを活用した業務変革や新規ビジネスの実現に向けて、データを収集・解析する仕組みの設計・実装・運用を担う人材が必要とされている。本講義ではそのような人材に求められる基礎知識であるデータリテラシー(「データソースとデータ構成」の知識、「分析方法と手法」の知識、「ユースケースの用途」の知識)を学ぶ。		
関連するディプロマポリシー	DP6 他分野の応用的な能力の修得		
キーワード	データソース、データ構成、データ分析、データ活用、ユースケース		
到達目標	【到達目標1】データはどこから来て、どのように構成されているのか? 「データソースとデータ構成」の知識を説明できる 【到達目標2】基本的な統計的手法から機械学習アルゴリズムまで「分析方法と手法」の知識を説明できる 【到達目標3】データ主導型の知見を用いて価値を創造できる「ユースケースの用途」の知識を説明できる		
授業計画	第1回: 高度情報化社会・データ駆動型社会とは 第2回: 社会で活用されるデータ 第3回: データ活用とは 第4回: データ分析とは 第5回: データを読み、説明し、扱う 第6回: データを扱うときに注意すること 第7回: データの構造とプログラミング 第8回: データの構成 第9回: 時系列データ分析 第10回: 文章データ分析 第11回: データ活用実践1 第12回: データ活用実践2 第13回: 応用課題: 観光データセットの探索とデータ分析技術の適用 第14回: 応用課題: データ活用による観光ビジネス改善案の提案 第15回: 成果発表・相互評価		
成績評価	評価の種類	評価割合(%)	評価基準
	小レポート	70	【到達目標1～3】の達成度を確認するため、毎回、小レポートの提出を求める。レポートにおける説明により知識の定着度を、プログラム等の成果物によりスキルの定着度を評価する。詳しい評価基準は、授業で説明する。
	最終レポート	30	【到達目標3】の達成度を確認するため、第13回～第15回の内容をレポートでまとめてもらう。他者のアイデアを踏まえた自分のアイデアの改善についても省察してもらう。詳しい評価基準は授業で説明する。
テキスト	岡嶋裕史、吉田雅裕 著 『[改訂新版]はじめてのAIRリテラシー(基礎テキスト)』 技術評論社 (2024年) 1,848円+税		
参考書	授業で適宜紹介する。		
授業時間外学修(事前・事後学修等)	1. 事前学修として、授業で指示された課題について、指定の要領で小レポートを作成し、次回までに提出すること(90分)。 2. 事後学修として、授業で動かしたプログラムは自分一人でも動作を再現できるかを確認すること(90分)。		
課題に対するフィードバックの方法	1. 小レポートについては、提出後の次回授業においてフィードバックされる。 2. 最終レポートについては、新規性や有用性の高いサービスについては表彰し、全体に共有する。		
受講ルール等	1. 私語は授業の円滑な運営を妨げ、他の学生の迷惑となるので、厳禁とする。 2. 授業の到達目標を確実に達成するため、課題に真剣に取り組む、授業の事前・事後学修を欠かさず行うこと。 3. 授業の進め方や成績評価、詳しい受講ルールについては、初回の授業で説明される。		
連絡先(質問等)	質問は、授業終了後に教室で受け付ける。		

授業科目名	人工知能プログラミング実習		
配当年次	3年次	配当学期	第3クォーター
クラス数	1クラス	単位数	1単位
必修・選択等の別	必修	授業の方法	実習
担当教員	安藤 一秋		
科目区分	展開科目群		
授業概要	人工知能(AI:Artificial Intelligence)は今、第三次ブームを迎えており、新聞やニュースなどを通じて、人工知能に関する話題を日々見聞きするようになった。人工知能は、身近な家電や各種サービスにも導入されつつあり、さまざまな分野への応用や、人口知能を活用した新しいビジネスの創出などが期待されている。本実習ではまず、人工知能を実装するためのプログラミング言語のひとつであるPython(パイソン)を利用して、基礎的なプログラミング方法(条件分岐と繰り返しなど)について学ぶ。最後に、簡単なデータ分析を通じて人工知能プログラミングの活用方法を身につける。		
関連するディプロマポリシー	DP6 他分野の応用的な能力の修得		
キーワード	人工知能、プログラミング、Python、機械学習、データ分析、可視化		
到達目標	【到達目標1】Pythonを用いて簡単なプログラミングができる。 【到達目標2】基礎的な機械学習を用いて簡単なデータ分析ができる。		
授業計画	第1回: コンピュータとプログラム 第2回: 実習環境の構築 第3回: Python入門① 演算子、変数、データ型 第4回: Python入門② キーボードからの入力、演算子 第5回: Python入門③ 条件分岐 第6回: Python入門④ 複数条件の組み合わせ 第7回: Python入門⑤ 文字列 第8回: Python入門⑥ リスト、タプル 第9回: Python入門⑦ データの取り扱い 第10回: Python入門⑧ 繰り返し 第11回: Python入門⑨ 多重の繰り返し 第12回: Python入門⑩ 機械学習 第13回: データ分析① テキスト処理 第14回: データ分析② 可視化 第15回: 最終課題の作成		
成績評価	評価の種類	評価割合(%)	評価基準
	小レポート	60	【到達目標1・2】の達成度を確認するため、毎回の授業で小レポートの提出を求める。詳しい評価基準については、授業で説明する。
	最終課題(レポート)	40	【到達目標1・2】の達成度を確認するため、最終課題の提出を求める。詳しい評価基準については、授業で説明する。
テキスト	授業Web上で実習資料を配布する。授業Webおよび資料の入手方法は初回の授業で説明する。		
参考書	授業で適宜紹介する。		
授業時間外学修(事前・事後学修等)	1. 事前学修として、次回の実習内容に関連する資料を確認し、実習目的と概要などを把握しておくこと。 2. 事後学修として、授業で示された課題を仕上げて、小レポートにまとめること。		
課題に対するフィードバックの方法	小レポートおよび最終課題(レポート)についてはコメントを付し、フィードバックされる。		
受講ルール等	1. 私語は授業の円滑な運営を妨げ、他の学生の迷惑となるので、厳禁とする。 2. 授業の到達目標を確実に達成するため、課題に真剣に取り組み、授業の事前・事後学修を欠かさず行うこと。 3. 授業の進め方や成績評価、詳しい受講ルールについては、初回の授業で説明される。		
連絡先(質問等)	授業終了後に、教室で質問を受け付ける。		

授業科目名	起業論		
配当年次	3年次	配当学期	第4クォーター
クラス数	1クラス	単位数	2単位
必修・選択等の別	選択必修	授業の方法	講義
担当教員	山本 慶子		
科目区分	展開科目群		
授業概要	本講義は、ベンチャー・ビジネス(VB)の現状と展望、および起業のために必要な知識や能力などについて、社会に必要とされることやベンチャー・ビジネス実践について概説する。VBの現状と展望については、ベンチャー企業の特性、起業の環境や制度、地域振興、グローバル競争に勝つ方法を分析し、その分析から、自身の起業や就職後の社内起業のビジネスプラン作成に必要な企画能力や、科学技術政策、産業政策、資金調達、知的資産の権利化(特許等)、ベンチャーキャピタルなどの基礎知識を学修する。この授業は、アクティブ・ラーニングによって、教員－学生との双方向の学修により理解を深めながら進める。		
関連するディプロマポリシー	DP6 他分野の応用的な能力の修得		
キーワード	ベンチャー、起業家精神(アントレプレナーシップ)、創造性、ビジネスプラン、地域振興、社内起業		
到達目標	【到達目標1】起業論について学んだ知識と取り組む方法を簡単に説明できる。 【到達目標2】起業の先人が行った偉業と展開が社会に与えた影響と功績、および大企業の創業者者たちはどのような発想、どのようなやり方で成功したかについて説明できる。 【到達目標3】アクティブラーニング(グループディスカッション、ディベート等)の際に積極的に発表できる。		
授業計画	第1回：イントロダクション、大学生で出来る起業とは何か。授業内容と成績評価について説明。 第2回：なぜ、起業家が求められているのか、起業家の特性や志の重要性とベンチャー企業について理解する。 第3回：起業家のバックグラウンドと成功する起業家の特徴、成功と成長について理解する。 第4回：ベンチャー企業としてアイデアをどのように考えればよいか、起業できるビジネスアイデアを一緒に考える。 第5回：ベンチャー企業のライフサイクルマネジメントとリスクマネジメントを理解する。 第6回：企業成長と社内ベンチャーの取組みについてグループディスカッションする。 第7回：ベンチャー企業の資金調達およびメンターとエンジェルの役割と存在を説明する。 第8回：クラウドファンディングと新興企業の新規上場制度について説明する。 第9回：ベンチャー企業投資の回収(出口)としてのM&Aの取組みについて 第10回：ベンチャーキャピタルと投資事業組合の役割 第11回：日本のベンチャーキャピタルの課題とインフラ整備を考える。 第12回：地方自治体および大学のベンチャー支援インフラについて 第13回：成長戦略のための日本の経営資源活用について 第14回：自律した地域づくりのためのベンチャー企業について 第15回：自律する地域づくりへの挑戦、ビジネスプランを考える。		
成績評価	評価の種類	評価割合(%)	評価基準
	論述試験	60	【到達目標1～3】の達成度を確認するため論述試験を行う。授業で説明した起業家精神、創業者の発想、どのようなやり方で成功したか、時代背景も含めそこから何を学ぶか。世界経済を動かした偉業を参考に評価する。
	小レポート	25	【到達目標1・2】の理解度を確認するため、授業後に課題を提示し、小レポートの作成・提出を求め、評価する。
	グループ討議	15	【到達目標3】の理解度を確認するためのグループ討議を行い評価する。
テキスト	忽那憲治、長谷川博和、高橋徳行、五十嵐伸吾、山田仁一郎 著『アントレプレナーシップ入門〔新版〕ベンチャーの創造を学ぶ』有斐閣ストゥディア(2022年) 2,000円+税		
参考書	大東文化大学起業家研究会 編『チャレンジとイノベーション「世界の起業家50人」』学文社(2004年) 2,100円+税 ロバート・キヨサキ 著(白根美保子 訳)『金持ち父さん貧乏父さん』筑摩書房(2022年改訂) 1,600円+税		
授業時間外学修(事前・事後学修等)	- 事前学習として、指示された課題・教科書を熟読し内容をまとめておく。 - 事後学習として、講義で習得した知識をノートに整理し復習する。		
課題に対するフィードバックの方法	- 論述試験については、試験前に採点基準が提示され、模範解答を提示する。 - 小レポートについては、提出後の次回授業においてフィードバックされる。		
受講ルール等	- 私語は授業の円滑な運営を妨げ、他の学生の迷惑となるので、厳禁とする。 - 授業の到達目標を確実に達成するため、課題に真剣に取り組む、授業の事前・事後学修を欠かさず行うこと。 - 授業の進め方や成績評価、詳しい受講ルールについては、初回の授業で説明される。		
連絡先(質問等)	質問は、授業終了後に教室で受け付ける。		

授業科目名	データリテラシー実習		
配当年次	3年次	配当学期	第4クォーター
クラス数	1クラス	単位数	1単位
必修・選択等の別	必修	授業の方法	実習
担当教員	米谷 雄介		
科目区分	展開科目群		
授業概要	データ活用やデジタル技術の進化により、我が国や諸外国において、データ・デジタル技術を活用した産業構造の変化が起きている。このような変化の中で企業が競争上の優位性を確立するためには、常に変化する社会や顧客の課題を捉え、デジタルトランスフォーメーション(DX)を実現することが重要である。 DXの推進において、データを活用した業務変革や新規ビジネスの実現に向けて、データを収集・解析する仕組みの設計・実装・運用を担う人材が必要とされている。本実習ではそのような人材に求められる基礎知識であるデータリテラシーの習得を目的とし、様々なケーススタディにおいてデータ分析・データ活用の実践やデータ利活用サービスの開発をおこなう。		
関連するディプロマポリシー	DP6 他分野の応用的な能力の修得		
キーワード	データソース、データ構成、データ分析、データ活用、ユースケース、ダッシュボード、オープンAPI		
到達目標	【到達目標1】さまざまなビジネス分野におけるデータソースの検索とデータ構成を実践できる 【到達目標2】収集したデータに対して統計分析や機械学習アルゴリズムを適用できる 【到達目標3】データ分析、データ活用を通じてビジネスにおける価値を提案できる		
授業計画	第1回: BIツールの導入と基本操作の確認, BIツールによるデータの取得・加工1 第2回: BIツールによるデータの取得・加工2 第3回: BIツールによるデータの可視化1 第4回: BIツールによるデータの可視化2 第5回: ビジュアルで分析してみよう1 第6回: ビジュアルで分析してみよう2 第7回: 作成したレポートをサービスとして発行してみよう 第8回: レポートを組み合わせるダッシュボードを作ってみよう 第9回: オープンデータを使って地域の状況を可視化しよう1 第10回: オープンデータを使って地域の状況を可視化しよう2 第11回: グループごとの課題の発見 第12回: グループごとのデータ利活用サービス企画・設計 第13回: オリジナルデータ利活用サービスの共同開発(制作) 第14回: オリジナルデータ利活用サービスの共同開発(仕上げ) 第15回: ワールドカフェ形式による最終成果物の発表・相互評価		
成績評価	評価の種類	評価割合(%)	評価基準
	小レポート① (データ分析・データ活用実習)	60	【到達目標1・2】の達成度を確認するため、第1回から第10回の授業で毎回、データ分析・データ活用に関する小レポートの提出を求める。手本どおりにサービスを構築することができているか、サービスをカスタマイズできているかについて評価する。
	小レポート② (データ活用サービス企画・開発)	40	【到達目標3】の達成度を確認するため、第11回から第15回の授業で毎回、データ活用サービス企画・開発に関する小レポートの提出を求める。第1回から第14回の授業で学んだことがどれだけ反映されているか、テーマとして取り上げる課題への取り組みについて評価する。
テキスト	富士通ラーニングメディア 著 『よくわかる Power BIではじめるビジュアル分析入門』富士通ラーニングメディア(2023年) 2,200円+税		
参考書	授業で適宜紹介する。		
授業時間外学修(事前・事後学修等)	1. 事前学修として、各回で取り上げる用語をあらかじめ提示するので、次回分についてはWeb等で調べ、ノートに図解で整理すること。 2. 事後学修として、毎回課される小レポートの内容を、各自パソコンを使って再現すること。		
課題に対するフィードバックの方法	小レポート①および小レポート②のフィードバックについては、授業で詳しく説明される。		
受講ルール等	1. 私語は授業の円滑な運営を妨げ、他の学生の迷惑となるので、厳禁とする。 2. 授業の到達目標を確実に達成するため、課題に真剣に取り組み、授業の事前・事後学修を欠かさず行うこと。 3. 授業の進め方や成績評価、詳しい受講ルールについては、初回の授業で説明される。 4. 本授業の履修には、「ICTとIoT」を履修済みであることが望ましい。		
連絡先(質問等)	授業終了後に、教室で質問を受け付ける。		

授業科目名	専門演習		
配当年次	3年次	配当学期	通年
クラス数	10クラス	単位数	4単位
必修・選択等の別	必修	授業の方法	演習
クラスの担当教員	吉田 雄介 / 田保 顕 / 大熊 伸二 / 石床 渉 / 高橋 紀穂 / 島田 裕之 / 濱島 朋子 / 松尾 有起 / 川田 里絵 / 有國 明弘		
科目区分	総合科目		
授業概要	この演習は、これまでに観光振興専門職を目指して学んだ全科目および、この演習と同時に学んでいる全科目との学修成果を、学生自身で総括する目的を持つ。学生は、「観光地研究」という統一テーマについて、担当教員による指導の下で、演習クラスの他の学生と協力しながら調査研究する。この演習のフィールドワークやワークショップを通して、観光振興専門職にとって不可欠となる、新たな課題を自ら発見する力、その課題を主体的に探究する力、課題に協働で取り組む力、課題を解決する力を身につける。また本演習では、生涯に渡るキャリア形成の一助となり、本学が推薦する「キャリア形成必読書」のうち、教員が指定する職業専門科目関連の書籍2冊の読み方を身につける。		
関連するディプロマポリシー	DP7 観光振興専門職としての総合力の育成		
キーワード	研究対象の知識、先行研究、事例研究、方法論、理論、現地調査、問題発見型現地調査演習、探索法、観察法、データ収集法、データ整理法、分析法、報告書作成法、仮説定立法、仮説検証法		
到達目標	【到達目標1】地域の基本情報の取得・分析の方法を説明できる。 【到達目標2】円滑なコミュニケーションのとり方を説明できる。 【到達目標3】ある地域の特性やその地域のまちづくりの優れている点、その地域が抱えている課題などを明らかにするために、自らの力で地域の基本情報を分析できる。 【到達目標4】自らの力で、基本情報を正確に分析し、他の地域の基本情報と適切に比較し、対象地域が抱えている問題点を指摘して、その手順を整理した報告書等を作成できる。 【到達目標5】クラス単位（もしくはクラス内のグループ）で実施する地域の課題発見のための討議や現地視察において、自ら積極的に、他者（他の学生、教員、地域の人々）と円滑にコミュニケーションをとることができる。 【到達目標6】報告書を期日までに作成するために、自らのスケジュールを自らの力で適切に管理できる。 【到達目標7】チームワークで他者と協調・協働して行動できる。 【到達目標8】グループワークでリーダーシップを発揮できる。 【到達目標9】指定された「キャリア形成必読書」の読み方を説明できる。		
授業計画	第1回：研究対象の知識 先行研究 第2回：研究対象の知識 事例研究 第3回：研究対象の知識 方法論 第4回：研究対象の知識 理論 第5回：現地調査の事前学修 資料・文献の収集 第6回：現地調査の事前学修 資料・文献の解説 第7回：現地調査の事前学修 資料・文献の分析 第8回：現地調査の事前学修 資料・文献の整理・まとめ 第9回：問題発見型現地調査演習 探索法 第10回：問題発見型現地調査演習 観察法 第11回：問題発見型現地調査演習 データ収集法 第12回：問題発見型現地調査演習 データ整理法 第13回：問題発見型現地調査演習 分析法 第14回：問題発見型現地調査演習 報告書作成法 第15回：問題発見型現地調査演習の総括 第16回：研究対象の知識 先行研究 第17回：研究対象の知識 事例研究 第18回：研究対象の知識 方法論 第19回：研究対象の知識 理論 第20回：仮説検証型現地調査演習 仮説定立法 第21回：仮説検証型現地調査演習 仮説検証法 第22回：データ整理法演習 調査記録のカード化 第23回：データ整理法演習 カードのグループ化 第24回：データ整理法 マッピング 第25回：データ整理法 データの分析 第26回：データ整理法 データの文章化 第27回：仮説検証型現地調査演習 検証結果分析法 第28回：仮説検証型現地調査演習 結果の検討法 第29回：仮説検証型現地調査演習 報告書作成法 第30回：仮説検証型現地調査演習の総括		

	評価の種類	評価割合(%)	評価基準
成績評価	授業参加への積極性 (グループワーク、フィールドワーク、ワークショップの取り組み)	20	【到達目標1・2、5～8】の到達度について、授業で課された活動や作業に主体的・合理的に取り組んでいたかを評価する。詳しい評価基準は、授業で説明する。
	プレゼンテーション	30	【到達目標1～4、9】の達成度を確認するため発表を求める。プレゼンテーションの発表内容と表現方法により評価する。詳しい評価基準は、授業で説明する。
	小レポート	50	【到達目標1～4、9】の達成度を確認するため、毎回の授業で小レポートの提出を求め、課題の理解度を評価する。詳しい評価基準は、授業で説明する。
テキスト	初回の授業で担当教員より指示する。		
参考書	授業で担当教員より適宜紹介する。		
授業時間外学修 (事前・事後学修等)	1. 事前学修として、授業で指示された内容で課題を作成し、次回までに提出すること(90分)。 2. 事後学修として、授業で指示された課題についての小レポートを作成し、次回までに提出すること(90分)。		
課題に対する フィードバックの方法	1. 授業参加への積極性については、授業でフィードバックされる。 2. プレゼンテーションについては、授業でフィードバックされる。 3. 小レポートについては、担当教員が確認したのち、担当教員のコメントを付して返却される。 4. このほか、担当教員が必要と判断した、もしくは学生から要望がある場合には、授業外でも対面(個人／グループ)によるフィードバックを行う機会が設けられる。		
受講ルール等	1. 授業の進め方や成績評価、詳しい受講ルールについては、初回の授業で説明される。 2. 消極的な参加態度は、他の学生の迷惑となり、授業運営に支障をきたすので、退席を求める。		
連絡先(質問等)	質問や連絡などについては、オフィスアワーに研究室で受け付ける。また、e-mailによる質問や連絡も、常時受け付ける。研究室の場所、オフィスアワーの時間帯およびメールアドレスは、初回の授業で提示する。		